準備を必要とする。陸相ホルディーン等は、既に徴兵制の採用を考慮したが、二五七一年にはヘーグ等によつてインド兵その他自治領軍との連絡によつてベルギー戰線派遣兵力を一六萬人とする計畫が成立したに留まつてゐる。

イギリス陸軍の徴兵制の問題は、戰爭の見透に極めて密接な關聯を有する。一體フランス軍と緊密な協同作戰を遂行することによつて短期戰を豫想するウィルソン等は、一擧に可及的多數兵力をベルギーに派遣してドイツ軍を粉碎すれば足ると考定し、後日に於いて派遣される援軍の多寡の如きは、戰局に決定的影響を齎し得ないと確信した。またイギリス本土防衞の增大の必要についても、これを比較的重視しなかつた。これに反してキッチナー、ヘーグ等は戰爭の持續期間を少くとも三年と觀測して、一擧に全兵力を集注することを警戒し、逐次的に兵力の增大のために將校數が消耗しないことを斟慮し、一〇〇萬に及ぶ兵力の漸進的養成を要望した。しかもドイツ、フランスの如き徴兵制度は、數代の努力と永き傳統によつてのみ可能であり、イギリスに於いては義勇兵制度に據るのが精神的に有利であると結論された。結局徴兵制を開戰前に布くことは不利と斷定され、事實迅速な兵力の增强は將校不足のためにはかに實現を期し難かつたのである。

開戰と共にこの問題はイギリス本土防衞のために二箇師團、兵力養成のために一定數の將校が留められることとなり、結局先づ大陸へ渡る兵力は四箇師團と定められたのである。

### （三）裝　備

イギリス陸軍は裝備の點に於いては殆んど無準備でさへあつた。開戰後幾十萬人となく參集したと言はれる義勇兵に對しても小銃が不足し、海軍省の備品中から約三萬挺を掻き集めて間に合はせると言ふ始末であつた。野戰重砲等も輕快な動性を重視したフランス陸軍の影響のもとに、極めて輕視せられてゐた。蓋し從來イギリス陸軍が小規模であつたことは、自然軍需工場の規模を小ならしめ、正規軍の所藏する些少な軍需品のほかには何らの貯藏も無かつたのである。キッチナー、ヘーグ等と雖も、直觀的に長期戰を覺悟してゐたものの、兵力以外の點について明快な見解を表明し得なかつたと考へられる。

### 三　ベルギー中立の問題とイギリス、フランス兩軍協同作戰

イギリス、フランス協同作戰遂行の上にベルギーの中立如何は重要問題である故に、イギリスは豫め外交工作を以てこれが打診に努力したが、ベルギーは少くとも表面上は自主的態度を堅持し、イギリス、フランス側に言質を與へなかつた。

ドイツ軍のベルギー侵犯は殆んど公然の秘密であつたが、イギリスは自國輿論に對する顧慮からも、ドイツの中立侵犯以前に積極的に防衞的進出を表面化させなかつた。このイギリス、フランス側のベルギー戰線に關する受動的態度は、作戰上の不利益として殘つたものである。しかし實際に於いてはベルギー軍のドイツ軍に對する意想外の抵抗によつて、イギリスは利する所が多かつたのである。

### 四　イギリス陸海軍に對する觀察

二五七一年夏に開かれたイギリス帝國國防委員會の臨時會議に於ける檢討を轉機として、イギリスの

戰爭準備は從來の個個別別の部署に於いて立案されつつあつたものが漸次綜合され、陸軍と海軍、また統帥と政治の連絡も著しく緊密になり、謂はば總力戰的態勢が確立されたのである。卽ち

(1) 陸海軍の作戰上の協同連絡（當時いまだ海軍は直接封鎖と、ドイツ沿岸上陸との可能性を信じてゐたが、この後次第に方針の檢討乃至統一が行はれた。）

(2) 陸軍部內に於ける短期戰論、長期戰論等の對立、ベルギー作戰の意義、或はフランス陸軍に對する評價等について漸次意見が統合された。

(3) 外交と軍部の作戰との連絡も有機的なものとなる。例へば、戰時廻報の整備。これは外務省の國交緊張狀態報告に基いて、警戒期間中の各省擔當措置を綿密に規定したものである。（陸海軍の動員準備、通信檢閱、外國人管理、在港敵船並に對敵通商の處分、特殊法律の停止等。）

(4) 海軍に於ける軍政と軍令及び政治との緊密な連携の成立。これには海軍參謀部を海軍大臣の隷下に置いたこと。文官の海軍大臣チャーチルの活躍が議會、特に豫算の問題と作戰との聯關を圖つた事は注目に値する。

(5) この間に陸海軍共にフランスとの協同作戰に於いて具體案を整備した。

## 第三項　內政

イギリスは開戰の名目のためにベルギー中立問題を選んだこと等を考へ合せれば、その內政指導は相當に巧妙であり、事實開戰當初から國民の支持を得てゐたのである。戰爭準備期に於けるその施策に一貫するものは、民衆の意向に特に留意したことであり、その主なるものを擧げれば次の如くである。

一　社會的諸施設により民衆の關心を把握する一方、ドイツ海軍擴張案を繞る外交的妥協について努力す。

二五六五年成立したキンメル、バンナーマン內閣は貿易海運業、その他の部面に於ける深刻な失業が主としてドイツの進出による打擊であることを認識せしめ、これが救濟のために勞働者補償法、老衰者扶助法、最低賃銀法、疾病及び失業保險法、小土地所有法等の社會的諸施設を實現して、當然增稅を竢すべき軍備擴張を、少くとも二五六七―六八年まで回避する旨を標榜する一方、ドイツ海軍擴張案によるイギリスの不安を除去するためにあらゆる外交折衝に傾注したのである。

二　軍備擴張の負擔を主として貴族、地主に課し、また軍需產業による失業救濟を圖る。

備考

二五六九年藏相ロイド・ジョージは、軍備擴張のための新增稅を主として大土地所有者、不勞所得者等の保守的貴族階級の犧牲に於いて斷行し、二五七一年以降は上院の豫算拒否權を事實上廢止した。

三　社會主義政黨をして極端な反戰運動に赴かしめなかつたのは、戰爭準備の財政的負擔が社會政策的顧慮に於いて課せられたこと、外交上に於いては常に平和維持に努力するかの如き立場を採り得たこと、內外に對してイギリス外交は輿論の支持によつてのみ動くことを表明し得たこと（實はそれによつ

て他國に言質を與へることを避けたのである)等の理由に基く。

## 第四項　外　政

イギリス外交の基本的方針は左の二點に要約される。

一　イギリス傳來の世界的地位の保持――それを目標とするドイツの壓迫

二　その目的から生ずるフランスの地位の保全

これが外交政策上に現れた主なるものは左の如くである。

(1)　二五六四年英佛協商の成立

(2)　二五六七年英露協商の成立

これらはドイツの攻勢に備へるものであり、守勢に立つて寧ろ歐洲の平和を希望するものであつたにせよ、結局はドイツ包圍の形勢を誘致した。

(3)　あらゆる外交問題に於けるロシヤ、フランス兩國側支持の態度表明。

二五六五年モロッコ問題、二五六八年ボスニア、ヘルツェゴヴィナ二州併合問題、二六七一年アガヂール事件等に於いて反ドイツ的立場に立つてドイツを牽制した。

(4)　二五七二年イギリス、ドイツ海軍交渉

いよいよ國際情勢の逼迫しつつあつたこの年、イギリスは陸相ホルディーンをベルリンに派遣し、ドイツの建艦計畫緩和の最後的交渉を試みたが、ドイツ側から、ドイツ、フランス開戰の際の中立が要求されるに及んで、完全にイギリス、ドイツ妥協の餘地皆無なることが明かにされた。

(5)　二五七二年イギリス、フランス軍事協定

外相グレーは、フランス大使カンボンに對して極めて曖昧な形に於いてではあるが、イギリス、フランス兩陸海軍當局の間の協議を參考に供すべきことを聲明した。

(6)　二五七四年英露海軍協定に關する交渉の開始

この年イギリス國王ジョージ五世のフランス訪問に際して、グレーも隨行したが、その時フランス外相ドゥーメルグは、三國同盟側の地中海勢力增大を憂慮し、ドイツ海軍をバルト海に牽制することの必要を力說し、英露海軍協定を提言した。グレーはその原則に同意しつつも、輿論がロシヤとの接近を歡迎しないこと、ロシヤがドイツに攻擊されても危殆に瀕するとは考へられないこと等を指摘してイギリスの立場を闡明した。しかし兎も角も交涉は開始され、海軍當局の手に委任されたのである。但し具體的成果を得る以前に戰爭は勃發したのである。

このイギリス、ロシヤ交涉の事實はドイツ側に洩れ、ドイツ新聞紙上で論ぜられたために、二五七四年六月一一日イギリス下院で質問されたが、グレーは「戰爭勃發の際イギリスの態度を拘束すべき條約は存在しない」ことを確言した。

### 三　イギリス外交政策の概括

裏するに來るべき戰爭に於いて、一度ドイツとフランスとが戰へば、フランス側に趨るべきイギリスの姿勢は既定の事實であつた。しかしそれだけにイギリスは、イギリスとドイツと相戰ふ事態の重大性を知悉し、能ふる限り危機を延期せんとするのである。例へばバルカン戰爭に際しては、ロシヤ、オーストリア二國は動員してそれぞれ國境に兵力を集中したが、イギリス、ドイツ二國が辛うじてこれを抑止したのであり、その際グレーはドイツに向つて、イギリスはバルカン問題に直接の利害はないが、セルビアにオーストリアが宣戰し、ロシヤがオーストリアに向つて開戰し、ドイツ及びフランスもこれに促されて參戰する時は、イギリスはフランスの崩壞を默視し得ず、その結果が如何に趨くか測り難いことを露骨に表明してゐる。それは二五七四年に現實に繰り返された如くである。

かくてイギリスは一方にロシヤ、フランスと結托し、ドイツを牽制することによつて危機を遷延せんとし、他方にロシヤ、フランス兩國に向つては最後的言質を與へまいとしてゐる。その點ではイギリス外交の輿論の尊重と言ふ名目が、內外兩方面に對して大いに利用されてゐるのである。

# 第三章　戰爭の勃發

## 一　ドイツ側

二五七四年六月サラエヴォ事件から同年八月歐洲戰爭勃發に至るまでの經緯を概觀するに、當時イギリス、フランス、ドイツ、ロシヤいづれも戰爭を欲せず、且つ事態が戰爭にまで進展すべき判斷をも有しなかつた。從つて戰爭防止のため眞劍な努力も盡さず、互に姑息な外交手段と威嚇によつて自らの要求を貫徹し得ると信じてゐた。當時政治的に和戰の決定權を握つてゐたのはイギリスとドイツであつて、殊にオーストリアの決心を左右し得べき地位に在るドイツが斷乎たる態度を採つたならば、戰爭の防止必ずしも不可能ではなかつたのである。

しかるにウィルヘルム二世治下のドイツには政治の中心たるべき人物なく、當時ドイツ皇帝は漸く老境に入つて昔年の覇氣消磨し、ベートマン首相は姑息の平和主義を固執して不決斷であり、ドイツ皇帝の側近にも明識果斷の政治家を缺いてゐた。

かくて同年七月二三日、オーストリアの對セルビア最後通牒により事態急迫し、戰爭の危機迫るもな

ぼ不擴大、不干渉主義を唱へてオーストリアの挑戰的強硬態度を抑へることもせず、イギリスの調停案を眞劍に考慮することもなく、或は斷乎開戰を決意してオーストリアを支持するにもあらず、結局優柔不斷の裡にドイツは戰爭に捲込まれて行つたのである。

## 第一節　開戰決意

ドイツをして戰爭の不可避を考へ、萬一に備へて準備を初めさせたのは二五七四年七月二六日のロシヤの動員準備着手である。

しかしこれは國境要塞に於ける一部動員に過ぎなかつたのでドイツはなほ眞劍にならず、同日行はれたイギリス外相グレーの四箇國大使會議による調停案にも反對した程である。

七月二八日オーストリアの對セルビア宣戰布告によりロシヤ軍部が極度に硬化するや、ドイツは漸く事態の重大化を知り、もはや局地的解決の困難を考へて漸くオーストリアを强烈に抑壓し初めたのである。

翌七月二九日午後ロシヤ皇帝が總動員を發布するに至り、つひにドイツも開戰の決意をするに至つた。かくて同日夜ドイツの鐵道及び主要建築物の防護、休暇兵の召集、國境要塞の充員召集等を發布したのである。

しかし開戰が公式に決定されたのは七月三一日の御前會議に於いてで、同日朝臨時危險狀態の勅令が發せられた。注目すべきことはこの時になつても、なほイギリスの中立を得ることに努むべきことが結論され、海相ティルピッツの如きは强硬にベルギーの中立侵犯を思ひとどまるべきことを提言してゐるドイツ首腦部間に於ける戰爭指導に對する不一致の程が窺はれる。

備考　ドイツの作戰計畫はロシヤの動員完結遲きを前提として策定されてゐるため、ロシヤの動員はドイツを刺戟し、ドイツに開戰の決意を强要するの結果を導いたものである。

## 第二節　宣戰に關する諸問題

一　八月一日ロシヤに對し宣戰布告す。

ロシヤに對する宣戰に關し、首相及び外相の法理論と軍部の實際的解釋が對立した。卽ち

(1)　參謀總長、陸相及び海相の意見は、宣戰はドイツを攻擊者である如く感じさせ、中歐同盟諸國に戰爭參加回避の口實を與へる恐れがある。

(2)　故に宣戰布告せずに直ちに戰鬪行動を開始すべきであると主張した。

(3)　首相及び外相はこれに對し、二五六七年の戰爭開始に關するプラーグ條約に基いて、ベルギーに對するドイツの行動を正當化するため宣戰布告の必要を强調し、カイザーもつひにこれに同意した。

二　八月三日フランスに對し宣戰布告

フランスに對する宣戰に關しても首相と參謀總長、海相の間に激論が交はされた。卽ち

(1)　參謀總長及び海相は、既にドイツ、フランス國境に於いては小戰鬪が交はされ、實質的に交戰狀態にある故宣戰の必要はない。また外交上も宣戰は世界にドイツが好戰的であるかの如き感を與へて不利であるとし、宣戰の不利を說いた。

(2)　首相はこれに對し法理的の解釋を下し、「既にベルギー通過の最後通牒を出す以上、その目的がフランス攻擊にある故、當然フランスに宣戰しなければならない」と主張し、海相等の意見を肯かず宣戰することとなつた。

## 第三節　戰爭目的、戰力、作戰方針、戰爭準備との關係

### 第一項　開戰の名目

戰爭準備期に於けるドイツ帝國の大目標たる汎ゲルマン主義と世界政策とは、必ずしも國民の間に徹底せず、その戰爭目的に於いて明確を缺いてゐた。從つて戰爭勃發直前のドイツの外交にも不動の方針を缺き、このことはやがて開戰に導く政府の態度をして被攻擊者たるの名目を得ること、及び自國の行動を國際法的に正當化することのみに汲汲たらしめ、更に大切なる國家國民の總力を擧げて戰爭の遂行に集中し、且つ第三國をして首肯せしめ得べき戰爭目的を明確ならしめる努力を缺くこととなつた。蓋し當時ドイツは迅速なる勝利を信じ、かかる問題に深く介意しなかつたためである。

しかしその結果は、戰爭の經過漸次困難に赴くや戰爭目的に關する論議を生じ、反戰主義者をして輿論に惡影響を與へしめることとなつた。卽ち

開戰當初ドイツが中外に宣明した戰爭目的は次の如くである。

「フランスの軍用飛行機がベルギー上空を通過してその中立を侵害し、ウェーゼルに於いて鐵道に爆彈を投下せんと試み、アイフェル地方を飛行し、またニュールンベルク附近の鐵道を爆擊した。」

右の事實の眞否は固より不明であり、またかかる口實は當時外交的にドイツの立場を有利ならしめる效果はなかつた。

この點イギリスが長年國民の間に徹底し居るベルギー擁護の傳統的政策、卽ち大陸の對岸に於ける安全確保の政策を以て廟議及び輿論を開戰に導いたのとは著しい相違がある。

### 第二項　戰　力

一　動員の實況

(一)　動員兵力

動員第一日は八月二日である。

開戰當初編成された歩兵で直ちに戰場に使用し得る兵力は大體次の如くである。

現役兵——六七二大隊
豫備兵役——三七八大隊　計一、四二四大隊（約一一九師團）
補充兵役——八九大隊

この他動員當初國民軍を編成せしや否やは明らかでないが、これを戰線附近に用ゐなかつたことは確實である。

（二）動員狀況

開戰當初に於ける動員實施は一般に極めて整齊圓滿に進行し、何等の蹉跌もなかつたものの樣である。殊に最も注目すべきは、動員間軍隊の靜肅であつたことである。この際下士官以下の外出を禁じた部隊もあつたが、また一部の部隊に於いては夕刻から下士官以下の外出も許可し、軍樂隊の如きは殆んど連日市中行進をして士氣の鼓舞に努めた。

（三）動員の完結、進軍

現役部隊は五日間、豫備役部隊及び後備役部隊は七日間で動員を完結した。

また國民兵部隊の動員第一日は八月八日または九日であつて、その完結までに八日間を要した。

なほ若干の騎兵部隊は動員第一日以前に出發し、若干の歩兵部隊は平時編成の儘動員第一日の夜出發した。

以上の部隊が、國境に展開を終つたのは八月一七日である。

八月一八日前進に移つた總軍は、八月二二日から二四日にかけて、北方ではフランス、ベルギー國境、南方ではドイツ、フランス國境附近で大會戰を行ひ大勝を得た。

二　開戰後一年間に於ける戰場總兵力及びその損害

ドイツ軍は二五七四年九月上旬マルヌ會戰に於いて失敗し、作戰上の齟齬を來すや、玆に兵力增加の必要を認め、九月下旬、豫備兵大軍團の編成を行つた。內、五軍團は一〇月中旬より一一月上旬に亘るフランドルの會戰に參加した。

その後作戰の經過に伴ひ、逐次補充兵及び後備兵部隊を增加したばかりでなく、國民軍を漸次第一線に使用し、冬期にはその數著しく增加した。

この他ドイツは再び豫備兵四軍團半を新設したため、二五七五年二月末に於けるドイツ軍歩兵の全兵力は概ね次の如くである。

兵力

| | | |
|---|---|---|
| 現役兵 | 六七二大隊 | 一九四五大隊（一六二師團）兵員約三二四萬人 |
| 豫備兵 | 三七八大隊 | |
| 新設豫備兵 | 二四〇大隊 | 一〇% |
| 後備兵 | 三二七大隊 | |

戰前のドイツ男子總數三二五〇萬人に對する割合

一九三

補充兵——一八一大隊
國民軍——一四七大隊
開戰後一箇年間に召集せる總兵員約八五〇萬人
開戰後一箇年間に蒙れる總損害約一八三萬人

### 第三項　海軍の作戰方針

イギリスの主力艦隊はドイツ海軍軍令部の豫期した如くに、開戰と同時に一大決戰を行ふことをせず封鎖作戰に出て來た。かくてドイツ海軍もやむなく決戰を斷念し、イギリスの警備竝に封鎖艦隊に對し小規模の攻擊を行ふに止めた。

この作戰方針樹立に際し、海相と首相及びカイザーとの意見對立し、結局海相の讓歩により守勢をとることに決定したが、その結果は兵士の士氣を沮喪させ、つひには反戰思想をさへ植ゑつけてドイツ敗北の最大の動機を作ることとなつた。

卽ち政治家の作戰への干渉は、往往にして力の損耗に對する打算にとらはれ、戰爭の精神的要素を閑却する懼れがある。戰爭は果斷を必要とする。

備考

(1) 海相ティルピッツの意見

イギリス艦隊の採りつつある封鎖作戰に對する小規模の攻擊のみでは、敵の主力に對して大打擊を與へることが出來ないのみならず、ドイツ側の戰力は漸減するのみである。また戰鬪に參加しない我が軍港內の兵士は漸次志氣沮喪し、これがやがて全軍に影響するであらう。故に卽時決戰するを要する。

(2) ベートマン首相の意見

イギリスは未だ徹底的に參戰する決心はなく、寧ろ仲裁役を引受けて妥協的媾和となるだらう。その際の背景として有力艦隊を保有して發言權を强化することが重要である。またイギリスに對し決戰を强ひることは、眠れる獅子を醒ますこととなり、政治上不利である。

(3) カイザーの意見

艦隊を愛するのあまり、戰禍にさらすのは忍びないとの感强く、結局首相の意見に贊成した。

## 二　イギリス側

### 第一節　開戰決意

イギリスにあつては二五七四年八月一日夕、ドイツ、フランス兩國共に動員して、その衝突の不可避が明確となるに及んで漸く戰爭を決意したものの如くである。これまで極力紛爭の局限化に努力したが、グレーの調停案は失敗した。七月三一日に至つてもなほドイツに向つて、對ロシヤ及びフランス開戰を

延期せしむべく努力し、一方フランスに對して最後的支持の約束を與へなかつたのである。

更にイギリス閣内に於いては大部分が戰爭回避論者であり、海相チャーチルと陸軍側では、フランスの作戰を支持するウィルスンとが即時參戰の意圖を有してゐたにすぎなかつた。但しグレー、クロー等外務當局者は既に戰爭の不可避を覺悟してゐた。

既に戰爭を決意するに至つて、その翌八月二日漸くグレーはフランスに對して、フランス大西洋岸防備の保障を與へた。この日保守黨のランズダウン、ボナー・ロー兩名から徒らに態度不決についての勸告の書狀が到着した。八月二日夕ドイツがベルギーに最後通牒を發して軍隊通過の同意を求め、八月三日朝ベルギー國王から援助の依頼があつたことは、イギリスの參戰を確定的なものとした。それと同時にこれは一般輿論に對する有力な參戰の名目を與へることとなつた。

## 第二節　宣戰に關する諸問題

イギリスは宣戰に關してはベルギー中立問題を利用したのである。二五七四年七月三一日イギリスは、ドイツ、フランス兩國に向つてベルギーの中立を尊重するか否かを質した處、フランスは即座に尊重すると回答したが、ドイツの態度は曖昧であつた。ドイツの對ベルギー通牒、及びイギリス國王に宛てたベルギー王よりの援助依頼の後、イギリスは八月三日對ドイツ最後通牒を發し、翌四日宣戰布告した。

その日グレーは議會に於いて歐洲の形勢を說明し、同盟等による拘束はないが傍觀し難き實情を述べてベルギー中立問題に論及し、開戰の決意を明かにして喝采を博した。ボナー・ローは保守黨を代表して政府支持の態度を明かにしたに對して、勞働黨首領マックドナルドは、國家の危險に陷れることを述べて中立の維持を主張したが、議會の大勢は政府の支持に赴いた。

かくの如くベルギー中立問題は、イギリスの宣戰布告の名目として國内的には輿論指導の上にも效果的であつたが、ドイツ軍のベルギー侵犯は殆んど公然の祕密であつたし、事實イギリス陸軍はその前提のもとにすべての作戰計畫を進め、場合によつては積極的に進出せんとさへも企ててゐたのであるから、實は何らイギリスの參戰を人道的に是認する理由とはならない筈である。しかし兎も角も國内輿論の支持を受けるに恰好な名目となつたことは事實である。

# 第四章　短期戰の見透のもとに於ける戰爭指導

## 第一項　概觀

歐洲戰爭は明確に長期戰の型態を採つてゐるが、最初は交戰各國いづれも短期戰の見透のもとに戰爭に突入した。殊に開戰の主動性を採つたドイツは、極く短期間に戰爭を終結し得る確信のもとに、綿密な作戰計畫を樹て、これに從つて戰爭を指導したのである。然し二五七四年九月のマルヌ敗戰を契機に陣地戰の樣相を呈して來ると、ドイツの戰爭指導は短期戰體制から長期戰體制へ大轉換せざるを得なかつた。これに對してイギリス、フランス兩國は、開戰の時期選定について受動的であり、同じく短期戰の見透を持つてゐたとしてもドイツの場合と違つて、勃發當初に於ける戰線の混亂を調整しつつ長期戰指導に移行したために、その切換の時期は劃然としない。

## 第二項　戰爭勃發當初に於ける主なる會戰の狀況

### 一　西部戰線

ドイツはロシヤ、フランス兩國を敵とする兩面戰爭の豫想のもとに、豫てから立てられてゐた謂はゆるシュリーフェン作戰計畫に基いて、二五七四年八月開戰と共に西部戰線に大攻勢を執り、フランス野戰軍を殲滅して一氣に勝負の大勢を決せんと企圖した。

これに對して聯合軍は退却作戰に出で、ドイツ軍をして徒らに奔走に疲れしめ、その間に戰備を充實して後攻勢に轉ぜんとし、敢へて勝利を急がず持久戰の態度に出た。またベルギー軍の抵抗意外に強く、一リェージュ要塞の攻略に二週間を要したこと、更にシュリーフェン計畫のモルトケによる改變が、右翼の攻擊力を强化した等の事情のため、フランス野戰軍の包圍殲滅の機會を逸し、徒らに戰線のみ延長して兵力に不足を生じ、短期決戰は大蹉跌を生ずることとなつたのである。

#### (一)　ベルギーの自衛策―要塞構築と對英接近

ベルギーは過去の經驗から、ドイツ、フランス開戰の場合中立が無視されるであらうと豫想し、二五六六年イギリスと對ドイツ防禦協約を結んで、リェージュその他の堅固な要塞の築造に餘念がなかつた。更に二五七四年夏、歐洲の危機が切迫するやその年七月三一日動員令を下し、翌日フランスからベルギー中立遵守の保障を得た。故に八月二日ドイツが軍隊の國內通過承諾を求めるや、國王はこれを國際條約の蹂躙であるとして拒絶し、他方八月三日イギリスに援助を求めて保障を得た。しかるにドイツ軍は翌日ベルギーに侵入し、その當然の結果としてイギリスはドイツの敵に加はつたのである。

#### (イ)　ベルギー軍の抵抗

ベルギー軍の抵抗は案外强く、ドイツ軍はリェージュ要塞のために二週間も進擊を阻止されたが、四二

糧重砲の集中射撃を以て一六日これの攻略を終へ、八月二〇日にはブリュッセル、八月二三日にはナミュールを占領して、ベルギーの大半を席捲した。かくてドイツ軍は潮の如くフランスの東北國境に殺到したが、ベルギーの激しい抵抗によつてその通過に案外の時日を費した事は第一の蹉跌であつた。この間にイギリス、フランス聯合軍は、兵をフランス、ベルギー國境地方に集めて防備を固める餘裕を得たのである。

（ロ）東部戰線の不備に基く西部戰線の作戰齟齬

東プロイセンの戰線に於いてもロシヤ軍の動員は意外に速く行はれ、配備不充分のドイツ軍を破つてベルリンを脅かした。ドイツ帝は急遽ヒンデンブルクを起用すると共に、西方から兵力の一部を割いてこれに當らしめた。そのためにタンネンベルクの勝利は得られたが、當然シュリーフェン計畫の遂行に齟齬を來したのである。

（ハ）モルトケによるシュリーフェン計畫の改變

しかし一層重大なドイツの過失は參謀總長モルトケによるシュリーフェン計畫の改變である。

備考

即ちシュリーフェンは左翼の敗戰を意とせず、右翼軍と左翼軍との比を七對一として著しく右翼を強化したのに對して、モルトケはフランス軍がかねて恢復を希望してゐるエルザス・ロートリンゲンに壓倒的優勢を以て侵入せんことを顧慮し、右翼と左翼の兵力比率を三對一として著しく左翼を強化し、右翼によつてベルギー著しくは北フランスに於いて決戰を求めると同時に、エルザス・ロートリンゲンに於いても左翼軍により全面的決戰を行はんとした。

このモルトケ計畫は二兎を追ふ結果となり、フランス軍のエルザス・ロートリンゲン侵入計畫を挫折せしめたが、ドイ軍の右翼は第六、第七軍の應援を受けず、また第二軍の二箇軍團を東部戰線に送つたことと相俟つて兵力が薄弱になり、既定の作戰遂行に困難を來したのである。

（二）マルヌの會戰

二五七四年九月初頭、パリーを目睫に控えたマルヌ河畔に於ける會戰、謂はゆるマルヌ會戰こそは實に歐洲戰爭の形勢を決定した最も重大な戰である。フランス軍司令官ジョッフルは左翼の形勢不利を見て、固き決意のもとに全軍の退却を斷行した。ドイツ軍は勢に乘じて追擊し、不用意にも一氣にマルヌ河畔に進出し、パリーの北方を迂廻する最初の計畫を棄てて、ヴェルダンとパリーとの間に右翼の全兵力を集中し、この地域に於いてフランス軍を壓迫せんとした。この危機に際してフランスの上下はよく憂忍自重し、大統領ポアンカレーは全幅の信賴をジョッフル元帥に置いて軍の行動を悉くこれに一任し、政府をパリーからボルドーに移した。

備考

ジョッフルはドイツ軍を充分有利な地點まで引寄せた後、九月五日一齊に反擊し、フランス軍を侮つて深入りしすぎたドイツ軍に大打擊を與へた。しかしなほドイツ軍は優勢であつたが、參謀總長モルトケが前線の戰況を見誤り、またその指令に行違ひがあつたために、ドイツ軍はまさにフランス軍をセーヌ河以南に擊退すべき好機を斷念し、九月一二日エーヌ河の線まで總退却した。

一週間に亘るマルヌ會戰によつてフランス軍は、ドイツ軍侵入の鋒先を挫いてパリーの危急を救つたのみでなく、以後ドイツ軍をして著しい進出をせしめなかつた。一擧にフランスを屠らんとしたドイツ

の意圖はここに全く失敗に歸し、モルトケは引責辭職し、それ以後はドイツの最も嫌ふ持久戰となつた。かくてドイツ軍敗北の兆は既に戰爭第一年目にして早くも現はれたのである。

（三）フランドル會戰

マルヌ會戰に失敗して塹壕戰に入るや、戰線の硬化を恐れたドイツの新參謀總長ファルケンハインは、ベルギーの海岸地方を占領し更にドーヴァー海峽の港灣を占領して再び攻勢に轉ぜんことを企てた。聯合軍もまたドイツ軍の側面を衝かんとして戰線を海岸に延長し、戰線は遙か北海の海岸にまで擴延した。その結果アントワープは一〇月九日ドイツ軍の手に落ちたが、イープルは聯合國陸海防禦軍の手中に留つた。このフランドル會戰は西方に於ける最後の機動戰であり、今後戰線は全く固定して陣地戰に轉化したのである。

## 二　東部戰線

（一）東プロイセン方面

東方に於いてはロシヤ軍の動員は意外に迅速に行はれ、その軍隊は二手に分れて、一はオーストリアのガリチア方面へ、他はドイツの東北隅なる東プロイセンに侵入した。東プロイセンのドイツ第八軍はシュリーフェン計畫に基いて配備が手薄であつた上に、最高幹部間に軋轢があつたので作戰の統一を缺き、ロシヤの大軍に壓倒されて遙かワイセル河方面に退却せんとした。この情勢はドイツ人、殊にベルリン市民に非常な不安を與へたのである。

かくてカイザーは急遽西部戰線から二箇軍團を東部戰線に轉ぜしめると共に、新たに當時豫備役にあつたヒンデンブルク將軍を第八軍司令官に任命した。ヒンデンブルクは參謀長ルーデンドルフと共に敗軍を收容し、故意にこれを退却せしめ、ロシヤ軍を大軍活動に不便なタンネンベルクの湖沼地帶に誘き出して俄かにこれを包圍し、僅か二日間で殆んど殲滅した。

（二）ガリチア方面

ガリチア方面に於いては、オーストリア軍はロシヤ軍の機先を制して逸早くポーランドに侵入したが一方セルビアに大軍を派遣したためにこの方面にのみ兵力を集中することを得ず、且つ軍隊中に多數の異民族を包含してゐたので戰意が旺盛でなかつた。その結果、間もなくロシヤ軍の强襲に逢著して頻りに破れ、レンベルク、ヤロスラウの兩要塞を奪はれ、侵地を棄てて九月中旬にはカルパチア山脈の線まで退却し、ドイツ軍の助勢を請ふた。

タンネンベルクの勝利によつて行動の自由を得たヒンデンブルク軍は、シュレージェンからポーランドに進出し、ワルソーに進擊してオーストリア軍の左翼を援護した。しかしオーストリアはなほ大軍をセルビア方面に派遣し、またドイツもファルケンハインが西部戰勝主義を固執して東部戰線に軍を割くことを拒絶したので、同盟軍の戰鬪力は充分でなく、やがて一〇月二六日ロシヤの大軍とイヴァンゴロド附近に戰つて敗退し、東プロイセンには再び危機が襲來した。

二月一日ヒンデンブルクは東部軍司令官に任ぜられ、一一月四日にはファルケンハインもドイツ軍の

攻勢を東部に移し、西部戰線の膠着を東部の勝利によつて打開せんと決意するに至つた。ヒンデンブルクは依然ルーデンドルフを參謀長として敏腕を揮はしめると共に、左翼に騎將マックンゼンを配置して敵の右翼を衝かしめ、以下全線に於いて攻勢に轉じた。その攻勢はロシヤ軍を席捲することには成功しなかつたが、ロシヤ軍のガリチア侵入を絶望ならしめた。

二五七四年末以來激戰が斷續したが、その翌年五月マックンゼン麾下のハンガリア軍の必死的中央突破が成功して、大勢は漸くロシヤ軍に非となり、つひに八月四日にはボーランドの首府ワルソーをさへ放棄して退却しなければならなかつたのである。

ロシヤ軍は莫大な損害を受けたが未だ全滅し得ず、一方オーストリアはイタリア遠征に全兵力を要したために、東部戰線は殆んど劣勢なドイツ軍のみに委ねられることとなり、進擊に出たドイツ軍もリーガ、デューナブルク、ピンスク、ヅブノ、ツェルノヴィッチに亘る長蛇の戰線を漸く維持するにすぎなかつたのである。

かくてドイツは全力を盡してロシヤ軍を遠く東方に壓迫したがつひに殲滅するに至らず、兩面戰爭の窮境を脫することは出來なかつたのである。

### 三　南部戰線

#### （一）トルコの參戰（同盟國側）

包圍戰に陷つた同盟國はバルカン方面に口を求めて外資の輸入を受ける必要に迫られ、トルコを始めセルビア以外のバルカン諸國を同盟軍に引入れるために渾身の努力を試みた。かくてトルコは二五七四年一〇月同盟側に立つて參戰することとなつたのである。

備考

これに對して聯合軍は、ダーダネルス海峽を突破してイスタンブルを占領せんと企て、それによつてなほ向背未決のバルカン諸國を誘導し、同盟軍を背後から衝くと共に、ロシヤ軍と直接に聯絡せんとした。從つて二五七五年二月以降、イギリス、フランス聯合艦隊は海峽の突破を敢行したが、兩岸のトルコ要塞の砲擊に直面して多大の艦船を喪失したにすぎなかつた。また陸軍はゲリボル半島に上陸してこれを占領せんとしたが失敗し、二五七五年末にはイスタンブル占領に絶望して撤兵した。

トルコは他方スエズ運河を攻擊してエジプトを威嚇せんとしたが、イギリス軍の反擊にあつて成功しなかつた。イギリス軍はまた二五七五年の春頃からイラク（メソポタミア）のバグダードを目ざして前進し、まさにこれに迫らんとしたが、トルコ軍の逆襲を受けてクト・エル・アマラに圍まれ、籠城數箇月の後全軍トルコに降伏して、イギリスのイラク經略は一時頓挫した。

#### （二）ブルガリアの參戰（同盟國側）

ドイツはトルコの引込には奏效したが、なほトルコとドイツ及びオーストリアの間には、ブルガリアルーマニア、セルビア等が介在して、同盟國はトルコと充分に連絡することが出來なかつた。これと完全に連鎖するためには、ブルガリア、ルーマニアを味方に向けたが、セルビア軍の反擊は意外に手强く、二五七四年一二月には、一旦陷れた首都ベルグラードもセルビア軍のために奪ひ還された。それ以後兩軍の間には小競合が續けられてゐたのみであつたが、二五七五年の秋に入るや、同盟軍は是非ともイスタンブルの道を開いて、包圍戰の苦痛を免れんとし、ボーランド方面に大勝した軍の一部を割いてバルカン

方面に南下せしめ、セルビア攻略を行はしめると共に、ブルガリアに向つて參戰を慫慂した。

セルビアとギリシアとに奪はれた地方の回復を望んでゐたブルガリアは、同盟國の勸誘を受けて、それを目的達成のための好機と考へ、二五七五年一〇月ロシヤとセルビアに對して宣戰した。かくして同盟軍はブルガリア軍を加へた壓倒的大軍を以てセルビア及びモンテネグロに迫つたので、セルビアは忽ち本土を失ひ、アドリア海のコルフ島にまで追詰められ、二五七六年一月にはモンテネグロ、アルバニアも同盟軍の手に落ち、ここに同盟軍は完全にトルコと連繫し得るに至つた。イギリス軍はギリシアの抗議を無視してサロニカに軍隊を上陸せしめたがブルガリア軍の妨害に遭ひ、そのために時機も遲れてセルビアの急を救ひ得なかつたのである。

(三)　イタリアの同盟離反

イタリアは三國同盟の一員ではあつたが、戰爭勃發以來局外中立を維持して形勢を觀望し、自國に有利な條件を與へる側に味方せんとの態度を持してゐた。ドイツ、オーストリア兩國はこれを己れの側に吸引せんと努力したが、イタリアは二五七五年四月オーストリアに對して中立維持の報償として謂はゆる「恢復されざるイタリア」の地方を要求し、オーストリアが要求の全部を容れず、その反對に聯合國がかかる權利を約束するや、五月三國同盟を破棄してオーストリアに宣戰したのである。

イタリアはかねて垂涎してゐたイソリング河及びトリエスト方面に攻撃を行つたが、領土併合の野心に瞞られて準備不充分のままに試みた戰爭であつたために、劣勢ながらも頑強なオーストリア軍の抵抗に出會して何ら著しい效果を擧げ得ず、常に大損害を蒙つた。ただイタリアの參戰は同盟軍の東方進撃を牽制して、ロシヤ軍を全滅から救濟したのみの效果にすぎない。

かくして東部戰線及び南部戰線に於いては、同盟軍はしばしば赫赫たる勝利を擧げ、また西部戰線に於いても幾度か激戰が繰り返されたが、それらの會戰も全體の戰局には大した變化を與へず、東西兩方面の戰線は嚴存して同盟軍は籠城戰の窮境から脫し得なかつた。かかる狀態に於いて戰爭は第三年目の二五六七年に入るのである。

## 四　海上の戰況

(一)　イギリス艦隊の間接封鎖によるドイツ艦隊の蟄伏

開戰當時ドイツの海軍力は未だイギリスに及ばず、戰艦の比率もイギリスの六割であつた。從つてドイツ海軍の主力は北海を敵艦隊の封鎖に任せたまま軍港から離航進出し得ず、專ら快速小艦艇の奇襲によつてイギリス海軍を攻撃する方法を選んだ。故にバルト海と黑海とを除くのほか、ドイツはすべての海洋上の制海權を失ひ、海外に於けるドイツ植民地は悉く聯合國に占領されたのである。

**備考**

イギリスは始めドイツ巡洋艦及び驅逐艦隊の奇襲に少からず苦しんだが、日を經てその配備も整ひ、ドイツ海軍の攻撃も效果を擧げることが困難となつた。爾後ドイツ海軍はますます蟄伏主義を採用し、イギリス海軍もまた主力をスコットランドの北端に集中して間接封鎖を施行し、北海に於いては專ら小艦艇若しくは潛水艦の小競合があつたにすぎない。二五七四年八月二八日にはヘ

ヘリゴランド島沖海戰があり、二五七五年一月二四日にはドッカーバンクに於いて巡洋艦隊の遭遇戰も行はれたが、兩海戰共主力の不動のために何ら決定的効果を示す戰鬪ではなかつたのである。

（イ）ヘリゴランド島沖海戰

二五七四年八月二六日、偵察のためにヘリゴランド・バイトに派遣してあつたイギリスの一潜水艦は、ドイツの輕巡洋艦隊の出動を報じたので、かねてイギリス東岸を警戒しつつあつたイギリス第一巡洋戰隊は急遽諸隊を糾合し、ヘリゴランド島附近に進出して攻撃部署についた。兩軍の兵力は次の如くである。

| | | |
|---|---|---|
| イギリス | | |
| 巡洋戰艦 | 五隻 | |
| 裝甲巡洋艦 | 六隻 | |
| 輕巡洋艦 | 八隻 | |
| 驅逐艦 | 三九隻 | |
| 潛水艦 | 八隻 | |
| ドイツ | | |
| 輕巡洋艦 | 四隻 | |
| 驅逐艦 | 約二〇隻 | |
| 潛水艦 | 若干 | |

飛行機　若干

戰鬪は、ヘリゴランド島附近哨戒の任務にあつたドイツ驅逐艦が、イギリス軍の伴動部隊を發見したことから開始せられ、ドイツ軍の該哨艦を先頭として約二〇隻の驅逐艦がこれに續航し、また水上飛行機もこれに參加してイギリス軍の上空を飛び、なほ附近にあつた輕巡洋艦もこの攻撃に參加せんとしたが、濃霧に妨げられて彼我の所在を知ることが出來ず、却つてイギリス軍のため各艦個個に擊破せられるに至つた。午後一時半ドイツ軍は、輕巡洋艦アリヤドネの擊沈せられたのを最後として、その他の艦艇は或は沈沒し、または逃走してしまつた。イギリス軍は敵の潛水艦並びに機雷を顧慮して、逐次戰場を退き根據地に引揚げた。兩軍艦艇の喪失はイギリス無し、ドイツ輕巡艦三隻、驅逐艦一隻。

（ロ）ドッカー・バンクの海戰

二五七五年一月二四日ドイツ軍の一枝隊は、イギリス東岸砲擊の目的を以て西航中、たまたま哨戒中のイギリス水雷戰隊に發見せられ、ここにドッカー・バンクの海戰を見るに至つた。これに參加した兩軍の兵力は次の如くである。

| | |
|---|---|
| イギリス | |
| 巡洋戰艦 | 五隻 |
| 輕巡洋艦 | 七隻 |
| 驅逐艦 | 約二六隻 |

ドイツ
　巡洋戰艦　三隻
　裝甲巡洋艦　一隻
　輕巡洋艦　二三隻

戰鬪は午前七時兩軍水雷戰隊旗艦の交戰より開始せられたが、ドイツ軍はイギリス軍主力を發見するに及んで直ちに退却に決し、全軍進路を反轉して南東に遁逃を企てた。イギリス軍主力はこれを急追し、ドイツ軍の殿艦裝甲巡洋艦ブリュッヘルに砲火を集中してこれを大破落伍せしめ、漸次他の巡洋戰艦ザイドリッツ及びデルフリンゲルにしばしば火災を起さしめ、その他の諸艦に大損害を與へた。

イギリス軍にあつては、先頭の旗艦ライオン及びタイガーは、他の後續艦に擢んでて冒進したため猛烈なドイツ軍の砲撃を受け、殊にライオンは最も奮戰した結果、敵彈のため片舷機の運轉不能となり、更に水線下に一彈を受けて前部防水區劃に浸水し、僚艦に曳航せられて辛うじて本國に歸着するを得た。かかるライオンの損傷による果敢な追擊の不能と、ドイツ軍の輕巡洋艦が退却を掩護するため機雷を投下したのとにより、イギリス軍はヘリゴランド西方七〇浬の地點に於いて追擊を中止し、全軍引返すこととなつた。

ドイツ軍に於いてはブリュッヘルが最も奮戰して、大損害の中にも最後までよくドイツ魂を發揮したが、イギリス驅逐艦の魚雷が命中して沈沒し、悲壯な最期を遂げた。

## (二) 植民地分遣艦隊の活躍

本國海軍の不振に反して、ドイツの軍艦は戰爭前世界各地に分遣されてゐた關係から、諸方面の海洋に於いて驚異的活動を行つた。

備考

膠州灣を根據地としてゐたドイツ東洋艦隊は、裝甲巡洋艦二隻、輕巡洋艦三隻、假裝巡洋艦一隻の勢力を以て南太平洋方面に向ひ、二五七四年一一月一日劣勢のイギリス艦隊をチリーのコロネル沖に擊破し、南米の南端を迂廻して本國に歸航せんとしたが、同年一二月八日フォークランド諸島沖海戰に優勢なイギリス巡洋戰艦艦隊に攻擊されてつひに全滅した。同じくドイツの東洋艦隊に屬する輕巡洋艦エムデン號は、本隊と分れて南洋及びインド洋方面に出動し、巧に聯合國海軍の目を掠めて、劣弱な軍艦乃至商船を攻擊して聯合國の海運に大打擊を與へた。しかし最後に武運盡きて、二五七四年一一月九日濠洲の軍艦によつて發見攻擊せられ、つひにスマトラ島の西方ココス島近海に追迫され擧措して自沈した。

またドイツの假裝巡洋艦で本國を出航し、大西洋乃至アメリカ方面に活動したものも少くなかつた。殊にメーヴェ號、ゼーアドラー號、ヴルフ號等の諸艦はイギリス海軍の北海封鎖線を突破し、中立國商船を裝つて敵國商船に攻擊を加へ、その中のあるものは長期に亙つて活躍した後無事本國に歸還してゐる。

## (三) 潛水艦の活躍

海上の堂々たる決戰に於いてイギリスに及ばぬドイツが、唯一の新戰法として誇つたものは潛水艦戰であつた。開戰後間もなく潛水艦が劣勢海軍の最も有利な武器の一つであることを知るや、ドイツはこれによつて盛んに聯合國の海軍を攻擊し、敵國の商船擊沈に努力し、地中海及び北海に目覺ましき活躍をしてゐた。イギリスが北海全部を封鎖し、ドイツへのあらゆる食糧道を切斷するや、ドイツはイギリ

スに對する敵愾心を極度に刺戟され、報復的に潛水艦戰を以てイギリスを屈服せしめんとするに至つた。二五七五年二月四日、ドイツはイギリス近海のすべての水域を海戰範圍と宣言し、國籍も問はず、この範圍内にある船舶を撃沈すべきことを聲明した。この潛水艦戰の強化は效を奏し、生活資料の大部分を海外に仰ぎ、しかも世界第一の商船國であるイギリスに著しい脅威を與へたのである。

しかしかくの如きドイツ諸艦船の活動も、要するに奇襲以外のものではなかつた。それは海上に於ける戰局の大勢にはなんらの變化なく、依然としてイギリス海軍の優越は維持され、ドイツは封鎖の窮境を脫却するわけには行かなかつたのである。

# 一　ドイツ側

## 第一節　開戰當初に於ける擧國一致態勢

戰爭の勃發と共に各國民はいづれも愛國心を昂揚して大いに一致の實をあげたが、ドイツ國民の戰意は特に鞏固であつた。

戰爭前ドイツの内部には多くの對立があり、陰惡な狀態にあつたが、それらは開戰と同時に一時悉く影を潛め、あらゆる階級乃至黨派は祖國を危難から救ふために團結して、謂はゆる城内平和が成立したのである。

### 第一項　ドイツ社會民主黨の愛國的態度

この時人人の注意を最も强く惹いたものは、戰爭前のドイツに於いて驚くべき發達を遂げてゐた社會民主黨の態度であつた。彼等は初めオーストリアの態度を帝國主義の發現であると非難し、極力戰爭の防遏に努めたが、一旦戰端が開かれるや、從來の態度を一變して政府の聲明した自衛國防の戰爭目的に贊同し、戰爭の支持を決定して軍事費を協贊した。これによつてドイツの國内平和は完成し、政府及び軍部と社會民主黨との妥協提携が行はれ、社會民主黨は國内の經濟問題處理のために政府と協力し、また他國の社會黨に對してドイツへの同情を喚起する目的を以て宣傳を試みたのである。

國民のかかる擧國的決心を促進するために、政府當局が多大の努力を拂つたことは言ふまでもない。いづれにせよ、戰爭開始と共に各政黨間の政爭を中止せしめて城内平和を作り出し、軍部、政府、國會の一致を作り上げて銃後の政治的紛糾を除去したのは、ベートマン首相の大なる功績である。

### 第二項　經濟面に於ける國民の愛國的態度

經濟力に於いても戰爭初期のドイツは大體强固である。

貨幣信用の方面では、それ以前から危急の場合に備へて堅實な努力が續けられてゐたので、ドイツ金融の基礎は甚しい動搖も示さなかつた。卽ち證券相場の急落の中にあつてドイツの株式界は、イギリス、フランスに比して遙かに好調を示し、國立銀行は充分の金準備を保有してゐたために、他の交戰國に於ける如く急遽支拂猶豫を行ふ必要はなかつた。さうして二五七四年九月には他のいづれの國にも先んじて第一回戰時公債を發行した。しかも四五億と言ふ巨額の公債が全く他の國の助けを借りることなく、僅かに二箇月間に拂込まれてゐる。かくて開戰後間もなくドイツの財政的基礎は確立され、戰爭資金の調達は極めて良好に行はれたのである。

かかる信用方面の充實はドイツ經濟の基礎の安定性を示すものであり、ドイツの產業はその當時に於いては、農產物に於いても工業原料に於いても、概ね自給自足の域に達してゐた。その技術や操作も充分短期の戰爭に耐えるだけのものを持つてゐたのである。

## 第二節　戰爭指導の行詰及びその原因

ドイツは二五七四年八月末のヘリゴランド沖海戰及び九月初のマルヌ會戰を境に明らかに戰爭指導に行詰を生じ、開戰當初の短期戰體制から長期戰體制への切換を行つてゐる。

かくの如くドイツの戰爭指導に行詰を來さしめた主要原因と考へられるものは、戰爭前に於ける政治外交上の見透の失敗、戰爭準備の不充分、作戰計畫の蹉跌、海軍力の劣弱とその消極作戰等を擧げ得るが、その最も根本的なものは、指導者間の不和と不適任である。

卽ち首相ベートマンの不徹底の平和論と優柔不斷、參謀總長モルトケの消極性、また海相テイルピツツと陸相ファルケンハイン、陸相と參謀總長、更にヒンデンブルクとの間に於ける深刻なる不和等の惡條件が、ヘリゴランド沖及びマルヌ河邊の敗戰に一度最初の見透が挫折するや、急角度にあらゆる方面に障碍を惹き起すこととなり、開戰後僅か一箇月半の二五七四年九月一四日には早くもモルトケを辭職せしめることとなつたのである。

## 第三節　戰爭指導方針の轉換とこれに伴ふ障碍の克服

### 第一項　概括

戰爭の持久化によつてドイツの戰爭指導方針は漸く長期戰に對處すべく變化し、しかも經濟的側面に於いては幾多の障碍にも拘らず國內戰線の結束によつて比較的容易に切換を行ひ得た。しかし結局長期戰はドイツ人の最も不利とする所であつた。故にドイツは一方に於いて長期戰に對する方策を立てると共に、他方に於いては依然戰爭を可能的短期間に終結せしめるために全力を盡したのである。この意味

で二五七五年はドイツの戰爭指導の混冥期と言ふべきである。

備考

この年には戰線の膠着を打開するために游水艇戰が初められ、陸上でも各地に激戰が交されたが、それらも大勢にはなんらの變化をも與へ得なかつた。この間ドイツは外交戰に於いてトルコとブルガリアの獲得に成功してセルビアを壓服したが、イタリアはビューローの出馬斡旋にも拘らず、二五七五年末乃聯合國側に加擔し、やがてルーマニアもこれに參加するに至つた。かくてドイツは開戰後一箇年餘にして戰爭を有利に終熄せしめる見込を殆んど失つてしまつたのである。

從つてドイツ當局も最早今次の戰爭が苛烈な長期の消耗戰であることを自覺せざるを得ず、それに應ずる戰爭指導の方針を確立しなければならなくなつた。しかるに戰爭の長期化と戰勝の希望の減退は、ドイツのあらゆる方面に多大の影響を及ぼし、團結の强固さを誇つた國內戰線に動搖を生ずるに至つた。これこそは、今や長期戰指導の方策が嚴嚴遂行さるべき時に當つて重大な障碍であり、ドイツはつひにこの障壁を克服し得ずしてやがて敗戰に至るのである。

## 第二項　經濟界に於ける戰時的再編成

### 一　ドイツ經濟界の根本的缺陷

何ら持久戰を豫期せず、謂はゆる消耗戰爭に對する對策が殆んど樹立されてゐなかつた當時のドイツ經濟官憲に於いては、科學的裝備が發達した近代戰にあつて、勝敗は短時日の間に決定されるであらうとの見解が支配的であつた。彼等は戰爭の長期化について、また戰爭と經濟との關係について明確な考を持たず、從つて戰爭に必要な眞の統制的計畫は企てられてゐなかつた。かくて戰爭の長期化はドイツの經濟界に頗る深刻な影響を與へ、二五七四年末頃戰爭の急速な終結が望薄となるや、ドイツの經濟界は全面的な建て直しの必要に迫られたのである。

### 二　經濟界の戰時的再編成

持久戰の段階に入ると共に、今度の戰爭が國民經濟のすべてを擧げての鬪爭であることが次第に明瞭になつて來た。かくして先づ經濟界の長期戰體制を整へるにその再編成を必要としたのである。

備考

先づ第一にドイツに深刻な脅威を與へたのは、イギリスの對ドイツ經濟封鎖による對外貿易の杜絕であつた。食糧、棉花、羊毛、銅、錫に於いて海外に依存する所の多かつたドイツは、これによつて痛烈な打擊を受け、戰線への軍需品の補給にさへも支障を來さんとしたのである。かかる危機を克服するためには、生產力の擴充、企業の轉換、代用品の育成、消費の合理化等によつてあらゆる經濟活動を長期戰に適應する如く變更しなければならない。この點に於いて最も功績のあつたのは、二五七五年二月藏相に就任したカール・ヘルフエリツヒである。大規模の國立窒素工場を設けて爆藥の最大原料たる窒素の供給を不足なからしめたのは彼の大きな業績である。

經濟の戰時的再編成に當つてあらゆる生產能力を可能なる限り軍需產業に結集するため、ドイツは比較的有利な狀態にあつた。卽ち

開戰前ドイツの輸出產業の中心をなしたのは重工業と化學工業であつたから、これを軍需產業に轉換せしめることは困難ではなく、また戰時原料品についても、一部の非鐵金屬類を除いては豐富な資源に惠まれ、しかもその生產技術は高度の發展を遂げてゐた。

更にドイツでは戰前既に各種の企業聯合がかなりの程度に發達してゐたので、この組織をそのまま戰

時經濟體制の中に取入れ得たのである。

從つてドイツに於ける戰時經濟問題の重點は、戰時工業統制組織の確立よりも、勞動力の配分と一部不足を告げる原料の確保並びに食糧問題であつた。

(1) 勞動力の配分。政府は戰前甚しく分散してゐた職業紹介所の統一を圖り、帝國中央職業紹介所を設置して最大の努力を拂つた。

(2) 工業用原料の確保に關しては、開戰後直ちに陸軍省内に戰時原料課が創設され、全ドイツ國内に現存する原料の管理を開始した。

(3) 食糧問題——切符制度の實施。多數の農民を戰場に送り、且つ海外からの供給を杜絶されたドイツに於いては、何よりも先づ食糧消費の制限が行はれなければならない。政府は早くも二五七四年一〇月この方面の經濟統制を始めたが、翌年一月には一人一日のパン及び穀物の最高消費量を決定し、切符制度を實施した。これと並んで分配の制限及び最高價格決定が行はれ、帝國穀物局や帝國分配局等の活動によつてその徹底を期したのである。

これらの處置は戰爭の初期に於いては頗る圓滑に行はれ、國民の日常生活は悉く當局の管理と指導の下に置かれ、謂はゆるドイツ的組織は機械の如く整然たる活躍を示した。ドイツが不利な籠城戰の狀態の下にあれ程の持久力を見せたのは、明かにかかる背後の經濟的協力によるものである。國民の決意も固く、敵愾心も烈しく、開戰後約二年間、ドイツの擧國的團結は殆んど動搖を生じなかつたのである。

## 第三項　反戰思想の克服

### 一　社會民主黨の反戰的態度

既に早くから社會民主黨の内部に於いてはこの戰爭に對する態度について意見の對立があつたが、それは日を逐つて激化していつたのである。

その戰爭反對論者の主張は、ドイツが勝に乘じて戰爭を遂行するのは、侵略と併合とに傾くもので自衞的國防戰爭の趣旨に反し、今後ドイツは平和の促進に努力すべきであると言ふ提議であつた。

備考

かかる傾向は早くも二五七四年一二月の第二回軍事費協贊の際に現はれ、リープクネヒトは唯一の反對投票を敢行し、戰爭の帝國主義的性格を指摘して、平和のための社會主義運動を強調した。その翌年三月の第三回協贊に於いては反對投票は二票となり、同年四月ローザ・ルクセンブルクとメーリングによつて發行された「インターナチオナル」誌は、社會民主黨幹部の態度を攻擊して明瞭に階級鬪爭の標識を掲げ、今後この一派はインターナチオナル團と呼ばれた。

一方戰爭の膠着に伴ふ國民の不滿を見て、黨内中間派のハーゼ、カウツキー、ベルンシュタイン等も漸く平和主義へ轉向し始め、二五七五年六月リープクネヒトやローザの一派と提携して、最初の防禦戰爭は既に侵略戰爭と化した故、これを支持することは自黨の主義に對する裏切りであると宣言し、擧國一致の放棄と階級戰の再開を叫んだ。

### 二　政府の彈壓政策

しかし民主黨の反戰運動はなほ國内の輿論を動かすに至らず、彼等の間でもなほエーベルト等に率ゐ

られる社會民主黨の多數派は依然として政府の方針を支持し、國民の對外的團結を說き、それと共に政府は反戰派に對する嚴しい彈壓を行つたが、しかし兩派の對立は次第に激しくなり、社會的不安を誘發せんとする形勢を示してゐる。

これは言ふまでもなく長期戰指導の上の重大な障碍であり、しかもそれをつひによく克服し得なかつた所にドイツの大きな缺陷が存したのである。

## 二　イギリス側

### 第一節　開戰當初に於ける擧國一致態勢

#### 第一項　國民の擧國一致態勢

イギリスの參戰もまた躊躇と逡巡の擧句豫想外の時に行はれたのであるが、その結束は戰爭目的にベルギーの中立侵犯等を立てたことが效を奏し、ドイツの擧國一致と竝んで驚歎すべきものがある。

イギリスが全世界に亘る廣大な領土を如何に統御するかは、重要にして且つ困難な問題であり、殊にイギリス本國ではアイルランド問題の紛糾が激しく、戰前には殆んど內亂を釀さんとする狀態であつた。

しかるに廟議が一度開戰と決するや、本國の各政黨は一切の政爭を擲ち、內政問題の解決を戰後に保留して擧國一致ドイツ膺懲のために協力することに決し、アイルランド問題に關する論爭も、戰爭の終るまで中止されることとなつた。

#### 第二項　イギリス海外領土の本國への協力

イギリスの海外領土はいづれも歐洲戰場に出兵して本國を援助し、しばしば動搖を報ぜられたインドもつひに本國に對する奉公の念を棄てず、南阿聯邦、カナダ、オーストラリア、ニュー・ジーランドはすべて熱心に本國を後援した。かかる海外領土の忠誠は、一面にはこの機會にイギリス帝國に於ける自己の地位を高め、利權の擴大を圖らんとの意志に出たのであるが、他面には海外イギリス人間に共同利害の念が強く、帝國的自覺を持つたためでもある。

### 第二節　戰爭第二年に於ける戰時體制の整備

イギリス、フランスに於いては開戰の主動性を失つたことが却つて最初から臨機應變の處置を採らせることとなり、戰局の推移に應じて徐徐に長期戰態勢を整へて行つたので、戰爭指導上の行詰とそれに基く戰爭指導方針轉換を明確にし得ない。

## 第一項　國民生活の戰時體制化

イギリスの戰爭決意は堅かつたが、しかし充分の準備なくして開戰したために、初期には諸種の軍國的施設の點で遺憾ながらドイツに頗る劣つてゐた。殊にイギリス陸軍にとつては全く不用意の戰爭であつたから、陸軍大臣キッチナー元帥以下の當局者は、先づ戰場に送るべき兵士の徵集に惱まねばならず、從つて戰況は殆んど常に不利であつた。しかし開戰後政府、その他識者の努力は推奬に値するものがある。卽ち戰爭指導者は續續法令を發布して國民生活の軍國化を圖り、自由放任を特色とするイギリスを規律と命令によつて戰爭に適應せしめ、國民もまたこれに服從して戰場の兵士に對する軍事的、社會的援助に於いて遺憾なからんことを期したのである。

そのための諸施策の中で最も重要なのは軍需省の設立による勞働力統制と軍需品の計畫生產とである。イギリスは元來多數の勞働者を有してその勢力は侮り難く、彼等に對する處置を誤ればここから破綻する惧れがあつたので、政府は勞働者を戰爭目的に一致せしめ、軍需品の製造に從事せしめるために多大の苦心を拂つた。軍需品の供給は戰爭の勝敗に多大の影響があるところから政府は特にその注意を怠らず、就中二五七五年五月に軍需省の新設に際して、自由黨のロイド・ジョージを軍需大臣としたことは注目すべき事實である。

## 第二項　擧國一致內閣の出現

### 一　國民の一部に於ける反戰論

イギリスの擧國一致はよく實現されてゐたが、その反面に國民の一部に反戰論のあつたことも否定し得ない。イギリスでは勞働黨、社會黨はかねてから反戰論を唱へてゐたが、それは國を擧げての戰爭決意を破壞するには至らなかつた。開戰と同時に閣員中要職を占めた二、三の人は、戰爭は自說に反すとして辭職した程であつたが、そのために政府の行動には却つて鞏固な一致を齎し得たのである。

### 二　政府部內に於ける不統一

イギリスは本來不用意に戰爭に參加したために、軍備に缺陷も多く、その結果戰況が甚だ進捗せず、二五七五年に入るとこれに對する非難が漸く高まつて來た。また政府部內でも海軍の作戰上異論を生じて、フィッシャーが辭職すると言ふ事件さへも起つてゐる。

### 三　戰時內閣としての自由黨の不適任聯立內閣の出現

かかる形勢を見て政府はつひに意を決し、二五七五年五月自由、統一兩黨の聯立內閣を組織し、多數の統一黨員の入閣を見た。これは實にイギリス戰時の變態現象であつて、自由黨內閣の方針が戰爭の遂行に不便であるために、自由黨內閣自身が統一黨化して行つたものであり、謂はゆる擧國一致內閣にほかならなかつたのである。かくて自由と平和のイギリスも、戰爭目的達成のために忽ち擧國一致したのである。

# 第五章　長期戰の指導

## 第一項　概　觀

歐洲戰爭の初期に於いて各國は戰爭遂行の固き意志を示し、擧國一致の實を擧げたのである。しかし同盟國側では戰爭第三年目の二五七六年中頃から國民の戰爭決意に漸く動搖を生じて來た。これに反して聯合國側に於いては往往國民の戰爭氣分を裏切る事實が起つたにも拘らず、大體に於いてドイツ打倒の決意は搖がず、却つてますますその强靱性を增して行つた。聯合國が終局の勝利を收め得たのは實にこの固き決意によるものと考へられる。

一　ドイツの場合

ドイツ國民も二五七六年までは戰爭に對する擧國一致を明かに示した。しかも現下の戰爭が完全な長期戰であることを次第に强く自覺して籠城戰の決心を固め、戰爭指導もまたそれに從つて整然と行はれた。しかしその際にもあくまで持久戰を不利とするドイツは、常になんらかの方法によつてこの窮境を打開せんとの意圖を棄てることなく、二五七六年にはかかる目的を以てヴェルダン要塞戰が試みられた。しかしこの攻擊は五〇萬人の生命を犧牲にしてなんらの成果も擧げ得ず、その後西部戰線に於けるドイツの勝利は絕望となり、その結果參謀總長が更迭して新たにヒンデンブルクが就任した。またこの年五月末には有名なユトランド沖海戰が行はれ、ドイツ艦隊はイギリス艦隊に大損害を與へたが、しかしてれも北海に於けるイギリスの海上權を動かし得ず、ドイツはなんらその包圍狀態を打開してゐないのである。

かかる戰況の不利は戰爭の長期化と共に國內に深刻な影響を與へることとなつた。卽ち激戰の連續は兵力の莫大な損耗を來して國內勞働力に不足を告げた。しかも戰場に於ける消耗の增大と共に軍需生產に破綻を生ぜしめた。輸入の杜絕は食糧の缺乏を來し、これが民心を甚しく動搖せしめて反戰運動を培ひ、政治の不安を助長した。

かくてドイツ國民の抵抗力は著しく弱められ、長期戰の指導は二五七七年頃からは主として國內問題に重點が置かれる事となつた。

二五七六年末に於けるベートマン首相の媾和提議、その翌年正月から始められた無制限潛水艦戰の如きは、いづれも國內からするドイツの崩壞を防がんとする最後的打開策の發動であつたのである。

かくの如き努力が水泡に歸した時國內の破綻は最早救ふ術なく、それは直ちに戰線にも波及してキール軍港に於ける兵士の暴動となつた。要するに初期に於いて戰況有利に展開しつつある間、少くも戰勝の見透がつく間は、消耗戰の打擊も生產の隘路も擧國的努力によつて切り開き得たが、持久戰に入り、戰線が膠着して國民の戰爭意識を煽る如き戰況發表がなくなつた時、殊に內線作戰を餘儀なくされて來

たドイツ國民の生活は深刻な影響を蒙つた。かくて戰爭後半に於いて政府は專ら國內問題に努力を集中せざるを得なくなつたのである。かかる事情の實相は次の如くである。

(一) 二五七六年に於ける戰況の不利が齎した戰時體制破綻の兆—「ヒンデンブルク綱領」による打開策。

二五七六年に至つて戰爭の長期化と戰勝の希望の消失は最早や不動の事實となつたが、これは忍耐強いドイツ國民にも不安と動搖を與へずに置かなかつた。先づ第一に、かの整然たるドイツの戰時經濟組織に次第に破綻の徵候が現はれて來た。卽ち

(イ) 財政の方面では戰時公債の成績は膨脹する戰時支出に伴はず、しかもドイツは戰時課稅の問題を徹底し得なかつた。從つてドイツの財政は次第に惡化して行つたのである。

(ロ) 生產の方面では壯丁の不斷の出征によつて勞働力の不足が顯著化し、また國內の天然資源も次第に涸渴して來た。しかも軍需品の需要は增大する一方であるために、この時期に入れば生產力の殆んどすべては軍需資材の生產に向けられた。しかしその結果消費材の生產は減退して、物價の騰貴と共に國民の生活はいよいよ苦しくなつて行つた。

二五七六年の後半にはヴェルダン會戰によつて深刻な彈藥の缺乏が襲來したので、これを補給せんとして、新參謀總長ヒンデンブルクは、「ヒンデンブルク綱領」と言ふ厖大な軍備充實計畫を實施したが、これは確かに軍需工業勞働力の調達には役立つたが、それに比例して國內の一般給養は絕望的に惡化して行つたのである。

(二) 食糧缺乏が政治の不安を來し、國民の抵抗力を破壞す

またイギリスの飢餓封鎖が日每に加はつてドイツの食糧は甚しい缺乏を告げて來た。農民の出征、馬匹の徵發、肥料の不足、これらの事情は不順な天候と相俟つて、二五七六年以後恐るべき農產物の減產を來し、これはやがてドイツ國民の抵抗力を破壞するに至るのである。

かかる事態のもとに、二五七七年以降ドイツ國內には政治上の紛爭、內閣の更迭、社會黨の活躍、下層社會の不穩等がますます國民を非境に陷れてゐる。ドイツの運命は今や一つの轉換期に直面し、それ以後は持久戰の決意が破れて籠城的境遇を脫せんとする念が漸く弱く、あらゆる手段を盡して能ふる限り速かに戰爭を終結せしめんとする態度が明かになつた。

戰線の膠着、經濟狀態の惡化等の事情は社會不安を誘發せんとする形勢を示したが、殊に社會民主黨の平和運動は二五七六年以降顯著になつたのである。

ドイツの敗因はここにその端を發したと言へる。

(三) 國內の不安除去策としての媾和運動と無制限潛水艦戰

戰爭勃發後二年にして決定的勝利の望が薄くなり、國內に多くの不安の端が現れ始めると共に、ドイツ當局者の間にも漸く焦燥の色が現はれ、なんらかの新手段を講じて局面の打開を圖らんとするに至つた。これ卽ち媾和運動と無制限潛水艦戰である。

(イ) 媾和運動。ベートマン首相はドイツの經濟的扼殺の危險を憂へ、一刻も早く適當な時期に有利に媾和する必要があると考へ、絶えず敵國側の樣子を窺つてゐたのである。

備考

二五七六年一二月ドイツ、オーストリア軍がルーマニアを席捲して首府ブカレストを占領するや、ベートマン首相は今こそ「光榮ある媾和」の機會であるとし、アメリカ大統領を介して聯合國側に媾和交涉を提起してゐる。

しかしドイツは自ら媾和の提議者でありつつも、媾和のための具體的條件を示さず、徒らに戰勝者としての利益を失はないことに努めたのみであつたために、聯合國は平和熱望の誠意を缺く證據であるとして直ちにドイツの提案を拒絕し、却つてドイツ擊滅の決意を固くするに至つた。

かくて媾和運動は失敗に終つたが、結局ドイツは政策上媾和を利用しすぎた感があり、ベートマン首相の平和提起は國內でも種種の非難を蒙り、この頃から彼の地位は次第に困難を加へて來てゐる。

(ロ) 無制限潛水艦戰。ドイツが新たに局面打開の非常手段として行つた作戰こそ無制限潛水艦戰である。ドイツは既に二五七五年に潛水艦戰を始めてゐたが、非武裝船舶に對する攻擊は行はなかつた。しかしこの程度の活動によつては敢に徹底的打擊を與へることは不可能であつた所から、海軍當局は無制限潛水艦戰の開始を主張した。これは新たにアメリカを敵國に廻す危險があり、且つこれによつて豫想の如く速かにイギリスを屈服せしめ得るか否かにも多大の疑問があつたので、政府側はかねてこの實行に反對し、海軍當局を抑へて來た。しかし媾和運動の全く失敗した後はベートマンもこれを阻止する術もなく、二五七七年一月三一日殘された唯一の手段として無制限潛水艦戰を開始したのである。

これと同時にアメリカはドイツに宣戰を布告し、且つこの無制限潛水艦戰はなんら決定的な成果を擧げ得なかつた。蓋しドイツは軍政兩局の意見の對立から新戰術開始の好機を逸し、敵に對抗策を與へる餘裕を與へてゐたのであり、從つてこれもまた戰況の不利を打開する威力を發揮しなかつたのである。

(四) 敵國の輿論攪亂策としての萬國社會黨大會開催計畫

ドイツは平和運動を利用して聯合國內の非戰熱を煽り、以て聯合國の結束を打破せんと試みたことも一再ではなかつた。二五七七年の夏ストックホルムに開かれた萬國社會黨大會の計畫はその一例である。この時ロシヤ及びドイツの社會黨は北歐中立國の社會黨と連携してストックホルムに會議を開き、聯合國側の社會黨員にも參會を希望した。イギリス並びにフランスの社會黨或は勞働黨代表者はこれに應ぜんとしたが、イギリス及びフランス兩政府は固く參會を禁じたためにこの會議は所期の目的を達し得ず、ドイツの聯合國攪亂策はつひに失敗に終つたのである。

(五) 二五七七年以降に於ける國內狀態の混亂と媾和の提唱

かかる間に同盟諸國間の紐帶は漸く弛緩し、ドイツ國內の狀勢はいよいよ逼迫を告げて來たが、その際に最も注目すべきことは、二五七七年前半に於ける多數派社會民主黨の方向轉換である。彼等は獨立社會民主黨離脫後も大體政府の方針に一致してゐたが、やがてこの派も保守派並びに軍閥の極端な戰爭遂行說に反對し、現狀維持の平和、內政上の諸改革を要求し、中央黨、國民進步黨と提携して謂はゆる

國會多數派を形成し、反政府的態度を示し始めたのである。ベートマンは人心の動搖を憂へて四月七日「復活祭勅令」を發布して國內問題の整理を約したが、これも一時的效果を擧げたにすぎず、間もなく國內情勢は再び尖銳化し、國會多數派はあらゆる手段による急速な平和を主張するに至つたのである。さうして軍部と國會多數派の對立を根深く藏しつつ、ドイツは一路轉落の路を辿つて行くのである。

しかしこの時意表外の事件が起つてドイツの苦痛を輕減するかに見えた。それは東方に於けるロシヤの崩壞である。ロシヤは二五七七年三月帝政が倒れた後も戰爭を續けてゐたが、一一月ボルシェヴィキ派が政權を掌握すると共に、各國に向つて無併合無賠償の平和を提議し、先づドイツとの間に單獨媾和の交涉を開始した。これは幾度か決裂に瀕しつつもつひに翌年三月ロシヤ、ドイツ間にブレスト・リトウスク媾和が成立し、ドイツはここに東方を警戒する必要がなくなつたのである。

ドイツは二五七七年一〇月イタリア戰場に於いて大勝を博し、またロシヤとの媾和によつてバルト海沿岸諸州を自己の保護下に置くこととなり、またウクライナと結んでこの地から穀物を獲得した。かくて主戰派の意氣は大いに揚り、一時悲觀に傾いたドイツの民心も再び緊張を取り戻した。そこで政府當局は主戰派の勢力に壓倒せられ、かくて今や東方に於いて節約し得た全兵力を以て西部戰線に最後の飛躍を試み、これによつて聯合軍を一擧に擊破することとなつた。この大攻擊は二五七七年三月二一日から七月中旬にかけて五回に亘つて行はれ、聯合軍の心膽を寒からしめたが、しかし結局その目的を達せず、參謀本部も最早や戰爭を純軍事的に終結せしめることを斷念するの已むなきに至つたのである。

備考

ここに於いて社會民主黨の政府攻擊は甚しくなり、且つ國內生活の窮迫は日に加はり、各地に同盟罷業が起つた。ヘルトリング內閣はかかる內外多難の政局に當り得ず、つひに二五七八年九月辭職し、次いで一〇月三日平和主義のマックス內閣が出現し、民主的改革を宣言して民心を鎭撫すると共に、アメリカ大統領ウイルソンに向つて休戰の請願を通達してゐる。

しかるにウイルソンは容易に休戰を肯んじなかつたので、マックスはドイツ軍の占領地撤退を行ひ、潛水艇戰を中止せしめ、また議會は憲法の改正を決議して、議會自ら宣戰媾和の決定に參與する權能を有すること、首相は國會に對して責任を有すること等を宣言し、ドイツはここに初めて純粹な立憲國となつたのである。間もなくドイツ國內には革命が起つて帝政は崩壞し、これと同時に聯合國との休戰が成り、エルツベルガーが新共和國を代表して一一月一一日コンピエーヌの森に於いてフランスのフォッシュ元帥と休戰條約に調印した。これによつて滿四年三箇月を費した歐洲戰爭は漸く終熄したのである。

二　イギリスの場合

（一）　戰爭の長期化による國民的團結の持續

ドイツに於いては戰爭長期化して戰況必ずしも思はしからざる狀態が繼續した時國民の動搖は甚しく、やがて革命にまで發展したのであるが、イギリス及びフランスに於いてはかかる場合內閣の改造、指導者の交替によつて民心鎭靜し、國民の戰意はますます强化されたのである。聯合諸國が最後までドイツ

打倒のために團結し得たのは、イギリス國民のこの決意に負ふ所が多い。

按するにドイツの場合はイギリスに較べて内線作戰の不利のほかに、戰爭指導者の決意が國民に充分反映せず、更に指導者自身にも果斷に缺くる所が多かつた。イギリスに於いてはドイツの無制限潛水艦戰によつて食糧問題が深刻となり、民心の動搖が甚しい際でも、内閣の改造と指導者の決意と努力によつて鎭靜に歸し、革命にまで至らなかつた所にイギリス、ドイツ兩國民間の根本的相違があり、これが究極に於いて聯合國を勝利に導いたものである。

（イ）行政機構改革による難關打開

イギリスに於いては二五七五年五月聯立内閣が成立し、戰爭に直接關係ある閣僚から成る軍事内閣委員會に戰爭の全權を與へた。また兵器の不足を補ふためには、自由黨のロイド・ジョージを軍需大臣として軍需品を製造督勵せしめ、更に二五七六年には國民一部の猛烈な反對を斥けて斷然一般徵兵制を布いた。またドイツ潛水艦のために輸入が困難となり、食料品が缺乏して物價が騰貴するや、新たに食糧大臣を置いて、食料品の給與その他一切の管理に當らしめた。更に二五七六年六月には、キッチナー戰死の後を受けてロイド・ジョージが陸相となつた。これらはいづれも國内の團結を堅くし、軍事の機務を敏活ならしめんための措置であつた。ただ首相アスクィスの漸進的態度は、ロイド・ジョージの勇猛果敢な意見と相容れず、つひに二五七六年一二月辭職してロイド・ジョージ内閣の成立を見るに至つた。ロイド・ジョージ新内閣の成立は戰爭の運命に重大な意味を持つものである。卽ち、それ以後イギリスは不撓不屈の驍將ロイド・ジョージのもとに一意戰爭目的の達成に邁進したのである。聯合諸國が最後までドイツ打倒のために團結したのは、イギリス當局の强固な決心に負ふ所が多い。

（ロ）反戰運動の克服

イギリスの勞働黨は、黨としては政府の方針に一致してドイツ打倒の決意を示したが、黨員の若干は依然非戰運動を續け、二五七六年一月には政府の强制徵兵法案に反對し、またその翌年夏のストックホルム萬國社會黨大會の企てには參列を決議したが、政府のため阻止せられて成功しなかつた。なほ勞働黨首領ヘンダーソンの如きは擧國一致内閣の閣員であつたが、しばしば平和的意見を發表して内閣を去り、頻りに媾和促進を主張した。更に二五七七年夏ローマ法王が媾和斡旋を提議した際には、イギリス閣員中耳を傾けたものもあつた。

しかしかくの如き事實にも拘らず、大體に於いてイギリス國民の戰爭決意が日を逐ふて鞏固になつて行つたことは明かである。

（ハ）アイルランド問題も政府の抑壓によつて鎭定す

開戰以來イギリス本國と海外領土との間には完全に協調が行はれ、アイルランド國民黨も年來の政爭を一擲したが、自治獨立を主張して已まなかつたシンフェイン一派の運動は衰へず、二五七六年四月には彼等の煽動によつてダブリンに暴動が起り、一時はその勢力が盛んであつたのである。

しかし元來シンフェイン運動は根據が薄弱で、またこれに對する政府の彈壓が峻烈であつたために短

時日を以て饑定されてゐる。

一方國民黨も戰時中しばしば要求を提出し、本國政府もこれと妥協を試み、つひに二五七八年四月にはアイルランド議會の設置を認めた。しかるにアルスター州はこれに反對を唱へ、一方獨立黨の運動も衰へなかつたために、アイルランド問題は未解決のままに放置されることとなつたのである。

しかしそれ以後戰爭の終るまで表面的には再びアイルランド問題を起さず、戰爭に對するイギリスの態度はそのために動搖することはなかつたのである。

（三）戰況の不利に伴ふ國民の動搖も政府當局の斷乎たる決意に信賴鎭靜す

擧國一致を誇つたイギリスも、戰爭後半に於いて戰況が漸く意の如くならず、ドイツ潛水艦の活躍による海上貿易の打擊、輸入物資の不足、日常生活品の窮乏、物價騰貴等が國民の生活を激しく脅かし、炭坑や軍需工場には罷業が頻發して政府を苦境に陷れてゐる。

しかしロイド・ジョージの決心は變化することなく、幾度か獅子吼してドイツ屈服の必要を唱へ、國內の平和論を抑へて辛くも難關を切り拔けたのである。

戰爭目的達成のために兵馬指揮の大權をさへもフランスに委任したことは、ロイド・ジョージなくては不可能事の英斷であつた。かくしてイギリスはよく苦痛に耐えてつひに勝利の榮譽を贏ち得るに至るのである。

## 三　觀　察

戰爭の長期化と共に戰況には一進一退があり、國內には勞力、軍需、食糧等あらゆる方面に不足を來すのが各國共通の現象である。さうして不利な戰況の繼續は國民に深刻な影響を與へ、殊に食糧の缺乏は國民の戰意を喪失せしめて必ずや反戰運動を熾烈ならしめる。

かくて長期戰の場合その後半期に於いて戰爭指導者の努力は主として國內問題に向けられ、これに失敗した場合革命を誘發してつひに國家を崩壞に導くこととなる。

その際かかる危機を未然に喰ひとめ得るや否やは戰爭指導者の確乎たる決意と國民の政府への信賴如何に懸つてゐる。しかし根本的にはこの危胎は戰爭に對する訓練、忍耐力によつて突破されるのである。

### 第二項　戰爭目的及びこれが戰爭期間中に變轉せる狀況

一　概括——自衞戰爭の下に於ける擧國一致

歐洲戰爭は實質的にはイギリス、ドイツ兩帝國主義の爭覇戰であり、フランスにとつては二五三一年の屈辱條約の撤廢、エルザス・ロートリンゲン奪回のための戰爭であつた。しかし各國は戰爭の勃發に當つていづれもその戰爭目的を掲げ、聲を大にしてそれを宣言し、今次の戰爭が自衞國防の戰爭にほかならない所以を明かにし、世界の自由と平和のために國民が矛を取つて奮起する必要あることを切言した。卽ち

イギリス、フランス、ロシャの聯合國側はドイツを以て世界平和の擾亂者となし、ドイツの軍國主義及び侵略主義を打破しなければ歐洲の天地は徒らに惡魔の蹂躙に歸すべく、正義人道のためにドイツを倒さなければならない旨を呼號した。

ドイツはこれに對して橫暴な舊大國は新興ドイツの盛大を嫉視し、平和を愛好する我我を壓迫してやまない。今日逡巡すれば我我は永遠に世界に於ける地歩を失ふであらう。ドイツは自由と平和のために橫暴な敵と戰はなければならない。これ實に侵略戰爭でなく、自衞戰爭であると絕叫して、國民上下の敵愾心を煽つたのである。

かかる戰爭目的を掲げることによつて、各國は悉く國內の一致團結を獲得した。かくしてイギリス、フランスは終始ドイツ軍國主義打倒の目的を堅持し、あらゆる障碍を克服して強硬な戰意を持ち續けたが、ドイツは戰爭の長期化と共に次第に國內の團結が破れ、對立が表面化し、戰爭目的についてもそれぞれの立場から論議され、戰意が次第に鈍化して一刻も早く戰爭から離脫したいと言ふ氣分が現はれて來てゐる。

二　ドイツに於ける戰爭目的の變轉——國內諸勢力の對立による政府の無力化

（一）　戰爭目的についての諸論議

ドイツでは開戰後間もなく戰爭目的について種種の論議が行はれ始めたが、保守黨は東エルベに隣接するバルト海地方並びにポーランドに野心を抱き、國民自由黨はベルギー及び北フランスの鑛山に、進步黨は謂はゆる中歐計畫によつて北海からイラン灣頭に至る經濟的支配に希望を寄せ、參謀本部は軍事的立場から東西國境の整理を要求し、海軍もまたフランドル海岸の保障を主張してゐた。

かくて政府の最初に聲明した自衞國防の戰爭目的は次第に侵略的性質を帶びて來た。

これに對して社會民主黨は無併合無賠償の媾和を主張し、祖國の安全が確保された曉には速かに平和を實現すべきことを唱へた。

大戰下ドイツの國內勢力の對立と政治的軋轢は、先づ戰爭目的の問題について現はれて來たのである。

（二）　社會民主黨の媾和運動、侵略戰爭への反對

社會民主黨は開戰前オーストリアの態度を帝國主義の發現なりとして非難し、熱心に平和を說いたが、開戰と同時に態度を一變し、政府の唱へた自衞國防の戰爭目的に贊同して軍事費を協贊した。

しかし社會民主黨の戰爭支持の主要な根據は、今度の戰爭がロシャ專制主義の侵略に對する防禦戰であると言ふ點にあつたので、戰局がドイツに有利に展開して戰爭が自衞よりも侵略の傾向を帶びるに至るや、漸く戰爭反對の聲が昂まり、二五七五年六月社會民主黨の一派は議會に於いて侵略戰爭反對を唱へ、擧國一致の放棄と階級戰の再開を叫んで平和運動の第一聲を擧げた。しかし黨員の大多數はなほ政府の方針を支持してゐたために、ハーゼ以下の强硬派は多數派から分離して二五七六年三月獨立社會民主黨を組織したのである。

（三）ベートマン首相の媾和提起とその失敗——國民の政府への信頼を失墜

かかる硬軟兩者の間にあつてベートマン首相は過大な戰爭目的を掲げることを避け、「今度の戰爭はドイツの生存を確立し、國民の將來を安定するためのものであり、何ら征略を目的とするものでない。しかし敵國が戰意を放棄しない限り、ドイツは無條件に戰爭を斷念するわけにはゆかない」との曖昧な態度を持し、ドイツの經濟的扼殺の危險を惧れて一刻も早く有利に媾和しなければならないと考へ、絶えず敵國側の樣子を窺つてゐた。二五七六年一二月ドイツ、オーストリア軍がルーマニアを席捲するや、ベートマンは今こそ「光榮ある媾和」の好機であると考へ、中立國の手を經て聯合國側に媾和交涉を提起した。

しかるにこれは聯合國側の拒絕にあつて國內の不滿を買ひ、硬派からは國民の意志を沮喪させるものとして非難され、軟派からは媾和の障碍は政府に媾和意志が缺如してゐるからであるとの攻擊を受け、首相の地位は次第に困難を加へたのである。

（四）主戰、媾和兩派の對立激化による政府の無力化

その後依然政府の方針に從つてゐた多數派社會民主黨も、二五七七年前半に至るや現狀維持の平和を要求して反政府的態度を明かにし始めた。下層人民の動搖を防がんとすれば政府はこれらの國會多數派と妥協する必要があつたが、一方參謀本部、地主、貴族、大工業家等は早くからベートマンの妥協的態度に不滿を抱き、あくまで下層階級を嚴重に取締ると共に、勝利を得るまではなんら媾和の氣配を示すまいとしてゐた。かくて兩派は無力な政府を挾んで正面衝突の狀態となり、二五七七年七月の危機が起つてベートマンは辭職し、國會多數派は媾和決議案の聲明を行ふに至つた。

しかしこの聲明の效果は無に等しく、創案者の期待に反して敵國はこの七月の危機からドイツ國內の不和を看取し、あくまでドイツ擊破の決意を固めた。

かくて今後ドイツでは政府は一段と無力化し、實際上は强力な參謀本部と保守派の結合が支配したが、內部に軍部と國會の鋭い對立を藏したまま、ドイツは一路轉落の途を辿つたのである。

三　聯合國側に於ける戰爭目的の變轉——利害問題より主義の問題へ

これに反しイギリス、フランスに於いては時には反戰運動が見られたとはいへ、大體よく初期の戰爭目的を堅持し、殊にロイド・ジョージ及びクレマンソーが政權を握つてからは不動の決意を以て邁進した。

しかしアメリカ參戰の頃から戰爭の名義が何時しか利害の問題から全く主義の問題に變じ、民主主義、共和政治、民族主義の擁護が盛んに唱へられたことは注目すべきである。

四　イギリスに於ける戰爭目的の變轉

イギリスはベルギーの中立侵犯を戰爭目的に立てたことが成功して驚くべき堅き結束を示し、本國も海外領土も擧國一致協力した。

ただイギリスは元來多數の勞働者を有してその勢力は强く、これに對する處置を誤れば破綻を生ずる

心配があつたので、政府は勞働者を戰爭目的に一致せしめるために多大の苦心を拂つた。それ故かねてから非戰論を唱へてゐた勞働黨、社會黨も國を擧げての戰爭決意を破壞するには至らず、開戰と同時に戰爭反對を唱へて二、三の閣員が辭職したことも、却つて政府の行動に鞏固な一致を齎した。

しかし二五七七年に入つて戰況がはかばかしく進捗せぬと、これに對する非難も漸く高まつて來た。かくて同年五月自由黨内閣はつひに意を決して自由、統一兩黨の聯立内閣を組織し、戰爭目的達成のために擧國一致内閣が生れたのである。

かくイギリスに於いては内閣の改造、指導者の交替によつて民心が鎭靜し、國民の戰意はますます强化された。後首相アスクイスの漸進的態度はロイド・ジョージの果敢な意見と相容れず、二五七五年二月ロイド・ジョージ内閣の成立を見たが、以後彼はイギリス勞働黨の若干分子の非戰論を斷乎抑壓して一意戰爭目的の達成に邁進し、イギリス國民の戰爭決意は日を逐うて鞏固になつて行つたのである。

## 第三項　長期戰の規模

### 一　國力、戰力

（イ）面積……同盟國側　二、二二五、〇〇〇方哩
　　聯合國側　三七、二七〇、〇〇〇方哩
（ロ）人口……同盟國側　一五、八〇〇萬人
　　聯合國側　一三九、二〇〇萬人
（ハ）歲入……同盟國側　約八〇〇千萬圓
　　聯合國側　約一、三七六千萬圓

（右の比較に於いて同盟國側は聯合國側の比ではない。聯合國側が世界各處に散在してゐるのに對して、同盟國側が中歐及び東歐の地に相接し、且つ内線作戰を執り得たのは同盟國側の利益である。）

（ニ）兵　力

1　戰爭に參加せる兵力——六、六〇〇萬人
　同盟國側……約二、二五〇萬人
　聯合國側……約四、三五〇萬人

2　總兵力（從軍者中死者はその約一五%約一〇、〇〇〇萬人、傷病者は三一%約二、〇〇〇萬人强に達した。）

同盟國側

開戰當初ドイツ、オーストリア兩國の常備兵力……一四〇萬人
ブルガリア、トルコの常備兵力……二四萬人
同盟國側の豫後備兵……一、〇六〇萬人
未教育兵……一、七六〇萬人

聯合國側

開戰當初のイギリス、ロシヤ、フランス三國の常備兵力……二三〇萬人
イギリス、ロシヤ、フランス三國の豫後備兵……一、三三八萬人
未教育兵……三、九〇〇萬人
イタリア、ルーマニアの常備兵力……三九六萬人

(ホ) 財政上の損失

1 直接の軍費……三、七二〇億圓

第一年……三八〇億圓　第二年……六六〇億圓
第三年……八〇〇億圓　第四年……一、八八〇億圓
同盟國側……一、二〇〇億圓
聯盟國側……二、三〇〇億餘圓
一日の平均軍費……三、八〇〇萬圓

2 消費せる砲彈

ドイツ……五八、〇〇〇萬發
イギリス……三〇、〇〇〇萬發
フランス……三四、〇〇〇萬發

3 飛行機製作高

ドイツ……四五、〇〇〇臺
イギリス……五五、〇〇〇臺
フランス……五〇、〇〇〇臺

備考

戰爭終了當時フランス軍のみでも火砲一二萬門、迫擊砲四、〇〇〇門、機關銃三七、〇〇〇挺、自動車一四萬臺、飛行機三、三〇〇臺といふ尨大な武器を有してゐた。

## 二　戰　域

この戰爭は最初からイギリス、フランス、ロシヤ、ドイツ、オーストリアの五大强國を交戰國とする歐洲の大戰爭であつたから、戰局は西方のドイツ、フランス國境方面と東方のロシヤ、ドイツ國境方面とに分れ、同時にオーストリア、セルビア國境方面に於いても小規模の戰鬪が行はれてゐる。

しかるに中立諸國の中、やがてトルコ、ブルガリアがドイツ、オーストリア側に立つて參戰し、イタリア、ルーマニア、ギリシアが聯合國側に與して開戰したので、最初三方面に限られた戰局は遂次その戰域を擴大し、カフカス(コーカサス)戰線、イタリア戰線、イラク(メソポタミア)戰線、パレスティナ戰線等兵火は燎原の火の如く各地に延燒し、交戰諸國の間に介在する中立諸小國もまた莫大な犧牲を拂はねばならなかつた。なほアジアに於いては日本、ドイツ間に戰端の開かれたことは言ふまでもない。

歐洲戰爭に於いては自然科學の應用による幾多の新兵器が實戰に現はれたので、曾て見ぬ慘禍が生み出され、戰域も甚だ複雜化されてゐる。これらの新兵器の中最も偉力を發揮したものは潛水艦と飛行機とであり、そのために戰爭は從來の平面戰から完全に立體戰に轉回した。潛水艦は全海面を戰場と化しまた空軍の活動は無限に延びて交戰國の領土全部を戰場の如き危險に曝し、しかもその攻擊は老婦男女を問はず爆擊殺傷し、殊に大都市若しくは大工業地帶が攻擊目標に選ばれる關係上、その戰列はいよいよ熾烈激化してゐる。ロンドンは一〇〇餘回（飛行機によって五七回、飛行船によって五一回）、パリーは七〇回、ドイツ空軍の襲擊を受けてゐる。ロンドンの被害は死者一、二六〇人、傷者三、五六〇人、パリーは死者二六六人、傷者六〇三人であつたと言ふ。

三　與國、中立國

歐洲戰爭は空前の大戰爭で、交戰國の數は世界全國家の約七分の五を占め、中立したものは僅か七分の二にすぎない。しかも戰爭の終まで中立を完うしたのはいづれも第三流以下の小國であつて、世界の全强國はこれに參加してゐる。

二五七四年にはドイツ、オーストリア、トルコの三同盟國に對して、イギリス、フランス、ロシヤ、セルビア、モンテネグロ、ベルギー、日本の七國が戰つてゐるのみであつたが、二五七七年までにはブルガリアが同盟國側に加はり、聯合國側には歐洲だけでもイタリア、ポルトガル、ルーマニア、ギリシアが加はり、更にアメリカ、キューバ、パナマ、ブラジル、支那、タイ、リベリアが參戰し、ボリヴィア、グアテマラ、ホンジュラス、ニカラグア、サント・ドミンゴ、ハイチ、コスタリカ、ペルー、ウルグァイ、エクアドルは同盟國と國交を斷絶した。

かくして戰爭の範圍は殆んど全世界に及んだのである。それ故歐洲諸國中殘る中立國は、スウェーデン、ノルウェー、デンマルク、オランダ、スウィス、イスバニアのみである。

四　民族及び人種

歐洲戰爭兩交戰國の主要民族は歐米系の白人である。卽ちドイツ、オーストリア——ゲルマン民族、フランス——ラティン民族、ロシヤ——スラヴ民族、イギリス、アメリカ——アングロ・サクソン民族は言ふまでもなく、亞洲の諸民族もこれに參加し、殊に日本の如きは重要な役割を果し、聯合國側の勝利に寄與する所大であつた。しかし疑ひもなく死力を竭して血戰を展開したのは歐米諸國、就中ドイツ、フランス、イギリスである。從つて歐洲戰爭は、人種的には大體に於いて歐米白色人種、宗教的にはキリスト教徒相互間の戰爭であつたと言ふことが出來る。

# 一　ドイツ側

## 第一節　對敵方策とその遂行

### 第一項　概　括

ドイツの對敵方策は主として武力戰に置かれ、軍事的勝利によつて敵國を屈服せしめんとしたもののやうである。從つて經濟的方策の如きは、封鎖の壓迫に耐えんとする極めて消極的なものにすぎず、政治的、外交的方策としては、敵國相互の離間と單獨媾和の方策が採られたが、いづれも副次的なもので成功を收め得なかつた。

### 第二項　軸心施策及びこれが戰爭期間中に變轉せる狀況

一　敵側軍事的優勢の破碎

（一）陸　　軍

（イ）開戰初期にはフランス軍の短期擊滅方策をとつて失敗する。



（ロ）二五七五年には東部戰線第一主義によるロシヤ軍擊滅、及び對ロシヤ單獨媾和策が採られたが、西部戰線第一主義に妨げられて充分成功しなかつた。

（ハ）二五七六年には西部戰線に於ける局地攻擊方法により、フランス軍に重大なる消耗を與へてその屈服を圖つた。

（ニ）二五七七年には長期戰不可避の豫想の下にヒンデンブルク線に退却、兵力の節約を企圖した。

（ホ）二五七八年、敵側のますます優勢となるを見て最後の決戰を求めて大攻勢を行つた。

（ヘ）大攻擊失敗後は國境への退却によつて防禦戰を試みようとした。

（二）海　　軍

（イ）開戰初期には海軍主力を無疵の儘保持する方針を持し、一方潛水艦による對イギリス通商破壞戰を企圖した。

（ロ）その阻止されるや、對イギリス主力艦隊決戰を企てた（二五七六年）。

（ハ）これも亦成らざるを見て無制限潛水艦戰によるイギリスの屈服を圖る（二五七七年以降）。

二　經濟的方策

潛水艦戰による對イギリス通商破壞はその最も尤なるものであらう。

三　政治的、外交的工作

ドイツは能ふる限り短期に戰爭を終結せしめ、以てドイツ軍の大勝による「勝利の平和」を企圖した

が、その長期戰化明瞭となるや漸くイギリスを最大の敵と認め、ロシヤを敗北せしめてこれと單獨媾和を結び、このドイツ軍の有利な狀勢を利用して、イギリス、フランスと平和を結ばうと企圖したのであるが、これも失敗した（二五七五年―七六年）。

二五七七年に至り、形勢の不利を見て、無併合、無賠償による妥協的平和の要望が起り、この一派と主戰派とが相對立しつつ戰爭末期に至つた。

この間ロシヤに對する單獨媾和運動、フランスの軍事的弱體化による屈服、對イギリス通商破壞及び封鎖による單獨媾和企圖及び交戰國間の離間と內訌促進策とが試みられたほか、イタリア、ルーマニア、アメリカの參戰阻止、中立國の好意獲得のための諸手段が講ぜられた。

最後にドイツ社會民主黨による國際的活動も重要なものである。しかしドイツの政治、外交政策は、軍部、議會、政府の三勢力に左右されて強力な統一的實行機關を缺き、常に强硬策と妥協策の間を動搖して效果が少なかつた。

## 第三項　諸施策の個別的檢討

### 一　敵武力の破壞

#### （一）　フランス軍武力の破壞

マルヌ會戰後西部戰線が固定し、フランス軍短期擊滅の企圖が阻されるや、二五七五年ドイツ軍は東部戰線に於いて對ロシヤ大攻勢を行つた。しかしやがて參謀總長ファルケンハインは再び西部戰線第一主義に轉じ、謂はゆる「局地的攻擊」によつてフランス軍を消耗屈服せしめようとした。卽ち政略的に限定された目標を選んで消耗戰を行ひ、その損害と國民思想の動搖とにより、フランスをして戰爭繼續を斷念せしめようとしたのである。ヴェルダン攻擊はかくて行はれたものである。

（イ）　ヴェルダン攻擊の狀況（二五七六年）

二月より六月に亘る攻擊により、ドイツ軍は豫想の如くフランス軍總豫備軍を洪水の如くこの一地點に集中せしめ（約六〇師團）、三五萬の犧牲を生ぜしめたが、ドイツも亦六〇師團を使用して五〇萬の犧牲を拂つた。かくて、結局ヴェルダンは拔けず、ドイツ軍兵力の限界は明らかとなつた。

（ロ）　ドイツ軍守勢期（二五七六年、七七年）

六月末以來ソンム河畔のイギリス、フランス軍の反擊が開始されてドイツ軍は守勢に立ち、長期戰に對處して兵力の消耗を避けるため、二五七七年春、ヒンデンブルク線に退却、陣容を整へて二五七八年春の準備を行つた。この間對イギリス消耗戰術は繼續せられ、二五七七年春にはイギリス軍及びイギリス國民間に重大な士氣喪失、反戰暴動を生ぜしめた。しかしドイツ軍の消耗も亦甚しかつた。

（二）　ロシヤ軍武力の破壞

東部軍司令官ヒンデンブルク（參謀長ルーデンドルフ）等は東部戰線第一主義を主張し、西部戰線の一部を犧牲としても兵力を東部に集中し、大規模なロシヤ軍の殲滅戰を行ふことによつてロシヤの屈服

を書らさんとした。彼等の要求は最初ファルケンハインの西部戰線第一主義のために容れられなかつたが、二五七五年に入り殲滅を免れたロシヤ軍は後方より補充を得て戰線の整備、再建を行ひ、カルパティア山脈に向つて反撃に轉じたため、參謀本部も敗北を救ひ、バルカン諸國を味方に入れ、イタリアの中立を維持せしめるために東部戰線に增援を送ることに決し、ファルケンハイン自らその指揮をとつた。

（イ）二五七七年の對ロシヤ攻撃の戰況及び效果

二五七七年ロシヤ軍に對する大攻勢の結果はドイツ軍の大勝となり、全ポーランドを占領した。しかしこの戰法は正面攻撃であり、ロシヤ軍は大損害を蒙りながらも主力を後退せしめ、なほ戰鬪力を保持することが出來た。

（ロ）包圍殲滅の策

この作戰に際しルーデンドルフは大規模な包圍殲滅案を策定した。卽ちワルソーを中心として遠く西方に突出してゐるロシヤ軍を北部より攻撃してその退路を遮斷せんとするもので、五月、七月の二回に亘り熱心に參謀本部に建言したがつひに容れられず、また九月にウィルナに於いて潰亂したロシヤ軍に對する最後の後方迂回攻撃を試みんとしたが、兵力不足のため機を逸した。かくてロシヤ軍の大規模の殲滅による單獨媾和の企圖は破れ、以後東部戰線はリガーからチェルノヴィッツに至るまでほぼ一直線の狀態となり、却つてロシヤ軍に有利の體形を與へることとなつた。

（ハ）ロシヤ軍の再建と反撃

ドイツ軍の包圍殲滅を免れたロシヤ軍は冬季に補充を行ひ、二五七六年三月攻勢に轉じた。しかるにドイツ軍はヴェルダン戰に多大の兵力を割いたため、七倍に近いロシヤ軍を引受けることとなり、辛くも戰線を維持したが、ロシヤ軍は更に南方に轉じてオーストリア軍を襲つて一擧にこれを潰亂せしめ（六月）、その結果ルーマニアはロシヤ側に立つて參戰するに至つた。

（ニ）ロシヤ軍の敗北と單獨媾和

しかしロシヤ軍は數回に亘り大敗北を蒙り、このことは內政の腐敗と相俟つて崩壞の氣運を釀成、つひに革命の勃發を見、ドイツと單獨媾和の止むなきに至つた。

（三）セルビア軍、ルーマニア軍武力の破壞

共にドイツ軍兵力僅少で大勝を博しながら兩國軍の主力後退を制し得なかつた。

（四）イタリア軍武力の破壞

二五七七年末、ロシヤの革命によつて兵力に餘裕を生じたドイツ軍は、八箇師團の增援を行つてオーストリア軍と共に攻撃を開始し、カポレットを突破してヴェニスに迫つた。

イタリア軍は總崩れとなり、イギリス、フランス軍は西部戰線から一〇箇師團を割いて急を救つた。

（この時イタリア軍の損害二〇萬、大砲一、八〇〇門）

しかし遠く東方に突出してゐるイタリア軍を南ティロールより進擊して殲滅せんとする作戰は、ドイツ軍の兵力不足と、その作戰準備に多大の時間を要するために不可能であり、また、イギリス、フラン

ス軍の來援によつてイタリアは南チィロールからアドリア海に至る最短距離の線に戰線を整備したため、ドイツ軍はこの方面の負擔を減ずることにも失敗した。

(五) 觀　察

ドイツはその課せられた困難な兩面作戰の問題を解決すべく、結局のところその兵力が不足であつたと言はなければならない。そしてロシヤの崩壞に助けられて二正面作戰の矛盾を清算し、二五七八年漸く西部戰線に兵力を集中し得た。

しかしこの時はイギリス、フランス聯合軍にはアメリカ軍の來援もあつて既に著しく增强されてゐる有樣で、ドイツはこれに對し軍事的に決定的な勝利を收めることは全く不可能となつてゐたのである。

二　敵國土の占領、その統治及び利用

(一) 概　括

ドイツ陸軍はフィンランド、バルト海諸地方、ポーランド、ウクライナ、ベルギー、ルーマニア等の諸地方を占領してここに軍政を布いたのである。その際ドイツはこれら占領地を媾和に際しての有力な擔保とすると共に、當初の問題としてはこれを經濟的に徹底的に利用して戰力增强に資し、將來可能なれば更にこれを政治的にドイツの屬國的地位に置かうとしたのである。

(二) フィンランド

フィンランドはロシヤ革命後赤化したが、ドイツ軍はマンネルハイム將軍等の白色派を助けて革命派及びソヴィエット赤衞軍を追ひ、後ドイツ貴族を國王に戴く王國にする豫定でドイツに從屬的な獨立國とした。ドイツはこれによつて一方ではソヴィエット政府を壓迫し、ドイツ國內の過激化を防止すると共に、他方イギリス、フランス軍がムルマンスクより進出して白系ロシヤ軍と結び、東方よりドイツ軍を脅かすに至ることを防止せんとしたのである。

(三) バルト海諸地方

大體に於いてリトワニア及びクールランドはそれぞれドイツ皇帝及びドイツ聯邦君主の一人を大公とするドイツの屬國とし、かくしてドイツの農業地帶を擴張し、東部國境を前出せしめ、バルト海制覇を實現せんとした。エストニア、リフランドもドイツ軍及び警察統治の後、適當な形式で獨立國とする豫定であつた。これらの地方にはドイツ軍占領後いづれもドイツ系土着貴族を中心とする參事會を組織し、行政に參與せしめた。

(四) ポーランド

ドイツ、オーストリア軍の占領後、ポーランドをロシヤから分離し、ドイツ、オーストリア側の主權下に獨立國を樹立せんとする計畫が早くから企てられた。この計畫はドイツ保守派(東部農業地帶の擴張を主張)、軍部(東部國境改善を主張)及び社會黨(ロシヤ專制政治よりの邊境異民族の解放を主張)によつて支持されたが、ロシヤとの單獨媾和の妨げとなることとドイツ、オーストリア間に統治地域、統治方法について異論があつたため暫く延期され、北部はドイツの、南部はオーストリアの軍政下に置

かれた。しかし二五七六年一一月五日つひに獨立國樹立が宣言される。これはドイツ軍部が對ロシヤ平和交渉が進展しないため、また兵力不足に惱み、ポーランド軍を募つて補充を行はんがために首相に強要した結果である。

かくてポーランドは立法的權限を有する執政顧問會、內閣、及び擴張された參議院による自治を許されたが、左の理由でそれは結局失敗であつた。

（イ）ロシヤは怒つて單獨媾和の意志を失つたこと。

（ロ）同地方の主權をめぐるドイツ、オーストリア間の衝突があつたこと。

（ハ）オーストリア內ポーランド黨のドイツ、オーストリア政府に對する反對行動。

（ニ）ポーランド自治內閣のドイツ、オーストリア軍の「高壓的干涉政策」に對する反對。

（ホ）期待したポーランド國民軍には全く應募者がなかつた。

しかし同地の占領により次の如き利益もあつた。

1　家畜、馬、食糧、木材、工業設備の徵收

2　各種課稅の實施

3　多數ポーランド人のドイツへの强制移住による農業勞働力の確保

（五）ウクライナ

當初反革命派の獨立政權を助けたが、實力なく全く用をなさぬのでドイツ軍が全土を占領し、親ドイツ政權を樹立した。

ドイツは同地の穀物を能ふ限り徵集して本國に送らうとしたが、貯藏少く、また戰亂のため收穫も充分ならず、更にまたドイツの苛酷な軍政に對する人民の反抗に加ふるに輸送力の不充分である等のこともあつて、百萬トンの穀物を得る目標のところ遠くこれに及ばなかつた。

（六）ベルギー

ドイツはベルギーの地方を戰後ドイツの屬國たらしめんと欲し、ベルギー內の親ドイツ派を養成してこれに自治を行はしめ、またフラマン人（北部ゲルマン系）とツロン人（南部ライン系）の對立を煽動して同地方の分裂弱化を圖つた。

備考

工業家は同地方の鑛山及び工業獲得を企てた。

陸軍は西部國境の改善のためにリエージュ一帶の併合を考へた。

海軍は對イギリス攻擊據點獲得、海外進出のためにフランダース海岸を望んだ。

ドイツはまた同地の鑛山及び工業を利用し、同地方勞働者を强制移住せしめてドイツ工業に使用、本國勞働力の不足を補つた。

（七）ルーマニア

油田地帶及び穀物を獲得、穀物はやや多量に獲得したが、油田地帶はイギリス軍將校によつて徹底的

に爆破され、永く復舊されなかつた。

三　敵の孤立化方策

(一)　ロシヤの孤立化

ロシヤは對ドイツ單獨媾和を結ぶ可能性のある唯一の大國であつたから、その孤立化には最も力を注いだ。

ロシヤとイギリス、フランスとの重要交通路の中、バルト海はドイツ海軍の制海權下にあり、黒海から地中海に出る通路の確保が最も問題であつたが、しかしこの通路を扼する海峽地帶はドイツ軍の手に確保され、ロシヤの孤立化は維持され、その崩壞を促進した。

(北氷洋よりするムルマンスク鐵道も大戰中に開通したが、その輸出入額は僅少であつた)。

(二)　フランスの孤立化

イギリス、フランスの連絡を困難ならしめて、フランスを孤立化するために英佛海峽の占領が企てられた。二五七四年秋のフランドル會戰、二五七八年春の大攻勢はその現はれであるが、しかし共に失敗した。

(三)　イギリスの孤立化

英佛海峽を占領してイギリス、フランスの連絡を妨害し、また潜水艦基地を前進せしめ、潜水艦戰による對イギリス逆封鎖によつてイギリスを孤立化せしめんとしたが失敗した。

四　敵國相互間の離間——ドイツの單獨媾和運動と平和攻勢

戰爭を一時中止し、その間に必要物資を輸入して長期戰の準備を整へ、外交上味方を獲得して次期戰爭に有利な地位を占めることはドイツの最も欲するところであり、このために單獨媾和運動及び平和攻勢が盛んに行はれた。

かかる平和攻勢に際しては、敵國の侵略的意圖を敵國民に暴露してその戰鬪意志を喪失せしめ、敵國間の對立抗爭を激化し、もし平和のならざる時は逆にドイツ國民の祖國防衛のための志氣を鼓舞する效果を狙つたのである。

かかる平和運動としては

(1)　二五七六年一二月のドイツ平和提議

(2)　對ロシヤ單獨媾和運動

(3)　二五七七年七月議會に於ける平和決議

(4)　對イギリス媾和運動

(5)　オーストリアを通ずる對アランス媾和運動

(6)　日本に對する働きかけ

(7)　其の他

五　制海權及び制空權の掌握

ドイツの海軍力はイギリス、フランス、イタリアの聯合艦隊に對して問題にならない程に劣勢であり、イギリス海軍を壓倒してドイツ軍のイギリス本土上陸を援護することは勿論、海外植民地を確保し海外通商を維持する實力も全くなく、却つてイギリス艦隊に封鎖されて北海に屏息し、全世界から孤立してゐた。

(一) 初期の消極的方針

ドイツ海軍首腦部は開戰當初に於いて、海軍主力を無疵のまま保持してこれを最後の重大な切札、または對イギリス平和交渉の有利な條件たらしめ、一方潛水艦による對イギリス通商破壞戰によつてイギリスの戰意を挫かんとした。しかし後述の如く、政府の態度は潛水艦戰に對して不徹底であつたため、結局無爲に時を過すこととなつた。

(二) イギリスとの主力艦隊決戰論

かかる政府の消極的方針に對して海軍首腦部は積極的な決戰主義に轉ずるに至つた。卽ちイギリス主力艦隊を部分的に引き寄せて各個に擊破し、イギリス海軍の優勢を覆滅せんとするもので、一九五七六年五月三一日から六月一日にかけてのユトランド沖海戰はこの戰略の現はれであつた。海戰はドイツ海軍に有利に終つたが、ドイツ側も亦重大な損失を蒙り、イギリス海軍の制海權は微動だもしなかつた。

(三) 無制限潛水艦作戰(「通商破壞」の項參照)

(四) バルト海方面に於ける活動

ドイツ海軍はロシヤ海軍に對してバルト海の制海權を維持することが出來、その結果スウェーデンの鐵鑛の輸入が可能となり、またドイツ軍東部戰線部隊に對するバルト海を通じての軍需品輸送路を確保した。

(五) 制空權

歐洲戰爭に於ける制空權は今日に於ける程死活的意義をもたない。その效果は敵陣の偵察、爆擊、敵國都市の爆擊であり、最も重大な意義をもつたのは最後の點である。

戰爭末期に於けるドイツ軍の飛行機數は二、七〇〇機、イギリス、フランス軍合計五、〇〇〇機である。ドイツ空軍はロンドン、時にバリーを爆擊し、イギリス、フランス軍はライン工業地帶を爆擊した。共に一回の爆擊は二十機內外、死傷五〇名內外を生ぜしめて敵に少なからざる心理的動搖を與へた。

六　封鎖及び通商破壞

(一) 潛水艦戰の主張と反對論

ドイツ潛水艦隊は戰爭中著しく發達してその艦數及び威力を增大し、殊に二五七六年六月ドイツの完成した巡洋型潛水艦の如きは、遠くアメリカ近海に出擊するに至り、茲に潛水艦による對イギリス通商破壞戰及び逆封鎖の可能が問題となつた。潛水艦戰はドイツの眞の敵はイギリスであり、同國は無制限潛水艦戰による逆封鎖によつてのみ屈服せしめ得ると主張したが、首相ベートマンはイギリスとの妥協による戰爭終結を望み、從つてイギリスの輿論硬化

とアメリカの參戰を齎らす如き無制限潛水艦戰には頑強に反對した。

（イ）第一期（二五七五年二月―九月）

イギリスの苛酷なドイツ封鎖政策に對する報復手段として、この期間一時通商破壞戰が採用されたが、アメリカ以下中立國の氣息を窺ふに急にして、潛水艦長に與へられた禁令のみ多く、その活動は著しく拘束されてゐた。

加ふるに二五七五年五月七日アメリカ商船ルシタニア號擊沈、八月一九日アラビック號擊沈事件が起り、アメリカとの國交調整の必要から潛水艦戰はつひに政府によつて禁止された。

（ロ）第二期（二五七六年二月―四月）

かくて捕獲規定による通商破壞戰に退却したが、二五七六年二月に至つて再び潛水艦戰が開始された。これに對しアメリカの猛烈な抗議があり、更に二五七六年三月二四日にはサセックス號擊沈事件があり、再び捕獲規定に從ふこととなり、微溫的な通商破壞戰の繼續を出ることがなかつた。

（ハ）無制限潛水艦戰（二五七七年二月以降）

不徹底な通商破壞戰を斷續してゐる間にドイツはイギリスに對する妥協平和の途を失ひ、またアメリカの切白な敵對的態度と早急の平和締結の不可能な狀態に鑑み、二五七七年二月以降無制限潛水艦戰を實施した。

當初海軍當局はこれによつて毎月平均六〇萬噸の船舶を擊沈し、六箇月にしてイギリスを飢餓に陷れ、降伏を强要し得る豫定であつた。

作戰實施後の成績は遙かにこの豫想を超え、二月から七月に至る六箇月間の擊沈噸數五五〇萬噸（月平均九一・七萬噸）と言ふ好成績を示した。そのためイギリスの貯藏食糧及び船舶の減少は殆んどその屆服を齎らすかに見えたが、アメリカの援助、中立國船舶の動員、消費節約と輸入品の重點的許可、國內增產、造船數の增加、護送船團制度の採用、商船の武裝、水中聽音機等各種武器の備付、その他いろいろの對策によつてイギリスはドイツ潛水艦による逆封鎖の危機切り拔に成功した。

（ニ）潛水艦戰の得失

ドイツ側が潛水艦戰の强行を躊躇してゐる間に敵側のこれに對する防禦方法と武器とは急速に發達し、二五七七年には、二五七五年代と同一の成績を擧げるためには四倍の、また二五七六年代に對してその三倍の潛水艦を必要とし、しかも異常な困難を冒さなければならなくなつた。

かくて擊沈噸數は二五七七年四月を最高として以後は急激に減少し、却つて敵から受ける損失のみ增加することとなつた。

（イ）敵の攻擊によつて失はれたドイツ潛水艦數

| | |
|---|---|
| 二五七四年 | 五隻 |
| 二五七五年 | 一九隻 |
| 二五七六年 | 二二隻 |

二五七七年　六三隻(八三隻新造)
二五七八年　六九隻

(ロ) しかし潜水艦戰によつて敵に與へた脅威と損害とにも注目すべきものがある。卽ち

1 イギリス海軍では護送船團編成のため、巡洋艦、驅逐艦の多數を分割使用することとなり、本國艦隊の威力を減じた。

2 イギリス本國から歐洲大陸への軍需品輸送に障碍を與へることとなり、聯合軍の兵站補給、裝備强化に支障を來した。

3 船員の死傷數を著しく增加せしめた。

4 主力艦隊も機雷と潜水艦の攻撃を恐れて多數補助艦隊の護衛なくしては根據地を離れることが困難となつた。

5 經濟上に與へた打撃も著しく、思想上にはイギリス國內に平和派を擡頭せしめる等のこともあつたが、現實にはロイド・ジョージ等の主戰派が政權を維持した。

七 敵資源の奪取

ドイツ軍は占領地では、その物資を利用してその自給自足を圖り、もし物資に餘剩があれば、これを本國及び與國に送る方針をとつた。東部戰線に於いては特にこの方針が守られた。

穀物その他の農產物、木材、家畜、馬匹、水產物等の敵資源は徹底的に徵用及び買收し、また各種貯藏原料品、工業機械、工業設備、汽關車、鐵道軌道、車輛、鑛山等の移轉及び利用を徹底的に行つた。

例へばポーランド東部占領地域に於ける農產物の大規模な徵發のほか、ベルギー、ポーランド、セルビア北部の石炭、フランスのロングヴィー、ブリエーその他の鐵、屑鐵、ルーマニアの石油、ベルギー、ポーランド工業地帶の工業動員、北部フランス、ベルギー、ルーマニアの車輛等がある。

八 對敵宣傳謀略

ドイツはイギリス、フランス間の對立、フランス、イタリア間の不和その他聯合國間の分裂弱化を謀り、また該國民の士氣を動搖させて敵國內の反戰派を煽動することにより、國內分裂を圖らうとした。

(一) ロシヤに對する革命、單獨媾和の謀略(ロシヤの項參照)

(二) 平和提議による聯合國間の離間、國民の厭戰思想助長

(三) 敵國の內亂助長

備考

ロシヤ及びアイルランドの反政府分子を援助してその反抗、暴動を支援した。

(四) 敵國內反對派との連絡

イタリアに於けるギョリッチ黨及び參謀次長以下の親ドイツ派軍部との媾和交涉をなす。

インド獨立派の援助及びベルリンに於けるインド獨立委員會結成。

アメリカに於ける參戰反對派との連絡等（アメリカに對する謀略活動の項參照）

（五）　戰線兵士に對する宣傳

戰線の兵士に對し旺んに宣傳を行ひ、その戰爭目的に對して疑惑を抱かせることにより厭戰思想を鼓吹した。

（六）　社會主義者を利用しての宣傳

ドイツ社會民主黨指導者を操縱してその在野的立場から中立國（スウィス、スウェーデン等）に働きかけ、聯合國社會主義者にドイツの平和的意圖を宣傳させた。

その最も大規模の企圖は二五七七年六月、ストックホルムの萬國社會黨大會に於いて、ドイツ社會黨代表は首相、外相等の意向を體して「無併合、無賠償の媾和、民族自決主義」等の提案をなし、決議せしめるに至つた。

（七）　中立國新聞の操縱

最初外務省新聞局が中心となり、大本營と連絡をとつて中立國の新聞社に働きかけた。後に補强施設として海外事務中央局（更に後に中立國戰時新聞局）が設立された。

（八）　アメリカに對する謀略活動

（イ）　アメリカ參戰前に於けるドイツ系移民に對する活動

ドイツ政府及び汎ドイツ主義團體によつて、ドイツ——アメリカ同盟及びドイツ語のアメリカ新聞を操縱して、ドイツ國家に忠誠を盡すドイツ系アメリカ人の養成に努めた。

（ロ）　二五七六年大統領選擧に際しては、イギリス、フランスに好意を持つウィルソンに反對し、比較的中立的なヒューズ贊成の選擧戰を展開せしめた。

（ハ）　メキシコの叛亂煽動

ドイツはアメリカ政府を困惑させて歐洲に干渉の餘裕なからしめるため、メキシコに紛爭を醸成させた。卽ち二五七六年春ヴィーラ將軍を使嗾して反亂せしめ、アメリカをしてこれに武力干渉を行ひ、國防軍を召集して國境に配備するの餘儀なきに至らしめた。

更に翌二五七七年一月にはメキシコ駐在ドイツ大使に秘密訓令を與へて、メキシコをアメリカへの宣戰布告にまで誘導せんとしたが、この暗號訓令はイギリス當局により解讀されたため却つて逆效果を生むに至つた。

## 第二節　對內方策とその遂行

### 第一項　概　括

ドイツは短期戰の豫想の下に大戰に突入したので當初長期戰の構へは全くなく、二五七四年末以來漸

く長期戰に對應する諸方策をとり出して、その完成したのは二五七六年末、祖國補助勤務法案が制定された後である。

その對內方策は軍事上、經濟上、他國に較べて著しく勝つてゐたが、政治方面では複雜矛盾した聯邦制と專制君主制の諸制度に妨げられて、强力な施策を行ふことも、人民の不滿を除く事も出來ず、充分の效果が揚らなかつた。

## 第二項　軍　事

### 一　二五七五年の師團の新設と師團編成の改變

ドイツは戰爭前より軍備の擴張を圖りその充實に努めたのであるが、これを開戰後のイギリス、フランス、ロシヤの總兵力と比較すればやはり甚だ劣勢であり、兵力の增强が必要とせられた。幸ひ戰前ドイツは徵兵適齡者の五四パーセント位しか徵集しなかつたので、未敎育補充兵をもつて師團を新設すると共に、陸軍省軍事課長ウリスベルク大佐の提案によつて、從來四聯隊編成の師團を三聯隊編成に改めて師團數の增加を圖つた。この三聯隊の師團編成はその後各國に流行し、フランスもこれに倣ひ、戰後の列强は多くこの三聯隊師團を採用してゐる。

とにかくこの二つの手段で、一月に新設一〇師團、三月には集成九師團、四月同六師團、五月同七師團、六月同四師團、その他後備五師團を集成した。卽ち二五七五年中新編成一〇師團、集成三五師團、合計四五師團を生み出したのは成功であつた。

### 二　科學動員

ドイツはこの點で遙かに列强を凌駕して好成績を擧げた。（詳しくは科學及び技術の項參照）。

### 三　祖國補助勤務法（二五七六年一二月五日）

（イ）動機——この法案はドイツがその軍事能力增進のために採つた施策の中核をなすものである。卽ち二五七六年初頭の統計によれば、ドイツの總兵力五五〇萬、開戰以來の動員約九〇〇萬であり、人口六、六〇〇萬中七分の一强の召集で、動員能力の絕頂に達し、また同年下半期のソンムの會戰で兵員、兵器彈藥の不足はますます濃厚となり、各方面に行詰りが感ぜられたが、本法案はその打開を目指して公布された。

（ロ）實現——本法案はかねて陸軍の研究に係るもので、聯邦參議院、ついで議會に於いて若干の修正增補を經て一二月五日發布された。本法案の實現については、ヒンデンブルク、ルーデンドルフ兩將軍の威望が與つて大いに力があつたと言はれる。本法案の實施は擧げて陸軍當局の權限內に置かれ、陸軍省戰時局がこれに當つたが、この戰時局は一〇月陸相に新任されたソンム會戰の勇將シュタイン大將の新設に係はり、局長には手腕家の令名あるグレーネル中將が任命された。局內に人員課、兵器調達課、原料課、輸出入課、國民給養課の五課が設けられた。

（ハ）內容——本法令の內容を要約すれば次の如くである。」

目的
1 兵器製造力の增大
2 不急工業の廢止
3 未就役勞働者の志願または强制就役
4 兵器製造不適任者の他の補助勤務への就役

服役の義務
一七才以上六〇才以下の男子にして兵役に召集せられざるもの

## 第三項 內政

### 一 統帥と政治との關係

#### (一) 機構

ドイツ帝國の統帥權と政治との關係は極めて不分明、複雜であり、相互に意志疎通せず、權限爭ひが絕えなかつた。次にその要綱を述べる。

(イ) ドイツ皇帝は元首として政治軍事兩方面を統べ、軍事に於いては皇帝の下に參謀總長があり、政治に於いては皇帝の下に帝國宰相があつてそれぞれその實權を握つてゐた。

(ロ) 軍事に於いて參謀總長と權限を頒つものは侍從武官長、宮中軍事顧問及び陸軍大臣、海軍大臣及び海軍軍令部長であつた。しかしその指揮系統は錯綜して居り、殊に陸相と參謀總長との間にはしばしば權限爭ひがあつた。

(ハ) 政治上に於いて首相と權限を分擔するものに聯邦參事院、帝國議會があり、更にプロイセン上下兩院、各聯邦諸政府及び議會はしばしば首相に反抗した。

宰相は全く軍事に關與し得ず、議會及び國民間に全然地盤を持たなかつたため背景と政治勢力がなく、各方面の要求に左右されて充分に手腕を振ふことの出來ない狀態にあつた。

(ニ) 從つて宰相には總力戰を指導すべき權力なく、また參謀總長等の軍部も法律的には行政に關與し得ず、軍政兩方面を强力に統一運營する途は鎖されて居た。

#### (二) 統帥と政治との協調不和の狀況

ドイツに於いてはその機構上の缺陷のために早くから軍部と內閣との間に權限の衝突があり、殊にビスマルクの退職後軍政兩方面に亘つて獨裁權を振ひ得る大人物が居なかつたため、兩者の爭ひは絕えなかつた。

(イ) 兩者の協調期(一五七四年)

歐洲戰爭勃發後戒嚴令が布かれ、國內治安維持をはじめ、政治、軍事の兩方面に亘つて軍部の最高指揮權が確立し、またベートマン首相はこの戰爭を短期戰と見做して軍部の要求を無條件に承認する態度を取つたので、兩者の衝突は見られなかつた。

（ロ）不和の發生（一五七五年―七六年夏）

しかし戰爭が長期戰となり總力戰の傾向が明瞭となるや、廣汎な幾多の難問題が生起し、軍事、政治の兩方面から相異る要求が現はれて、不和衝突を惹起するやうになつた。

例へば

(1) 首相及びヒンデンブルク等の東部戰線第一主義とファルケンハインの西部戰線第一主義（一五七五年）。

(2) 海相ティルピッツと右翼政黨の無制限潛水艦戰實行の要求と、首相及び右翼政黨の反對（一五七五―七六年）。

(3) 戒嚴令、言論取締緩和をめぐる軍人と文官との爭ひ。

(4) 軍需生產增加をめぐる軍部と內務省との爭ひ等。

しかしファルケンハインが參謀總長であつた時代には克服し難き對立關係はまだ發生しなかつた。

（ハ）不和の最高潮期（一五七六年夏―七七年夏）

ヒンデンブルク、ルーデンドルフの大本營入り以來軍部の獨裁的權力は確立したが、首相、外相及び議會右翼政黨と軍部の衝突も烈しくなつた。

衝突の中心をなしたものは無制限潛水艦戰（一五六七年夏―七七年初頭）、ポーランドの獨立（一五六七年後半）、妥協的平和締結、祖國補助勤務法、戰時國內改革等の諸問題である。

備考

國內改革問題（一五七七年三月以降）とはプロイセンに於ける三級選擧法の廢止、帝國議會の權力擴張問題を主とし、その他言論取締緩和、戒嚴令緩和等の諸問題を含む。（「指導者交替」の項參照）

即ち政府及び議會左翼政黨は、ドイツの官民が經濟的窮迫に耐へて長期戰を勝ち拔くためには、ドイツ人民の不滿の原因である專制的政治組織を改革し、政府に對する人民の代表權を擴充して官民一體の實をあげると共に、一方對外的には敵國に相當の讓步を行つて成る可く早く現狀維持の妥協平和を結ばんとしたが、軍部及び議會右翼政黨と重工業家、貴族等は民心動搖を高壓的に抑壓することを主張し、國內改革は戰爭中却つて內訌再發の怖れありとし、また敵國に對してはあくまでも併合主義による勝利の平和を望んでここに兩者の對立を來した。

（ニ）軍部優越の時期（一五七七年七月―一〇月）

軍部はベートマン首相の罷免に成功し、その傀儡としてミハエリスを首相とした。彼は軍部の意を體して併合主義及び保守的政黨を支持して平和主義者及び左翼的政黨を抑へ、軍部の意圖を優越的に政治に反映したが議會多數派と衝突してつひに辭職した。

（ホ）兩者不卽不離の關係（一五七七年―七八年夏）

次の首相ヘルトリングは議會多數黨及び軍部の間に立ち、よく兩者と協調するを旨とし、大體に於いて良好な關係を維持した。しかし次の點で衝突は避けられなかつた。

(1) 一五七八年初頭、ロシャとの單獨媾和の際に、軍部は强硬な要求を提出して外相キュールマンの妥協方策を抑へた。

(2) 二五七八年六月、キュールマンは軍事的攻撃のみによつては平和を得られぬ旨を議會で宣言、軍部の要求により罷免された。

(一) 政府優越の時期(二五七八年後半)

二五七八年夏以來ドイツ軍は敗北し、軍部は次第に權力を失ひ、政府に請ふて平和交渉を再開せしめ、議會の權力增大、內政改革等を認めた。しかしなほ媾和條件に關し軍部の强硬意見と政府の軟弱外交とが對立したが、二五七八年一一月の革命と共に軍部の權力は全く失墜した。

(三) 統帥と政治との相剋が戰爭指導上に及ぼした影響

(イ) 戰時統制經濟の運營、殊に祖國補助勤務法案等はいづれも軍部が獨斷的に立案したものであるが、經濟界の實狀に疎くまた立案に不慣れのため、その意圖を實現する手段に拙であり、しかも政府に充分の相談なく、ただ軍部の方策實行を一方的に强要する傾があつたため、充分の效果を擧げ得なかつた。

(ロ) 國內改革問題、平和交涉の問題または言論統制等の問題についても、統帥と政治との兩者の不和は國論分裂の原因をなした。

(ハ) 首相、外相の意圖が軍部に傳はらず、外交問題をはじめ內外諸問題の處理に相互の手違ひが多く不利を招いた。

(ニ) 軍部、政府、議會の協調が行はれればドイツは終始一貫した態度を以て內外に臨むことが出來た。しかるにこれらの一致を缺いた結果、或る時は軍部の主張が通つても直ちにそれと反對の行動が政府または議會によつて行はれ、折角の努力が却つて逆效果を生むこととしばしばであつた。」

二　戰爭指導者及び指導層の問題

(一) 戰爭中途に於ける指導者の交替及びその原因

開戰當初の首相はベートマン・ホルウェークであり、參謀總長はモルトケとファルケンハインの交替(別項參照)

(イ) モルトケとファルケンハインの交替

(ロ) ファルケンハインとヒンデンブルクの交替

ファルケンハインは理性的、常識的な戰略を立てて大過なき戰爭指導を行つたが、短期決戰に失敗し平凡であつた。

二五七六年ファルケンハインの局地攻擊主義はヴェルダンに於いて失敗し、イギリス、フランス軍の猛烈な反擊(七月ソンムの戰)を受け、東部戰線に於いてはロシヤ軍の逆襲あり、ルーマニアも敵側に廻る等のことがあつて無能の評が高まつたことと、またヒンデンブルク、ルーデンドルフの名聲を利用して、國民に勝利の希望を與へんとする者の策動した結果として、兩者の交替が二五七六年八月に行はれた。

その結果は一應成功であつた。兩常勝將軍の下に勝利の希望が澎湃として起り、軍部に對する國民の信賴心が高まつた。

ヒンデンブルクは持久戰の態勢をとり、戰線を短縮して兵力を節約し、一方祖國補助勤務法案をもつ

て國内軍需生產のために國民の大規模な徵用を行ひ、大體に於いて極めて賢明な策を採つたと見られる。

（ハ）首相ベートマンとミハエリスの交替

二五七七年に入るや長期戰によるドイツの疲弊次第に明らかとなり、食糧品、衣料、燃料、その他が缺乏のため國民の健康は低下し、人民は不穩となり、またロシヤ革命の影響を受けて國民社會黨、勞働階級の動搖、過激化の形勢があつた。

一方軍需品は缺乏して前線の裝備がイギリス、フランスに較べ劣惡となり、また人的資源が涸渇して勞働力、兵力の不足著しくなつた。これに對し敵はアメリカを加へてますます優勢となり、ために短期に戰爭を終結する必要が起つて無制限潛水艦戰が採用されたが、それも容易にイギリスを屈服せしめることは出來なかつた。

しかるにベートマンはかかる非常時に立つべき果斷の材ではなく、賢明なるも小心柔弱で、軍部と左翼政黨との相異る要求のため當に方針動搖して弊害が多かつた。

一方ロシヤ及びイギリス、フランスに對ドイツ平和交涉再開の氣運あり、また法王使節の平和交涉開始の策動、オーストリア政府の單獨媾和の運動がしきりに行はれてゐた。ドイツにも媾和の意志があつたが、軍部、大工業家、右翼政黨の併合主義的主張のため媾和の機を失する怖れが多分にあつた。

かくて、中央黨代議士エルツベルガーは、二五七七年七月初頭議會に於いて大活躍を行ひ、政府に國內改革、妥協的平和の妥結とを求めた。

軍部はかかる政局の動搖を見て首相に時局處理の能力なしとし、議會の首相反對派と結んでベートマンを失脚せしめ、二五七七年七月二三日プロイセン國民給養委員長ミハエリスを後繼首相とした。

ミハエリスは一介の官僚にすぎず、世人の彼を知るものは少く、全く軍部の傀儡と見做されたため、軍部と議會多數派（中央黨、進步黨、社會民主黨）との對立を直接的ならしめ、議會の反軍部的な平和決議（七月一九日）を招來した。このことは國論の分裂を內外に知らしめる結果となつてドイツの不利を招いたが、軍部も亦ミハエリスの無能を知つてその支持を放棄し、僅か三箇月にしてミハエリス內閣は倒壞した。軍部はミハエリス登場によつて、豫期に反し却つて議會勢力の擡頭を齎らした。

（ニ）首相ミハエリスとヘルトリングとの交替

ミハエリスに代つてバイエルン首相ヘルトリングが組閣した（二五七七年一〇月）。

ヘルトリングは中央黨領袖で議會政治に永い經驗を有し、保守的ではあるが評判が良かつた。組閣に際しては政黨の代表者を多數入閣せしめて議會及び政黨との連絡を密にした。

しかし既に老年のためその施政に强力を缺き、二五七八年初頭對ロシヤ單獨媾和の際にも軍部の强硬論に押されて外交的に不手際な結末となり、その他政治外交の實權も軍部に握られて充分の手腕を振ふことが出來ず、國內改革問題、對外平和問題共に解決が出來なかつた。

（ホ）首相ヘルトリングとバーデン大公マックスとの交替

二五七八年のドイツ軍最後の大攻擊が失敗して以來國內は革命の危險に直面し、また對外的には日一

日と崩潰の度を増すのみで、内外の行詰りは蔽ふべくもなくなつた。」

かくてこの難局打開のためにヘルトリングに代つて二五七八年九月、民主的政治家として令名高かつたバーデン大公マックスが後繼首相となつた。

マックスは無制限潜水艦戰を中止し、ルーデンドルフの積極的長期抗戰方策を却け、また國内の議會主義化、民主化を強行してイギリス、アメリカの意を迎へようとしたが、イギリス、フランスの野望を緩和する事は出來なかつた。

（二）指導者の交替が戰爭に及ぼせる影響

概して言へば軍事指導者の交替は好影響を及ぼしたが、政治指導者には全く適任者なく、徒らに國内政治の行詰りと動搖の事實を中外に明示した。

ともあれ帝政ドイツの政治組織は、爲政者の權力を分割するのみで強力な政治家の果敢な活動には極めて不便であり、そのために指導者の頻繁な交替を餘儀なくし、統一的施策の實施を不可能ならしめた。

（三）指導層が戰爭指導に及ぼせる影響

ドイツの指導層としては、諸邦君主、地主貴族（ユンケル）、軍部、大實業家、議會等が擧げられる。これらの指導層の目的とするところはおのおの異つてゐたが、共に獻身的に戰爭遂行に盡力し、しばしば自己の不利を顧みなかつた。しかし貴族のみはやや利己的態度を執り、後世の非難を受けてゐる。

（イ）諸邦君主

いづれも率先して軍務に從ひ、極めて眞劍勇敢に戰つて範を垂れた。また日常生活も極めて質素であつた。

（ロ）地主貴族（ユンケル）

彼等の大部分は子弟を軍部の高級將校としてをり、また政治、外交方面の高官、地方大地主として、それぞれの方面で貢獻はあつたが、自己の封建的特權を守るに極めて頑固であり、國内改革を妨害し、國民の不滿を買つた。また外交上では東部國境の大擴張を主張して對ロシヤ平和交渉に干渉した。

（ハ）軍　部

やや保守的な立場を取りすぎた非難はあるが、ドイツの勝利のため政治、經濟、軍事各方面を指導して極めて徹底した愛國的立場を示し、國民の志氣昂揚、國民精神總動員等戰時行政上卓越した手腕と功績を示した。實にドイツの軍部は世界を相手として四年半に亘る苦戰に耐へる實力を發揮したのである。

（ニ）大實業家

併合主義的强硬外交を唱へたが戰時經濟の組織を率先して行ひ、民心指導に盡力し、最後まで徹底した愛國心を示し、また時局の要請に應じてよく舊制度の改革に同意し、民心收攬に努めた。

（ホ）議會多數派

戰爭の前半よく軍部と協調したが、後半これと對立し、妥協的平和締結と國内改革を唱へ、國論を分

裂させた。この點については今に至るも賛否兩論がある。多數派の主張はドイツの國内革命を救ふため の改革を唱へ、ドイツの軍事的敗北前に媾和するの必要を力說した。

### 三　戰時法制

ドイツは恐らく戰時法制が最も早く、最も徹底的に行はれた國であらう。大體に於いて二五七四年中は臨時措置がとられたが、二五七五年中に次第に永久的、綜合的法制が現はれ、二五七六年末の祖國補助勤務法案に至つてほぼ完成した。食糧關係、衣料關係の切符制度、軍需生産優先の制度、戰時統制經濟、財政公債政策、いづれも今日の模範となつてゐる。その主なるものを述べれば次の如くである。

（一）重要生産部門勞働力の確保方策

（イ）熟練工を戰線から工場に歸還させた。

その數は二五七六年から七七年にかけての冬のみで一二萬五、〇〇〇名、二五七七年五月―七月に炭坑勞働者五萬名に上つてゐる。

（ロ）熟練勞働者の召集猶豫

その最も多かつたのは農業、鑛山業、軍需工業、建築業、木材工業であり、これ等の總數は二五七八年八月にプロイセンのみで一八二萬六、〇〇〇名に上つた。

（ハ）外人勞働力の利用

ポーランド、ベルギー、オランダ、フランス、ルクセンブルグ、スウィス等占領地及び中立國の勞働者は二五七六年以降强制的に移住せしめ、農業及び工業に就役させた。これら敵國人及び中立國人勞働者數を二五七三年―七四年と二五七七年―七八年とについて比較すれば、

農業――三〇萬一、〇〇〇名より三五萬八、〇〇〇名に增加（五萬七、〇〇〇名增加）

工業――一五萬七、〇〇〇名より二八萬九、〇〇〇名に增加（一三萬二、〇〇〇名增加）

（ニ）俘虜の利用

主として農業に利用された。

收容所外の勞役に服する俘虜には衞兵を付し、農業に從事せしめる者は一群一〇名を最大限として地主または農村に交付し、必要によつては作業場で更に組分けした。

監視には努めて雇主または雇入地方と關係ある國民兵を使用し、監視の傍、農業監督者としての役割を勤めさせた。俘虜の勞役の種類は國家が使用したものとしては、沼澤地、荒蕪地の開拓、森林の伐採並びに開墾、通路、鐵道、河川の修築、建築物造營、薪の採取、軍需品製作準備作業、菜果の栽培等であり、民間で使用したものは農林業、鑛山業が主であつた。

二五七六年一二月一日の國勢調査によれば、戰鬪員の俘虜一一七萬八、〇〇〇名中、農林業、水產業六三萬名、公務自由業二七萬九、〇〇〇名、鑛山業一二萬六、〇〇〇名、食糧品工業二萬三、〇〇〇名、その他建築機械器具工業、土石業、金屬加工業等である。

勞働に對してはいづれも僅少の報酬を與へた。

（ホ）婦人勞働、少年勞働の增加

（ヘ）不急、不要產業よりの勞働力の轉換

勞働者の最大部分が鑛山業、金屬加工業、機械器具工業、化學工業の四部門に集中された。なほ二五六七年一二月三日祖國補助勤務法案が制定された。

（二）婦人勞務動員

（イ）工　業

二五七四年八月四日婦人及び幼少年勞働者に對する保護規定を全廢する權限が政府に與へられ、二五七六年夏頃から婦人勞働者の進出が顯著となつた。

(1) 婦人の勞働奬勵

祖國補助勤務法に於いて軍部はある程度婦人に勞働義務を課する意圖があつたが、政府は婦人の社會的、家庭的地位を考慮してこれを止め、その代りに二五七七年初頭戰時局內に婦人勞働本部を設け、各地方事務所に婦人勞働支部を置き、婦人勞働者保護施設を行ふと共に、積極的に婦人による勞働代置を奬勵した。

その結果軍需工業方面の婦人勞働者は顯著な增加を示した。

(2) 婦人の進出せる勞働部門

二五七八年末使用勞働者一〇名以上の鑛山工場に關する報告書によれば、二五七三年末に較べて成人婦人勞働者の增加せる部門は左の如くである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 化學工業 | 六八〇・九% | 建築業 | 六三九・四% |
| 鑛山業 | 五八六・五% | 機械器具工業 | 五六〇・〇% |
| 其の他工業 | 二五五・七% | 金屬加工業 | 一八二・七% |
| 木材工業 | 一四〇・〇% | | |

また同報告による成人婦人勞働者の增加絕對數の最も高いのは

機械器具工業　四一萬九、〇〇〇名　化學工業　一八萬二、〇〇〇名

金屬加工業　一五萬名　鑛山業　九萬三、〇〇〇名

等。さうして成人婦人勞働者の增加數總計は七三萬三、〇〇〇名である。

（ロ）農　業

農業に於いては成人男子の出征、軍馬四徵集により著しく勞働力の不足を來し、しかも都市軍需工業へ流入する農村男子及び女子の增加と共に、殘留農村婦人の勞働は極めて加重され、生產に著しい支障を生じ、しばしば重要な勞働が放棄された。かくて次の如き方策が採られるに至つた。

1　婦人勞働力獲得のための宣傳

二五七七年三月二〇日戰時局の指令により開始。

寫眞、映畫、新聞、雜誌、ビラ、パンフレット、集會、牧師の說敎、地方婦人幹旋員等によつて行は

れた。

2　離村防止

都市資本家は農村から來た婦人の雇傭を禁止された。

二五七七年一月一日の法令は農業に從事してゐる婦人は農業に於いてのみ利用されるべき事を規定してゐる。

3　都市婦人の勞働力吸引策

都市から農業勞働に赴く婦人のため、宿所賃銀を良好ならしめ、その子供の取扱や修學の便宜を圖ることが農民に奬められた。

また農村出身の出稼娘（主として家庭奉公）の呼び戻しを奬勵した。

（三）學徒勤勞動員

（イ）準備期

一般學徒の最も大規模に動員された方面は農業勞働である。二五七四年には既に收穫期の休校が若干地方で實施され、大學、高等學校、商工學校、研究所に於いても收穫補助のため休校、休所する用意があつたが、職業紹介網が完備しないために充分の効果は擧げ得なかつた。

二五七五年より七六年にかけて、學徒分遣隊の農村派遣が漸次增加し、文部省、陸軍省により積極的に奬勵された。

（ロ）實行期

二五七七年に至つて「青年（上級學校生徒）團體に對する準則」が公布され、學徒の農業動員體制が整へられた。動員學徒の指導は陸軍省内に設けられた戰時局、戰時經濟課が主として當り、文部省は地方學校職員をしてその活動に助力せしめた。

學生生徒の直接の監督は教師内から選ばれた專任勞務官が當り、奉仕は原則的には無償である。但し週一マルク半までの小遣錢支拂ひは許された。

靴類は帝國衣料局がこれを支給し、宿泊と賄は學徒受入者側の負擔で、他に戰時經濟課が一人一日一マルクを補助支給した。（これにより小遣、衣服修繕、各種保險料が支拂はれる。）

備考

都市工業の方面からより高賃銀で學生を獲得せんとする競爭が起つたので、陸軍省の決定（二五七七年一〇月二三日の命令）によりすべての經營に於ける學徒に對しては勞賃を支拂はず、衣服修繕と小遣だけをあたへることとなつたものである。會社側の支拂ふ勞賃は戰時經濟課に引渡され、此所で小遣が青年に一樣に分配され、剩餘金は監督勞務官の報酬等に向けられるほか基金として積立させた。

（四）金屬回收

最初に金貨の回收運動、次いで金製品供出運動、後には銅鐵等の回收運動が行はれた。

これが徹底を期するため當該官廳及び有志のものによつてその趣旨解說のパンフレットが發行配布さ

れ、僧侶、教師を動員してその教區の信徒、生徒に呼びかけた。更に諸銀行、會社、醫師等の協力を得新聞、雜誌も亦これを支持した。

金貨回收運動の結果、ドイツ帝國銀行の金準備は二五七四年七月三一日現在一二億五、三二〇萬マルクから二五七八年一一月休戰直竝の二五億五、〇三〇マルクに躍進した。

四　治安維持

(一)　戒嚴令

戰爭勃發と同時に戒嚴令が布かれ、軍部が各軍團管轄地域の全權を握った。言論、出版、集會、結社いづれも軍當局の監督下に置かれ、罷業は絕對禁止となり、これを破ったものは軍隊に編入されるか刑罰を受けた。しかし極左過激社會主義團體を除けば政治結社、政黨機關紙等で特に禁止されたものはない。示威運動、罷業等いづれも戰爭末期に至る程頻繁に行はれて治安を亂した。

政府及び地方行政官は軍政を助け、各政黨、勞働組合等もこれを支持したので、治安はイギリス、フランスに較べて概して良かつた。

(二)　檢閱

戒嚴令下に軍當局による嚴重な檢閱制度が行はれ、國論の統一、國民精神總動員、必勝の信念堅持のための諸方策が講ぜられた。卽ち

反戰、平和思想の宣傳、戰爭目的の論議等は勿論禁止された。また長時間勞働に基く工場鑛山の災害、食料品騷動、罷業、示威運動、(イギリス、フランス等敵國のそれも含めて)治安維持違反事件の審議經過、婦女子自殺事件等の報道も禁止せられた。

通貨膨脹、企業聯合、資本家の不正事件についての論議も禁止され、特に軍事上の報道は嚴重な制限が加へられ、新聞紙に於いては禁止個所を空白にすることが禁ぜられた。

かかる檢閱方針が最も成功を收めたのは戰局に關してで、國民の樂觀的見解は戰爭末期に至るまで搖がなかつた。

五　民心指導

(一)　民心の狀況

(イ)　少數民族の問題

ドイツ帝國はその本國に於いても異民族を含んで居た。卽ち東部國境のポーランド人、西部國境のフランス人及びフランス化したドイツ人がその內最も重大なものである。そしてこれらはそれぞれ戰前ポーランド黨、或はエルザス・ロートリンゲン黨を結成してドイツよりの分離を策して居たが、戰時中には特別な事件は發生して居ない。

(ロ)　カトリック敎徒の動向

カトリック敎は南ドイツ及びライン地方、ポーランド地區の民衆に深く信仰され、大きな勢力を有し、政治的には中央黨に結束してゐた。戰爭中はこの派のエルツベルガーが二五七七年平和運動を起したこ

と、ヘルトリングが首相となつたことは既述の通りである。

政治的宗教的異分子としてドイツ帝國の厄介な存在ではあつたが、また法王との關係から平和交渉等には利用された。

(ハ) 社會主義諸派の活動

1 過激派の大部分は二五七六年以來社會民主黨から分離し、二五七七年春には獨立社會民主黨を組織した。

主張するところは對外的には平和主義、對內的には階級鬪爭再開であり、軍隊內にも次第に勢力を擴大し、合法的活動に終始したが、ドイツ革命の重要な分子であつた。

2 穩和派と中央派の一部は多數派社會黨として政府と協力し、戰爭遂行に盡力した。この點はドイツ政府の方策中最も成功したもので、開戰と共に政府、軍部と社會黨幹部との提携成立し、社會主義文書の軍隊內配布は許され、黨機關紙「フォルヴェルツ」の鐵道各驛での呼賣を認められ、またプロイセンの閣僚と警視總監は黨の機關を訪問して挨拶を述べ、勞働組合に對する訴訟は悉く取下げられた。

一方社會民主黨は國內の經濟問題を處理するために政府と協力し、勞働組合の同盟罷業をすべて中止せしめ、困窮救助、出征兵士家族の保護、勞働力配給等のためにその機關と戰力とを政府に利用せしめた。しかしながら特に重要なのは、社會民主黨が他國の社會黨に對して、ドイツに對する同情を喚起する目的を以て宣傳を試みたことである。

二五七七年春以來、一方には獨立社會民主黨成立し、他方ロシヤ革命と國內困難のため民心惡化するや、妥協的平和の締結と國內民主化を唱へた。しかし無併合の平和は唱へず、東部國境の擴張を承認してをり、國內民主化も決して積極的には唱へず、戰爭末期の國內動搖に對してもその組織の力を利用して人民の急進化を抑へた。

(ニ) 大ドイツ主義(汎グルマン主義)

勝利の平和を主張し、東はポーランド、バルティック海沿岸、ウクライナから、西はオランダ、ベルギー、西部フランスを兼併し、バルカンを經て遠くトルコを通り、イラン灣からインド洋に出んとする大規模な併合主義を唱へて居た。

この派の中心組織は全ドイツ聯盟であり、政黨としては保守黨、國民自由黨の大部分と進歩黨、中央黨の一部とがこれに屬した。

言よまでもなく妥協平和の締結には最も強硬に反對した。

(ニ) 政府の民心指導施策

政府による新聞、言論機關、教育機關の指導のほか次の如き方策がとられた。

(イ) 社會黨、勞働組合の懷柔(「社會主義」の項參照)

(ロ) ヒンデンブルク、ルーデンドルフの功績宣揚

諸報道機關を動員して極力兩人を讃美せしめ、ドイツ人の希望をこの兩人に注がしめた。ために兩將

軍に對する國民の信賴と尊敬は無制限に高まり、兩人による軍政兩方面の獨裁支配を可能ならしめ、またドイツ軍の軍事的不振に際しても人心にさしたる動搖を生ぜしめなかつた。殊に少國民に對してはヒンデンブルク等の功績を詳しく宣傳した。

（ハ）敵愾心の昂揚

1　詩歌の利用

繪入り雜誌「ユーゲント」に掲載された「憎惡の詩」は全ドイツを風靡したが、その詩の各節の結びは「我等の敵はただ一つイギリスである」となつて居た。

2　スタンプ、ポスターの利用

ドイツ國內到る所に「神よ、イギリスを罰し給へ」の文字が見られ、郵便物すべてに押捺された。

3　社會民主黨及び勞働組合

これと相呼應して「世界市場の專制者イギリス帝國主義を打倒せよ」と僚友に呼びかけた。

政府はあらゆる機關を動員して國民の敵愾心をあふり、これを最初はロシヤに、次にイギリスに集中して非常に效果をあげた。

（ニ）將來への期待をもたせること

戰爭當初に於いては大規模な併合政策を唱へ、ドイツの世界制覇を說いて人心を振興せしめた（一五七四年—七六年）。

次に長期戰となるや、近き將來に於けるドイツ軍の大勝、平和の到來を說いて人心に希望を持たせた。即ち

二五七七年初頭に於ける無制限潛水艦戰の效果を宣傳し、これによつて「六箇月以內にイギリスを飢餓に陷らしめ、秋には平和を招來せしめる」等。また二五七七年後半から七八年初期にかけての謂はゆる二五七八年春季大攻勢の成功とその效果宣傳等。

（ホ）妥協的平和希望者に對する鬪爭

二五七七年夏以來國內に厭戰氣運橫溢し、現狀維持による卽時妥協媾和論が擡頭するや、ルーデンドルフが中心となり、首相、軍部、及び祖國黨（保守黨及び國民自由黨に强固な地盤をもつ）支持の下に、軍隊及び國內人民に對する大規模な「戰爭完遂主義」敵愾心昂揚の宣傳が行はれた。これを「國民に對する啓發の奉仕」、または「祖國主義の敎授」と呼び、「敵はドイツの破滅を目論んで居る。これと妥協する途はあり得ない。敵に勝利を許せばドイツの滅亡あるのみ」との趣旨が强く說き聞かされた。しかしこの運動はルーデンドルフの告白する如く厭戰思想を克服するに至らなかつた。

（三）戰時言論統制

（イ）新聞の統制及び記事配給

新聞統制の機關としては、新聞局、ドイツ新聞中央局、新聞會議がある。」

これは平時より存在したもので、ドイツ各新聞紙の操縱、輿論の指導等を行ひ、あらゆる事件につき公表文の細部についてまで指揮し、また報道、特に外國關係の報道の一部を供給して居た。

2　ドイツ新聞中央局

國內地方紙（必要あれば全新聞）に報道のみならず、適當な論說をも配給する任務をもつてゐた。內務省所管で、會費は僅少のもので各新聞は事實上强制的に加盟せしめられ、配給された記事は半强制的に收錄せしめられた。

3　新聞會議

二五七四年八月組織され、國內諸新聞の連絡打合せを行つた。これには諸官廳、新聞局の代表、大本營、新聞班員が出席して、全國各新聞代表に差止命令の解釋適用に關する細部の說明、發表報道に對する疑義の說明、その他新聞社よりの質問に答へた。週一回定期的に開かれ、最近戰線から歸還した將校が大本營新聞班係員として出席した。

4　記事配給組織としては新聞社の戰線從軍記者と並んで戰時通信將校制度がある。これは二五七七年軍部が制定したもので、地方新聞に對する通信事務を負擔せしめたが、若干の記事は强制的に全新聞紙に掲載せしめた。

これらの制度の結果、全新聞紙は官製報道の掲載を强制され、官廳發表事項と明記された通信は一字一句の相違をも許されぬ嚴格さが要求されて非難を招いた。

（ロ）軍部による國內宣傳組織

二五七五年一〇月參謀本部內新聞局を擴張、第一課（內國課）、第二課（高等檢閱課）、第三課（外國課）となし、後に第四課（國內宣傳課）を設置した。

かかる擴張の理由は新聞事業について文官側と大本營側との連絡の緊密化にあるが、事實は軍部にある國內宣傳强化のためである。

（ハ）用紙統制と配給

戰爭狀態の進行と共に印刷紙の缺乏を來たしたが、これは木材、紙の軍需工業方面への需要增大したためで、中小新聞は紙價暴騰と廣告收入激減のため重大な脅威を受けた。

これに對する對策として、莫大な國庫補助金支出による印刷紙價格の引下げ、並びに有力紙に對する中央新聞の保護が行はれた。これは全國的に分布されてゐる中央新聞を維持して戰時國內の指導を强化するためで、比較的紙面の少い小新聞は、紙面數の大きな有力紙に較べて用紙制限の程度が遙かに少かつた。

二五七六年四月、ドイツ新聞戰時經理局が創設されて印刷紙需給の實際的割合を確定し、その下に新聞事業と製紙工業の代表者から成る査問會が屬し、各新聞の用紙使用量制限に盡した。

## 六　國民生活

### （一）戰時食糧事情

二五七五年八月頃から食料品の騰貴著しく、一〇月には肉類の節約が行はれ、一一月には食料品價格條令が出された。しかし下層民の窮乏は甚しく、小暴動が頻發する有樣で、社會民主黨が議會でこれを問題にし、反戰派の新聞が騷ぎたてた。

二五七六年春には食糧の缺乏はいよいよ目立つて來、これに伴つて反戰論、民衆運動が擡頭したが、七七年四月には食糧配給（主にパン、馬鈴薯、肉、バター）の增額を要求する大罷業あり、以後殊に軍需工場勞働者、炭坑勞働者が空腹を訴へて食糧罷業を起すに至り、甚しい榮養不足のために勞働能率低下し、厭戰氣分も濃化した。

二五七八年六月には豫定のウクライナからの穀物が充分に來す、パンの定量は一日二五〇瓦から二〇〇瓦に減少した。七八年後期に至つて食糧事情のますます惡化したことは言ふまでもない。

軍隊內の給養は銃後に較べればかなり良好であつたが、なほ極めて不足して居り、二五七八年春の大攻擊に際しては、兵士は敵陣に侵入するや、倉庫に殺到してハム、チーズ、チョコレート、酒等を掠奪暴食して軍事行動に甚だしい支障を來した程である。

ドイツの敗因は食糧不足のため人民が無氣力となり、抗戰の氣慨を失つたためとすら言はれて居る。

(二)　戰傷病者對策及び應召者家族の問題

(イ)　戰傷病者は出來る限り治療後軍務に堪えない者のみ除隊して生產に就かせた。

除隊された戰傷病兵中就職の見込ある者には職業教育を施した。

卽ち入院中將來の職業を選擇させ（なるべく從來の職業、またはこれに近いものを選ばせた）、援護機關より選定せる助言者を病院に出入させて職業補導を行はせた。

退院後援護機關の學校、または實習作業所に於いて教育訓練を施した後に、職業紹介機關の手を經て就職させた。

二五七六年一月末の國勢調査によれば、就職中の戰傷病者二二萬二四三名あり、その內譯は

| | |
|---|---|
| 農林水產業 | 四萬二八五〇人 |
| 工　鑛　業 | 一一萬六七二三人 |
| 商業交通業 | 四萬〇二一二人 |
| 家事使用人及び日傭勞働者 | 三〇四四人 |
| 公務自由業 | 二萬六四一一人 |

これらの內多數は門番、監視等の職業であつた。

(ロ)　應召者家族に對しては極力疾病保險手當を給付する如く政府で考慮したが、保險料の三分の二を應召者が支拂ふ規定になつてをり、いろいろの非難を招いた。

(三)　國民道德

(イ)　昂揚せる事實——相互扶助、犧牲的精神へのあこがれ、勞働奉仕を志願する傾向もあり、殊に

忠君愛國の精神は極度に發揮された。

（ロ）低下せる事實――青少年の犯罪增加し、また出征軍人遺家族の道德低下、性的犯罪增加の事實あり、亦ヒットラーは「我が鬪爭」の中で、二五七六年末に於けるミュンヘンの兵役忌避橫行を慨いて居る。また闇取引、買ひ溜め、賣り惜しみ、統制機關の幹部從業員による不正行爲が橫行した。

（四）厚生防疫

防疫は醫師、藥劑師、藥品不足のため困難であつたが、二五七四年八月七日內閣の告示により、醫師の試驗を簡單に施行することとなり、醫師の補充を急いだ。また保險法によれば、正規の免狀ある醫師、齒科醫のみが醫療の給付をなし得るのであるが、戰時下止むを得ず、醫師の監督下に醫者ならざる醫療家を置いてこれに保險醫療の給付をすることを許した。

また母性保護のため、特別分娩救助が國家によつて行はれた（二五七四年二月三日の首相公告）。

（イ）資格

當初は疾病保險の被保險者の妻だけが給付を與へられたが、後には夫の收入、または家族の收入が年額一、五〇〇マルク以下の者すべてに分娩給付が與へられた。

（ロ）給付額

一時金二五マルク、その後八週間は毎日一マルクの手當、產婆、醫師に對する保障として一〇マルク、その後の給付金として五〇ペンニッヒづつ一二週間與へる規定となつてゐる。

また勞働者保護のため、戰時婦人勞働全國委員會が二五七七年一月末に結成され、從來勞働婦人及びその家族の保護のために存在した協會及び團體を統制した。その委員會は

健康保全、休養場の設置、被服食料品の調達、療養所、寄宿舍、幼稚園、托兒所、相談所等の設置に努力した。

## 第四項　戰時經濟

### 一　概括

歐洲戰爭中ドイツは一、六〇〇億マルクの戰費、一八五萬の戰死者と、四二五萬の戰傷者、四箇年半に亘る國民の饑餓と窮乏とを代償として、結局戰敗と革命と言ふ苦境に追ひ込まれたのである。

今その敗因の主なるものを、專ら經濟の面に卽して觀れば次の如くである。

(1) 總力戰の本質についての認識なく、これに對する準備を全く缺如せること。

(2) 戰時中經濟統制が逐次强化されたが、その根底に於いては依然として自由經濟の基調を脫し得ず、ユダヤ的利潤追求主義が極めて露骨に行はれたこと。

(3) 右に乘じて國民間の階級對立を激成せんとする共產主義の宣傳が行はれたこと。

(4) 短期戰と戰勝との前提の下に專ら公債政策によつたために、物價高騰を齎らし、延いて後來の破局的通貨膨脹の端緒を既に戰時中に開いたこと。」

(5) 聯合國による封鎖のために主要軍需資源の獲得漸次困難となり、アメリカの參加による聯合國側の豐富な兵器生產に對抗し得ざるに至つたこと。

(6) 食糧對策に萬全を缺いたために、戰線銃後を通じて全面的飢餓の狀態を現出し、戰意を喪失せしむるに至つたこと。

(7) 戰線が廣汎に亘つたのに對して輸送力これに伴はず、兵站補給に困難を生じたこと。

(8) 聯邦制のために、中央政府による統一的强力施策の實施が至難であつたこと。

(9) 國務と統帥との連絡圓滑を缺き、從つて經濟の實情と、軍事上の要求との適合を缺くことしばしばであつたこと。

右の內いづれが決定的原因であるかについては種種議論があるが、概ね食糧の不足と共產主義の宣傳とを以てその決定的なものであるとしてゐる。しかし共產主義は食糧缺乏によつて國民の戰意喪失した時、これに乘じて勢を逞しくしたものであり、その害毒は寧ろ戰力の實質的崩壞以後に於いて著しかつたものと思はれる。

從つて敗北の最大原因としては食糧不足を擧げるべきであらう。事實、二五七八年に於いてドイツ國民の食糧消費は、戰前に比して主食物に於いて二分の一以下、副食物に於て一〇分の一前後となつてゐた。銃後に於いて國民は永續的榮養不良から慢性的飢餓に彷徨し、前線に於いて兵卒の空腹は捕獲食料品を見捨てて前進することを肯んじない。かくの如き慘憺たる狀態が久しきに亘つて存續し、しかもその改善の見込が全くなくなつたことは、歐洲に於ける最も强靭な愛國心にとつても致命的な結果を與へたのである。

更に我我は最大の敗因の一として、これに戰鬪資材の相對的不足を加へ得る。戰爭前半に於いて彼我ほぼ拮抗してゐた兵器彈藥の生產は、アメリカの參戰によつて壓倒的に聯合國側の優勢となつた。六發の彈丸に對して一發しか應射出來ず、鐵に對して血を以て邀擊するのほかなき戰鬪は、つひに永續し得なかつたのである。

備考

敗戰の缺陷がナチス・ドイツに及ぼした影響。

ナチス・ドイツは歐洲戰爭に於いて敗北の原因となつた諸缺陷に對して、おのおの次の如き方策を採つて今次大戰に備へた。

(1) ナチス黨政權掌握以來七箇年に亘り總力戰に對應する準備を整ふ。

(2) 自由主義體制を拂拭し、ユダヤ人を放逐して全體主義體制を完成す。

共產主義を徹底的に彈壓す。

(4) 租稅の重課、消費の節約規正によつて通貨膨脹の防止に努力す。

(5) 軍需資源の開發、代用品の奬勵、科學技術の促進によつて國防資材の自給を圖る。

(6) 世界要地法等による農民保護、食糧割當制の早期實施、配給機構の整備、ウクライナ地方の占領等による食糧問題の解決に努む。

(7) 自動車工業の劃期的發展と自動車道路の廣汎な建設を行ふ。

(8) 各邦と國との統合を斷行して中央集權を完成す。

(9) ヒトラーが同時に國務と統帥との最高指揮者を兼ねることによつて政戰兩略の一致を完からしめた。

第五章　長期戰の指導

右の如き諸對策にも拘らず、食糧の絶對的不足と軍需資材の相對的不足と言ふ二大缺陷は依然として充分に克服されてゐない。從つて今次歐洲戰爭に於いても、その最大弱點はここに伏在すると思はれる。

いづれにしても食糧の絶對的必要限度の確保と兵器生産の對敵比率の上昇は、長期戰勝獲得上不可缺、喫緊の要請であることは最早や冗言を費すを要しない。

## 二　財政及び金融

### （一）戰　費

歐洲戰爭勃發以來、休戰調印までの間に帝國議會が承認した一二回の信任豫算の合計は、一、三九〇億マルクである。しかし實際の戰費は右の議會協贊額よりも遙に多く、協贊外の債務が極めて巨大であつたことと思はれる。その算定は種種行はれてゐるが、最も信憑すべきものとして二五七九年二月シヤファ藏相の公表せるものを擧げれば、次の如く、一、六〇〇億マルクを超える。」

第一表　ドイツの戰費

| | | |
|---|---|---|
| 二五七四年 | 七、五〇〇百萬マルク | |
| 二五七五年 | 二三、〇〇〇百萬マルク | |
| 二五七六年 | 二六、六〇〇百萬マルク | |
| 二五七七年 | 三九、五〇〇百萬マルク | |
| 二五七八年 | 四八、五〇〇百萬マルク | |
| 小　計 | 一四五、一〇〇百萬マルク | |
| 各年分類不能のもの | 六、〇〇〇百萬マルク | |
| 同盟國への貸附 | 九、五〇〇百萬マルク | |
| 總　計 | 一六〇、六〇〇百萬マルク | |

尤も戰時中に於ける貨幣價値の低下を考慮すれば金マルク額は遙かに少い。グレブラーは約九五〇億金マルク以下と見積つてゐる。因みに戰前ドイツの國民所得は四二〇億マルクであつた。

### （二）戰費の調達

戰時財政對策は豫め可成り準備されてゐたと言へるが、それは全然短期戰に對する準備であつて長期戰に對するものではなかつた。從つて開戰當初の財政的措置は、他國に比して比較的圓滑敏速に行はれたのであるが、長期に亘る方策としては却つて多くの破綻を示した。

蓋し政府はその當初迅速な勝利と莫大な賠償金取立とを前提としたために戰時增稅の必要を認めず、專ら公債の發行と紙幣發行とに依つて戰費を調達せんとしたのであつて、租稅が採り上げられたのは二五七六年以降であり、しかも極めて微溫的な政策が採られたに過ぎない。かくて結局戰費の九〇%以上は、長短期の公債と不換紙幣化された銀行券の發行によつて賄はれたのである。

（イ）　開戰當初の資金は帝國銀行によつて割引された國庫證券の發行によつて支辨したが、その後もこの方法を繼續し、この種の流動公債が巨額に上ると、半期毎に長期公債を募集して借り換へる方法を採つた。從つて次表の如く二五七六年末以降、戰時公債の手取金が浮動公債を整理するに不充分となると、財政上の破綻は漸く顯著となつてきた。

第二表　公債發行經過

| | 甲　戰時公債手取金 | 乙　上記公債發行當時の流動公債 | 丙、乙に對する甲の過不足 |
|---|---|---|---|
| 二五七四年九月 | 四、四六〇百萬マルク | 二、六三二百萬マルク | 一、八三二百萬マルク |
| 二五七五年三月 | 九、〇六〇百萬マルク | 七、二〇九百萬マルク | 一、八五一百萬マルク |
| 二五七五年九月 | 一二、一〇一百萬マルク | 九、六九一百萬マルク | 二、四一〇百萬マルク |
| 二五七六年三月 | 一〇、七一二百萬マルク | 一〇、三八八百萬マルク | 三二四百萬マルク |
| 二五七六年九月 | 一〇、六五二百萬マルク | 一二、七六六百萬マルク | （一）二、一一四百萬マルク |
| 二五七七年三月 | 一三、一二二百萬マルク | 一四、八五五百萬マルク | （一）六、七三二百萬マルク |
| 二五七七年九月 | 一二、六二六百萬マルク | 一七、二〇四百萬マルク | （一）一四、五七八百萬マルク |
| 二五七八年三月 | 一五、〇〇一百萬マルク | 三八、九七一百萬マルク | （一）二三、九七〇百萬マルク |
| 二五七八年九月 | 一〇、四四三百萬マルク | 三九、四一四百萬マルク | （一）三八、九七一百萬マルク |

（ロ）帝國公債が九回とも五分の利付を以て同一價格で募集されたことはドイツの誇示するところであるが、右應募は眞の節約貯蓄によつてなされたものでなく、銀行からの借入金、貯蓄の振替によつてなされた部分が多く、單なる見せかけの消化に終つてゐることが多い。現在我國に於いても隣組等に於ける公債割當が半强制化せる結果、類似現象を生じつつあることは留意すべきである。

（ハ）開戰後政府は帝國銀行の金兌換を停止して銀行券を紙幣化したが、その流通額は戰時中に一〇七億マルクの膨脹を示した。更にこのほかに大藏省紙幣を發行したが、その流通高は大したものでなく、二五七八年七月約三億四、四〇〇萬マルクであつた。

（ニ）戰費の調達は專ら信用の膨脹に依存し、政府は「戰爭が國民に課せる重壓を租稅によつて增加するを欲しない」と囁いてゐたが、戰局の長期化はかかる態度の持續を許さず、二五七六年に入つて輕微ながら初めて增稅並びに新稅の賦課が行はれ、二五七七年以降漸次加重された。

（ホ）この間直接稅の課稅權が各聯邦政府にあつて帝國政府の介入を拒否せるために、帝國政府としては主として間接稅によるのほかなく、聯邦制度の弱點が痛感された。

戰爭中に於ける租稅、その他の經常收入は二四〇億マルクに上る。ドイツ帝國の年豫算は戰前約三八億マルクであつたから、これを基礎に戰爭中の平常的支出を一七〇億マルクと概算すれば、租稅が本來の意味の戰費に寄與した部分は七〇億マルク、卽ち五%以下に過ぎない。

（三）資金の動員

戰爭中ドイツは戰前に享有した豐富な金準備と巨額の在外資產と、確固たる信用とによつて對外支拂になんらの支障を感じなかつた。その支拂が主として信用を以てなされ、しかもマルク貨でなされた事は驚嘆に値する。

（イ）戰爭勃發當時の國內貯藏金は、帝國銀行手持一三億六、〇〇〇萬マルクと流通中のものを合し三六―三九億マルクであり、戰時中その殆んどすべてを政府に集中し得た。戰時中輸入品に對する支拂として一〇億、資本逃避及び外國に於けるマルク爲替安定のため四―五億を失つたが、なほ二五七八年末、中央銀行には二三億マルクの金が集積されてゐた。

（ロ）外國證券保有は戰前一八〇億マルクに上つたが、その中三〇億マルクが賣却された。また一〇億マルクの內國債が中立國によつて買取られた。クリューガーによれば、戰時中のドイツの入超一一〇億及びドイツの負擔した同盟國の輸入四〇億、合計一五〇億マルクは、次の如き資金動員によつて補塡された。

第三表　戰時入超決濟の內譯

| | |
|---|---|
| 金　輸　出 | 一〇億マルク |
| 外國證券賣却 | 三〇億マルク |
| 內國證券賣却 | 一〇億マルク |
| 外貨による借入 | 三五億マルク |
| マルクによる借入 | 六五億マルク |
| 計 | 一五〇億マルク |

（ハ）對內的には、開戰後に於ける貨幣需要增大と硬貨引上に對應するために、貸付金庫證券と言ふ新形式の貨幣を設けた。これは貸付金庫によつて小商工業者その他に貸出された資金で、法貨としての性質は有しなかつたが、すべての公課金に用ひ得た。ドイツに於いてイギリス、フランスの如き一般的支拂猶豫、卽ちモラトリアムを避け得たのは、この貸付金庫の活動によつて流動資金の凍結を防止し得たからである。

（四）通貨膨脹と物價政策

戰爭前帝國銀行券發行には、三分の一の正貨準備を必要とし、他の三分の二は商業手形による準備を必要としたが、開戰後この規定は修正され、商業手形と言ふ用語の範圍が擴大され、貸付金庫證券のみならず、短期の國庫債券をも含むこととなつた。從つて政府の需要が增大するにつれて社會の貨幣需要とは關係なく、ただ國庫の財政的必要のみに應じて紙幣の增加分が流通場裡に投げ出された。かくて戰爭が繼續するに伴つて貨幣價值下落のために、政府はその需要に應じてますます多くの對價を支拂ふの已むなきに至つたのである。

一般に物價の暴騰は寧ろ戰爭後のことであり、殊に二五八〇年以降とされてゐるが、しかし戰時中既にその破綻の條件が完成されてゐたことは否み難い。殊に二五七八年七月ドイツ軍の退却が始つて以來、通貨に對する不信の念は急激に增加してゐる。

（イ）各年七月三日現在の各種通貨流通額は次の如くである。」

第四表　各種通貨流通高

| | 帝國銀行券 | 大藏省紙幣 | 貸付金庫證券 |
|---|---|---|---|
| 二五七四年七月 | 一、八九二百萬マルク | 一四〇百萬マルク | — |
| 二五七五年七月 | 五、三一六百萬マルク | 二八八百萬マルク | 七〇〇百萬マルク |
| 二五七六年七月 | 六、八四〇百萬マルク | 三二〇百萬マルク | 一、二七二百萬マルク |
| 二五七七年七月 | 八、六三二百萬マルク | 三四〇百萬マルク | 四、五四八百萬マルク |
| 二五七八年七月 | 一二、五七二百萬マルク | 三四四百萬マルク | 七、五八八百萬マルク |

私設の四發券銀行の發券額は殆んど靜止し、戰時中を通じ、僅かに二四〇百萬マルクの增加を示したのみである。

（ロ）紙幣發行額の巨大なるに驚いた政府は、小切手、その他の信用手段に依る勘定決濟の習慣を奬勵した。その結果帝國銀行の預金は、二五七四年七月九四四百萬マルクから、二五七八年七月七、九一二百萬マルクに增加した。

（ハ）金準備と銀行券發行高の割合は二五七四年七月の七一%から、二五七八年二月には一〇・七%に低下した。

（ニ）以上の如き放漫な通貨政策と、他方に於ける物資の不足は當然物價の高騰を招來した。二五七三年を一〇〇とする卸賣物價指數は次の如くである。

第五表　卸賣物價指數（二五七三年＝一〇〇）

| | 食料品 | 工業品 | 國內生產品 | 輸入品 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 二五七四年 | 一〇八 | 一〇〇 | 一〇六 | 一〇一 | 一〇六 |
| 二五七五年 | 一五二 | 一二三 | 一四三 | 一三一 | 一四二 |
| 二五七六年 | 一六三 | 一三四 | 一五四 | 一四一 | 一五三 |
| 二五七七年 | 一八八 | 一六〇 | 一八六 | 一四七 | 一七九 |
| 二五七八年 | 二一八 | 一九五 | 二三八 | 一七二 | 二一七 |
| 二五七九年 | 三五二 | 五三四 | 三八五 | 五五二 | 四一五 |

二五八〇年　一、二一五　一、九九三　一、二五三　二、六五二　一、四八六

かかる事態に對し、政府の物價政策は頗る低調にして不統一なものであつた。開戰後直ちに日常消費財に對して最高價格を設定し、これに關する强制措置を採り得る法律を制定せるに拘らず、この最高價格制は殆んど全く失敗に終つたと言つてよい。卽ち都市と地方に於いてその價格に著しい差があり、最高價格自體しばしば引上げられ、處罰の脅威にも拘らず、取引上殆んど組織的に無視され敬遠されてゐる。

しかもこの價格統制は主として日常消費品について行はれ、軍需品については適用されなかつたから、生產全般の軍需化と共に全く無力化し、戰時供給を扱つた軍當局自體が軍需調達に急なる餘り、價格を寧ろ引上ぐる結果となつた。ヒンデンブルク綱領實施以來特にその傾向が著しい。

## 三　經　濟

### （一）統制機構とその運營

戰爭の短期を確信したために戰時經濟の統一的編成の如きは全く考へられず、開戰當時のすべての計畫及び處置は野戰に於いて消耗される資材の補充問題に限られ、全軍需產業の最高效率發揮のための措置は遙か考慮の外にあつた。戰局が進展した後國民生活の方面は文官當局の手に統制されたが、國防工業の再組織は主として陸軍當局が擔當した。蓋しドイツの作戰は殆んど陸軍中心であつたからである。

（イ）開戰と共に、ア・エー・ゲー（A. E. G.）社長ラテナウの進言に基いて陸軍省内に軍需原料課を設け、國内所在軍需原料の差押へを行ひ、その最も有效な使用を確保し、次いで政府監督のもとに多數の軍需會社を設立して原料の調達供給を統一した。その後原料課の業務は漸次擴大され、二五七六年末軍需局に改編され、國家總動員の主體機關とされ、產業、貿易、勞務各方面に亘る統制管理を行ふに至つた。

（ロ）軍需會社の形態は種種であつたが、元來私的企業でそれに公的委員が參加した公私協同會社である。その職能の主なるものは次の如くである。

1 原料品手持の登錄及び終局的徵發
2 諸製造業者への原料資材の分配
3 輸入原料品の共同購入及び輸出管理
4 諸製造業者への軍部その他の註文配分
5 代用資材の處理、時にはその生產
6 使用制限の取締監視
7 賣買取引勘定清算の中央集權化
8 價格管理への參加
9 直接生產割當への參加
10 低能率工場閉鎖に對する協力（ヒンデンブルク綱領により追加）

（ハ）軍需會社が主として中小工業部門に於いて設立されたのに對し、大工業部門にして企業聯合の存する部門はこれを强化し、これに公的規律を加へて公私混合經營體とし、企業聯合が存在しない部門には强制的に組織せしめた。かくて軍需局は一の企業に對する應接の代りに、軍需會社及び企業聯合を對象として能率的統制を行ふを得た。

（ニ）食糧については二五七五年二月、ベルリンにパンの切符制を施行したのを手始めとし、二五七六年五月戰時營養省が新設され、パン用穀物等主要食糧の中央集權、切符制度を逐次實行し、末期には殆んどすべての食料品が切符制となつた。供給機關は帝國食糧會社である。

かかる統制に於いて政治的、行政的職能は官吏、軍人によつて行はれたが、實際上の專門的判斷については常に實際家が大なる發言權を有し、政府は戰時經濟運營上、大企業の全幅的支持を必要としたために、彼等の利益偏重に陷るの傾きが强かつた。名目上、當局の諮問機關であつた戰時ドイツ工業委員會に參加せる四人の大金融業者及び大工業家の如き、實質的には軍需局の方針を左右した。

かくの如き大企業家についてはしばしばその暴利、不正が指摘されたが、たまたまこれらの大企業並びに軍需會社の首腦者等にユダヤ人の多かつたことは、戰時經濟の破綻を以てユダヤ人の陰謀であるとするものを生ずるに至つた。

（二）ユダヤ人問題

ドイツの戰敗についてその責をユダヤ人に歸せんとする說は廣く行はれ、甚しい場合には戰爭の勃發から敗北に到るまでの一切の事情を以てユダヤ人の國際的陰謀であるとしてゐる。かかる一面的解釋は姑く措き、少くともドイツの革命並びに敗戰の過程に於いて、ユダヤ人なる共產主義者の活躍が行はれ、ユダヤ人たる大金融家、大企業家の行動が關聯せるところあるは否み難い。

今ドイツの戰爭指導層に於けるユダヤ人の活躍狀況を見るに

（イ）戰時統制の創案者にして戰時原料課の初代首腦者たるラテナウ及び、ドイツ皇帝の信任篤き中央購買會社創立者バルリンがいづれもユダヤ人である。

（ロ）軍需會社始め多くの戰時經濟機關の幹部はユダヤ人である。（幹部首腦者五六三名中六五名）彼等はその地位を利用して投機を行ひ、暴利を貪り、許可證を僞造し、密貿易を行つた。スウイスを通じてイギリスへ小麥を輸出した事さへある。

ユダヤ人商人と役人との連絡——政府部內のユダヤ人と結托し、軍需品の納入、拂下に當つてユダヤ人のみを指定した。例へば毛皮、軍靴等の卸賣商人はすべてユダヤ人であつた等。

（ハ）しかし或る場合には、ドイツ商人の到底入手し得ない物資も、ユダヤ人は在外の仲間と連絡してなんらかの方法によつて獲得し來るため、軍當局に於いてもこれを便利として利用したことがある。戰時に於いて政府と關係ある商人、企業家が暴利を獲得し、不正を犯した例はひとりドイツに限らずイギリス、フランスにも多いことであり、必ずしもユダヤ人のみではない。從つて戰時經濟の歪曲者としてユダヤ人を指彈する場合、專ら血統上のユダヤ人のみに限るのは些か偏れる見解であるを免れない。しかしこれに自由主義的、非愛國的性格、卽ち精神上のユダヤ的存在をも包含せしめるならば、その破壞的作用は大いに警戒を要する。

（三）產業再編成と原料對策

開戰當初急激な變動によつて停止狀況に陷つたドイツ產業は、間もなく金屬工業、機械工業を中心として活潑な活動を回復したが、これに伴つて貯藏資材の急速な消盡が行はれ、二五七五—七六年にかけて資材の不足は勞力不足と相俟つて生產は著しく低下した。更に戰爭の長期化、封鎖の效果の漸增、新しい資材戰の重壓はドイツ經濟を窒息せしめんとするに至つたので、一方に於いて、戰爭初期ラテナウの創始せる原料割當制を產業全般に擴大强化すると共に、他方ヒンデンブルク綱領の實施によつて生產隘路を打開せんと圖るに至つた。

（イ）ヒンデンブルク綱領による產業再編成

二五七六年末實施されたヒンデンブルク綱領は經費の如何を顧みず、一切の設備、貯藏資源及び勞力の總力戰的動員によつて兵器の生產を二乃至三倍化せんとした最後的努力であり、「絕望案」の名をもつて呼ばれたものである。最も重要な直接手段は生產の極端な重點主義であり、强制的工場閉鎖、最高能率工場への生產集中、資材使用の嚴重制限、一切の生產人口の動員等の諸方策が採られた。その結果、ドイツの生產體系一般が既に過重の負擔に喘いでゐたのにも拘らず、二五七七年度に於ける軍需生產は

かなりの上昇を示し、開戰以來の最高を示すに至つた。しかしそこには既に次の如き破綻が見られ、二五七八年に於ける生產の激減を招來した。

（ロ）　ヒンデンブルク綱領の及ぼした惡影響

1　設備の維持改修――資材の補塡が全く無視されたために、再生產基礎が破壞されたのみならず、鐵道施設の如き重要手段の荒廢は、直ちにこれに伴ふ石炭、その他の輸送難を齎らした。

2　工場轉換の可能性は既に利用し盡されてゐたために、絕對必要のものについては國家自ら新建設を行ふのほかなかつたが、それは著しい遲滯を招いた。例へばベルリン郊外の製鋼所の如き、戰爭が終了せんとする時漸く準備を完了した。

3　兵器彈藥の需要は過大に見積られた。例へば、輕砲目論見書は月平均三、〇〇〇門の野砲生產を要求したが、これを操縱する兵士の不足が明かとなり、新工場の設備完了せる時に至つて一、一〇〇門に引下げられた。

4　軍需品價格の暴騰は他の部面に波及し、價格統制を全く無力化した。」

5　綱領に伴ふ勞務動員と勞働强化は勞働階級の不滿を助長した。

備考

ヒンデンブルク綱領は當時の緊迫せる內外情勢に對應して採られた非常手段であり、その總括的功罪は、單に上述の經濟的諸結果のみから斷定し得べきものではないが、深くその實情を檢討して大局的見地からその利害得失の跡に鑑みるべきであらう。

（ハ）　戰時生產概況

一般に見てドイツの戰時生產は戰爭前の水準を回復し得なかつた。二五七三年に於ける總生產高を一〇〇として二五七四―七八年の生產指數を見れば、おのおの七四、六三、七三、七四及び七三となつてゐる。その各分野に於ける概況は次の如くである。

1　鋼材及び石炭の生產は、開戰後フランス、ベルギー兩國の重要工鑛業地帶を占領せることによつて著しく有利となり、同盟國側の生產は聯合國側を凌駕する狀況にあつた。しかるにアメリカの參戰によつてこの形勢は逆轉し、次表の如く、聯合國側の鐵、石炭生產は同盟國側を全く壓倒するに至つた。

第六表　同盟國側と聯合國側の主要資材生產高對比

| | 二五七四年八月 | | | 二五七七年一〇月 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 同盟國側 | 聯合國側 | | 同盟國側 | 聯合國側 |
| 石炭 | 三三一百萬噸 | 三九四百萬噸 | 三 | 三五五百萬噸 | 三四六百萬噸 |
| 鐵鑛 | 二二百萬噸 | 二二百萬噸 | 二 | 二五百萬噸 | 一六百萬噸 |
| 鋼材 | 二一百萬噸 | 一九百萬噸 | 一 | 二四百萬噸 | 一三百萬噸 |
| | | | | 二五七七年一〇月 | |
| | | | | 同盟國側 | 聯合國側 |
| | | | | 三二〇百萬噸 | 八五一百萬噸 |
| | | | | 一五百萬噸 | 五〇百萬噸 |
| | | | | 一六百萬噸 | 五八百萬噸 |

主要軍需原料の生產に於ける優位が常に戰局の有利展開と時を同じくしてゐることは注目すべきである。

戰時中の重要鑛物資源生產は次表の如くである。鑛山の數は增加してゐるに拘らず、能率、品位共に低下したために、生產は結局戰前のそれに及ばない。

第七表　主要原料生產高

| | 二五七三年 | 二五七四年 | 二五七五年 | 二五七六年 | 二五七七年 | 二五七八年 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 鐵鑛、 | 三五・九〇 百萬噸 | 二五・五〇 百萬噸 | 二三・八〇 百萬噸 | 二八・三〇 百萬噸 | 二七・〇〇 百萬噸 | 七・九〇 百萬噸 |
| 銑鐵 | 一九・三〇 | 一四・三〇 | 一一・七〇 | 一三・三〇 | 一三・二〇 | 九・二〇 |
| 鋼材 | 一八・三〇 | 一四・八〇 | 一三・〇〇 | 一五・六〇 | 一五・四〇 | 一一・八〇 |
| 亞鉛 | 〇・二八 | 〇・二四 | 〇・一九 | 〇・一八 | 〇・一九 | 〇・一九 |
| 鉛 | 〇・一九 | 〇・一八 | 〇・一二 | 〇・一二 | 〇・九〇 | 〇・八〇 |
| 石炭 | 一九〇・〇〇 | 一六一・〇〇 | 一四七・〇〇 | 一五九・〇〇 | 一六八・〇〇 | 一五八・〇〇 |
| 石油 | 〇・一二 | 〇・一一 | 〇・一〇 | 〇・九〇 | 〇・九〇 | 〇・〇四 |

2　兵器彈藥の生產は絕えず擴充され、二五七六—七七年に於いてその最高に到達した。新規建設よりも既存工場の擴大及び轉換が一層重要であつた。生產內容の詳細は不明であるが、火藥の月產額は、戰爭前の二〇〇噸から二五七八年一〇月、一萬四、三〇〇噸、小銃は月產三萬噸から七六年八月、二五萬噸、機關銃は月產二〇〇噸から七八年一〇月、一萬三、〇〇〇噸へ上昇した。

3　新興產業の比重も絕えず上昇した。窒素、アルミニウムは勿論、その他原料缺乏が新產業の樹立、新技術の導入を齎らしたものは少くない。合成護謨、液體燃料、人造纖維等には、後日の發達の基礎をいづれも戰時中に築いた。窒素及びアルミニウム生產は電力を多く必要とするために亞炭利用の大發電所が建設され、その總發電力は戰爭前に倍加するに至つた。また新興產業に於いて亞炭資源の重要性增加し、これに伴つて中部ドイツへの產業立地移動現象が見られたことは興味がある。



4　謂はゆる平和產業は逐年壓迫され、纖維工業の如きは二五七三年を一〇〇として二五七五年六五、二五七八年は七に過ぎず、戰前の一、七〇〇箇所の紡織工場中二五七八年に操業してゐたものは僅かに七〇箇所であつた。建築業の如き更に甚しく、二五七六—七七年には戰前の四%となり、これに伴ふ家具製造業、リノリウム工業は殆んど全滅した。

（四）不足資源補充策

（イ）增產奬勵

不足資源は開戰當初は主として輸入は非鐵金屬のみであつたが、二五七五年夏には油脂類及び一切の纖維品がこれに加はり、次いで漸く國內生產原料に及び、二五七七年には殆んどすべての原料品が缺乏し、勞務不足と共に產業活動を著しく阻害した。

これに對して增產への努力は極力行はれたが、結果に於いては減產に終つたもの多く、僅かにウォルフラム、硫黃、錫、ニッケル等に於いて輸入減を補充し得たに止まる。

（ロ）銅、鐵等の回收

回收も大いに行はれ、例へば銅の如きは家庭工場等に使用してあるものは勿論、送電線、鐵道、敎會の鐘に至るまで回收された。代用品使用も無數に上つたが、多くの場合、材料、勞力をより多く必要とするのみならず、品質低下を免れなかつた。

（ハ）占領地の利用

資源不足に對して特にその初期に於いて占領地が重要な貢獻をなし、戰力增强に寄與したことは特記に値する。

ドイツは各占領地に於いて特別の機關を設けて、占領地住民からの原料品吸收と退却せる敵軍の遺棄資材の管理に當らしめたのみならず、その殘存工場、機械、設備についても廣汎なる利用を圖つた。

1　ベルギーに於いては、ドイツ軍司令部は重要資材（有色金屬・讓謨・纖維原料・石油製品等）の押收を行ひ、これをドイツへ搬出する一方、ベルギーの有色冶金業の五工場を利用して、銅、鉛、亞鉛の精鍊を行つた。

2　北部フランスに於いてドイツは鐵鑛、石炭、加里、銅等の重要資源を占領したが、これらは固より完全な姿に於いてではない。しかし平時の生產高の五割弱の生產を實現し得て、ドイツ國內生產の減退を補ふこと頗る大なるものがあつた。また北部フランス冶金業の一部は軍需會社に引渡されて操業を續けた。

3　ポーランド諸州には帝政ロシヤの金工業の一九%が存在してゐたが、占領地域のそれは充分に利用された。ロシヤ領から搬出された木材によつてドイツの木材需要の四分の一以上が充されたと言ふ。

4　ルーマニアの石油は占領地から獲た原料中最重要のものであつた。占領當時押收せる一五萬噸を除いて、占領中ルーマニアから搬出された石油製品は百萬噸以上に達してゐる。

5　占領地への課徵金

占領地に對する課徵金の詳細は不明であるが、ドイツが占領地に於いて實現した利益は、約五七億金マルクに上ると算定されてゐる。但し諸商品、機械、外國爲替、有價證券等を包含し、ドイツの支出（道路及び鐵道回復、產業諸設備の運營資源開發のための）を差引かざる數字である。

（二）　貿　　易

一般に、戰爭中のドイツは聯合國側の封鎖によつて全く孤立し、自給自足の已むなき狀態にあつたとするのは必ずしも當らない。經濟封鎖にも拘らず、中立諸國との貿易は少くも戰爭前半に於いてはかなり活潑に行はれたのみならず、殖殖の迂回路を通じて敵國側との商品交流さへ行はれたものとみられる。二五七四年八月—七八年一二月の貿易總額は次の如くである。

第八表　戰時貿易總額

| | |
|---|---|
| 輸入 | 二二八億金マルク（三一八紙幣マルク） |
| 輸出 | 一一七億金マルク（一六五紙幣マルク） |
| 入超 | 一一一億金マルク（一五三紙幣マルク） |

金額から見れば、戰時輸入總額は二五七三年の一一二億マルクの約二倍に當り、平時の二箇年分を四箇年半に輸入したことになるが、世界物價の騰貴を考慮すれば、實際輸入量は平時の一箇年分をやや超える程度であらう。從つて年平均は平時の四分の一と考へ得る。尤もその大部分は封鎖の强化されるまでの初めの二箇年間行はれたものである。

1　中立國との貿易

スカンディナビア諸國との貿易に於いては、ドイツは專ら石炭を供給して肉、魚、家畜、バター、チーズ等の食料品及び鐵鑛を輸入した。スウィスに對する石炭供給もドイツが引受け、これが代償として家畜、乳酪製品、絹及び木綿製品等を輸入した。

2　同盟國との貿易

ブルガリア及びトルコは棉花、羊毛、生糸、油、煙草及び金屬類を供給したが、固より杜絶した輸入量を補ふに足りなかつた。オーストリアはドイツにとつて出超國であり、概してドイツに對して寄與すること少く、寧ろ戰時中に貿易勘定に於いて大約四〇億金マルクの負債を蒙らした。

（五）食糧問題

戰爭前ドイツの食糧自給率は約八〇%であつたが、開戰後勞力及び資材の不足、更に封鎖に基く輸入の減少とによつて、國民給養の問題は著しい困難に逢着した。五箇年間を通じて四大穀物生産の總減少高は平均二三%、實數によれば約四〇〇萬噸に達した。このほか平時敵國からの輸入に仰いでゐた小麥二〇〇萬噸、飼料六〇〇萬噸、各種肉類六億マルクの供給が杜絶したのである。

初期に於いては、戰前からの貯藏品利用、中立國からの輸入、牛豚の大量屠殺によつて食糧困難は表面化しなかつたが、二五七六年以降俄然惡化してつひに國民の戰意を喪失せしめ、兵士の鬪志を弱化せしめた。トーマスは

「戰爭は二五七六―七七年、謂はゆる蕪菁のみの冬を迎へねばならなかつた時、既に我が國の敗北であつたと言ふことが出來る」と述べてゐる。その實情について若干例示する。

（イ）食料供給狀況

1　二五七七年既に國民の大部分の一般的健康狀態は繼續的榮養不良の結果非常に惡化し、能率低下、病氣に對する感染力の增大及び死亡率の增加が明白であつた。二五七八年には大部分の國民は慢性的飢餓狀態の下に生活してゐた。

2　當時の一般國民に對する食糧割當を、戰前一人當り推定消費量と比較すれば次の如き比率となる（戰前消費＝一〇〇とす）。

第九表　食糧割當量の戰前消費量に對する比率

| | 二五七六―七七年 | 二五七八年下半期 |
|---|---|---|
| 小麥粉パン | 五二 | 四八 |
| 肉及肉製品 | 三一 | 一二 |
| 魚 | 五〇 | 五 |
| 卵 | 一八 | 一三 |
| ラード | 一四 | 七 |
| バター | 二二 | 二八 |
| チーズ | 二 | 一五 |

| | | |
|---|---|---|
| 米 | 四 | |
| 豆類 | 一四 | |
| 植物油 | 三九 | |

卽ち主要食料品が戰前の半分以下、主要副食物は同じく一〇%前後である。

3　兵士に對する給與は原則として以前より多量に定められてゐたが、それでもなほ輸送上、その他の困難のために前線に於いては極めて惡化した。二五七八年ルーデンドルフの三月攻勢に於いて、アミアンへ向けて押し寄せたドイツ軍は、「充滿したイギリス軍倉庫の誘惑に打ち克ち得ず、前進を停止して作戰上の機會を逸した。しかも敵軍食糧の豐富さは、潛水艦戰の結果について慰安的嘘僞に欺かれてゐたことを知らしめ、士氣頓に沈滯した。」

4　ルーデンドルフの五月攻勢に於いても、ヴェスル河南に怒濤の如く進擊したドイツ軍は、シアンパーニュ葡萄酒の穴藏の魅力に打ち克つことが出來ず、泥醉した兵士は進軍を停止し、ベタンに反擊の餘裕を與へた。

卽ち二五七八年のドイツは敵の劍に敗れたのではなく、飢餓に敗れたものと謂ふべく、また共產主義の宣傳に戰力を失つたのではなく、過勞のために戰力が盡きたものと謂ふべきであらう。

（ロ）給與狀態惡化の根本原因

食糧問題解決の失敗を導いた根本原因は長期總力戰に於ける食糧需給の性格を本質的に認識し得なかつたことに存する。元來、食糧については平時自給率一〇〇%の國民にしても安心し難いのである。蓋し戰時に於いて一國の食糧生產は概ね二〇%の減退を示す一方、その需要は約二〇%を增加するからである。從つて平時一五〇%の自給率を有する時始めて戰時食糧に不安なしと云ひ得るのである。しかるに戰爭前ドイツの自給率は八〇%程度に過ぎず、しかも食糧問題については全く樂觀し、なんらの戰爭對策も講ぜられてゐなかつたのである。

1　食糧問題に對する見透の誤謬

二五七四年末、ドイツ食糧學者一六名の發表せる覺書は、ドイツの食糧所要量を八五萬九〇〇〇億カロリー、同じく家畜の必要飼料量一八四萬億カロリー、合計二六九萬九〇〇〇億カロリーと計算し、輸入に依存する部分はその約一割强、卽ち二八萬一〇〇〇億カロリーであると發表した。しかもドイツは權威者の手による右の調査研究に對して信賴した結果、家畜の飼料となるカロリーを節約して人間に廻せば、容易に戰時食糧問題は解決され得るとの樂觀が支配的となつた。

かかる結論は全く誤であつた。卽ち

(1)　戰時の需要增と供給減を考慮に入れてゐない。

(2)　家畜の減少となり、從つて國內に於ける肉類供給の減少を齎らした。

(3)　カロリーによる公式計算は實狀には適合しない。國民の要求するものはパン、馬鈴薯、卵、野菜等であつて、一種の含むカロリーは他のものに代置し得ない。

2　飼料不足に基く肉類供給の減少、二五七五年に入つて飼料不足に對應するために家畜、殊に豚の大屠殺が行はれ、一時的には食糧不足を補つたが、その後の肉類供給は激減した。

3　農業勞働力の不足

開戰當時總人口六六〇〇萬人中、農業に從事するものは一〇〇〇萬人に過ぎず、その內五四〇萬人は男子であつた。男子農業勞働者中一六—五〇才の者は三四〇萬人であつたが、二〇〇萬人が動員されたために、戰爭期の農業は僅かに一四〇萬人の成年男子と能率の低い女子、捕虜、外國勞働者の手によつて主として行はれなければならなかつたのである。

4　集荷、配給機構の不整備

當初その消費統制は極めて緩慢にしか行はれなかつたし、後に至つても配給、集荷機構の不整備は多くの闇行爲を惹起し、價格政策の拙劣は農民の增產意欲を減殺した。

備考

ナチス・ドイツの對策

ナチス・ドイツはこれに鑑みて、切符制の早期且つ廣汎な採用を行ひ、配給機構を整備し、闇行爲を嚴罰し、國民の徹底的協力を求めた。その結果國民に對する食糧供給は、現在なほ二五七七年當時よりは良好であるが、當時と異つて殆んど全歐洲の食糧についての責任を負擔しなければならないのみでなく、食糧供給の根本條件に於いて大なる改善を見てゐない以上、今後この點に於ける困難はますます激化するであらうと思はれる。

## (六)　交　通

ドイツ工業の中心地が比較的戰線に近かつたことは軍需資材の輸送上大いに有利であつた。しかし鐵鋼資材不足によつて維持更新が全く拋擲された結果、二五七六年以降鐵道は極めて危險な損耗兆候を示し、機械は舊套化して能率低下し、從來より多量の人力と石炭とを要求するに至つた。

戰時を通じて鐵道用品の平均供給高は平時供給高の二分の一乃至三分の一に止まつた。自動車の利用もまた石油及び護謨の不足によつて大いに制限された。

備考

ロイド・ジョージの回想錄によれば、二五七八年三月ドイツ軍は何故聯合國側の後退に乘じて、戰果をアミアン占領にまで擴張させなかつたかと言ふ彼の質問に對し、スチンネスは「それは護謨の不足の結果たる輸送杜絶のためであつた。激しい吹雪の中でタイヤを持たない車輛には雪塊が粘着し、その結果軍隊の必要とする彈藥や砲彈は勿論、糧食の補給さへも不可能であつた」と答へてゐる。

## (七)　勞　務

開戰當初の一時的失業は二五七五年初頃既に解消され、同年夏以降勞力不足漸く甚しくなつた。女子、未丁年者、老人、捕虜、囚人、占領地住民等が可能な限り利用されたにも拘らず、二五七六年末に於ける勞働者總數は、戰爭前に比して四〇〇萬人の減少を示してゐる。特に鑛工業に於ける減少は甚しく、にすぎなかつた。

(イ)　女子勞働者の採用

最も多く利用された補給源は女子勞働者で、戰時中一〇〇萬人以上を增加し、その全勞働者に對する比率は、戰前の一三・七%から二五七八年三月には二六・三%へと殆ど倍加してゐる。

かかる未熟練勞働者の一般的採用と、榮養不足、設備機械の磨損、代用資源の不足等の結果、二五七七—七八年主要產業勞働者一人當平均生產額は、長時間勞働及び增產奬勵策にも拘らず三〇—四〇%減少した。

（ロ）全勞働力の國家管理

二五七六年末ヒンデンブルク綱領に伴つて實施された祖國奉仕勞務法は、一七—六〇才男子の使役權を國家の手に收め、健康者のすべてを軍隊または勞働に動員し、また必要に應じ重要產業に對する勞働者の强制移動を行つた。

（ハ）勞賃の上昇（兵士への給與との均衡に苦慮）

平均勞賃は日額に於いて二五七四年第三期の六・〇八マルクから、二五七八年第一期の一二・一六マルクへ上昇した。物價騰貴を考へれば、實質的には大なる改善はないと思はれるが、前線からの賜暇兵はこれに對して頗る不滿と不公平の感を與へられた。國內勞働者と戰線兵士との給與の均衡は、歐洲各國の共に苦慮した處である。

（ニ）戰爭長期化と罷業の激增

勞資休戰は戰爭長期化と共に破られ、罷業は激增した。

第一〇表　勞働爭議統計

| | 罷業件數 | 參加者數 | 失はれた勞働日數 |
|---|---|---|---|
| 二五七五年 | 一三七件 | 一一、六〇〇人 | 四一、八〇〇日 |
| 二五七六年 | 二四〇件 | 一二四、二〇〇人 | 二四五、四〇〇日 |
| 二五七七年 | 五六一件 | 六五〇、六五〇人 | 一、八六〇、〇〇〇日 |
| 二五七八年 | 七七二件 | 一、三〇四、二〇〇人 | 五、二一八、〇〇〇日 |

戰爭の後半期には國內經濟事情の一般的惡化に伴つて勞働者の動搖は激しかつたが、爲政者はこれに對して專ら武斷的壓迫を加ふるに止まつた。二五七七年ロシヤ革命の頃には食糧の缺乏甚しく、加ふるにアメリカの參戰によつて沮喪し、二五七八年一月ベルリンに大罷業が行はれ、五〇萬人がこれに參加した。非併合平和の促進、ドイツ內政の社會主義化、祖國奉仕勞務法の廢止を目的としたものである。これは全國に波及し、一〇〇萬人の罷業者を出した。政府はベルリンに戒嚴令を布き、辛うじて彈壓し得たが、軍需品生產を遲滯せしめ、ルーデンドルフ攻勢を延期するの已むなきに至り、政府の威望は既に衰へたことを徒らに示すにすぎなかつたのである。

# 二　イギリス側

## 第一節　對敵方策とその遂行

### 第一項　概　括

(一)　歐洲戰爭の長期化した時期を何處に求むべきかは困難にして且つ種種な見解を有する問題である。ここでは戰爭の勃發せる二五七四年九月ドイツ軍のマルヌ會戰退却後、エーヌ河の線に聯合軍と對峙するに到つた頃をその時と定める。蓋しナポレオン時代以來陸軍國として歐洲に盛名あつたフランスとカイザーに率ゐられた多士濟濟の名將を輩出した新銳ドイツ軍とが、エーヌの線に沿つて相對軍した以上は少くとも西部戰線に關する限り簡單な短期戰で終り得る道理が無いのである。ここに於いても激烈な戰鬪の後漸く獲得した寸土がまた忽ちにして敵に奪取されてゐるのである。

(二)　陣地線に入つてからのドイツ軍は謂はば巨大な要塞と見るべく、これに對してイギリス、フランス等の聯合軍はドイツ軍を包圍し、消耗戰及び飢餓戰に導く對策を採つたと言ひ得る。二五七五年春、ドイツ軍とイギリス、フランス聯合軍相互間の戰鬪が膠着狀態に陷つた時、兩軍の力量は殆んど相伯仲し、武力のみによる戰局の顯著な變化は不可能であるの感を強くせしめるのである。

(三)　かくてイギリスは上下一致、戰爭繼續の決意をいよいよ鞏固にして長期戰的態勢の準備をなし、その豐富な人的物的資源の有效な活用に全力を傾注したのである。即ち聯合國はその優勢を發揮して各方面に攻擊を繰り返し、敵をして疲勞困憊、消耗の極に至らしめてこれを屈服せしめんとしたのである。

(四)　イギリスは植民帝國と言はれる如く、廣大な領土を有し、平時はこれに依存し、世界の經濟的覇權を掌握してゐたが、戰時に於いてこれら植民地が本國に對して如何なる態度を採るかが、イギリスとしてはより重大な問題であつた。しかるにこれら植民地の中、その向背を最も憂慮されてゐたインドすらほか、カナダ、オーストラリアの如きは本家に對する分家的態度で臨み、イギリス本國と運命を共にする覺悟でゐたのである。一面これは、植民地としてはこの機會を利用して、從來自己の主張してきた地位の向上、權利の承認等を戰後に於いて獲得せんとの下心も含まれてゐるが、他面植民地のイギリス帝國的自覺が危機に際して結束を促したとも見られる。

(五)　イギリス國民をかくの如き團結に導き得たのは、イギリス政府の卓越せる政治力とその手腕によるところ大である。遲しい政治的意志を以て國民生活の戰時化を斷行し、自由を尚ぶイギリス人をしてよく法規命令に從はしめ、生產力擴充に着眼し、勞働力の軍需品製造重點化を中心とせる勞働者對策の

如きは、決して彼らの愛國心のみに依存して行はれたものではなく、これを組織し、指導すべき爲政者の施策宜しきを得た結果にほかならぬのである。

(六) 世界に誇る海軍力を持つイギリスは、フランスの大陸に於ける陸軍力と對照的に海上に大きな役割を果した。それは對ドイツ封鎖である。食糧に乏しくギリスによる封鎖は非常な苦痛であつた。その結果ドイツ側は已むなく、自暴自棄的な無制限潜水艦戰を行ふに至らしめ、つひにアメリカの參戰を誘導せしめた事實はイギリス政略の遠謀深慮の程を窺知させるものである。

(七) 西部戰線の澁滯狀態四箇年を閲し、戰爭も終局に近づくと流石のイギリス國民も漸く戰に倦み、疲弊の色濃厚となつてきた。

しかし當局者は常に最後の勝利を呼號し、內は國民を激勵鼓舞し、外は聯合諸國との協調を固くしてドイツの屈服を待つたのである。ここに至つて双方何れか媾和の已むなきに至り、戰爭の勝敗はただ交戰國民の耐久力の問題となつたのである。

## 第二項　諸施策の個別的檢討

### 一　敵國土の占領

陸戰の主戰場である西部戰線は、開戰當初に於けるドイツ軍の快速進擊の結果、休戰に至るまで主としてフランス國土に展開せられ、イギリス軍によるドイツ國土の占領は事實上見られなかつた。イギリス軍の占領せる敵國土にはバルカン、西亞、阿洲等がある。これら三方面に於けるイギリス軍の行動は概ね左の如くである。

(一) バルカン方面

(イ) ギリシア、セルビア方面

ギリシアはヴェニゼロスの首相たる時、聯合國軍のサロニカ上陸を約したが、國王の反對によりヴェニゼロス拂冠して新內閣成立し、强硬外交を堅持するかに見えたが、その態度曖昧を極めたので、セルビア救援を名目として、二五七五年一〇月三日、サロニカにイギリス軍五〇〇〇人、フランス軍一萬五〇〇〇人が上陸してゐる。ブルガリア參戰のためセルビア危急に瀕するや、イギリス、フランス聯合軍北上したが敗退して、サロニカに退いてゐる。聯合、ブルガリア兩軍對峙中も聯合軍は兵力增强に努め、先にコルフ島に逃れたセルビア軍と合して二五七六年五月には總兵力四〇萬を算してゐる。八月にはブルガリア軍の攻擊を退け、九月より聯合軍は攻擊を開始し、モナスチールを奪還してゐる。その後トルコとドイツ、オーストリアとの連絡を切斷せんとする作戰も、天候その他の影響で遂行されず、二五七七年九月一五日聯合軍攻擊を開始し、イギリス軍はギリシア、セルビア國境方面を擔當、二六日國境を突破し、ストルムニッツア要塞を陷れ、首都ソフィアに通ずる道を開いた。」

次にダーダネルス作戰を見る。二五七五年三月一八日ダーダネルス海峽突破を試みたが、トルコの防備嚴重で失敗した。イギリス、フランス聯合軍はエヂプトで準備完了後、强力なる艦隊の掩護下に四月二五日上陸を開始した。フランス軍は失敗したが、イギリス軍はガリポリ半島南端のセド・エル・バール、アリバーヌの上陸に成功した。イギリス軍はガリポリ半島上陸地點より逐次北方に占領地を擴張できれば、トルコ軍を半島北方に退却せしめ、海峽通過自由となる確信があつたので、イギリス軍の攻撃は熾烈を極め、クリチア要塞の如きは四回も攻撃してゐる。しかし攻撃は作戰通り進捗せず、漸く八月六日に一部の成功を得たに過ぎない。

（ハ）その他アンザック、スヴラ方面の戰鬪も激烈であつたが、援軍不充分のため二一日に到り攻撃は全線に亘つて失敗し、爾後兵員補充、彈藥軍需品の補給のため對峙してゐたが、セルビア救援のためサロニカに轉進することとなり、二五七六年一月を以て聯合軍は完全にガリポリ半島を撤收した。

（二）西亞方面

（イ）トルコを經てイラン（ペルシア）灣に進出するドイツはインドに甚大な脅威を與へたので、イギリスはイラク（メソポタミア）作戰を開始し、二五七五年九月末クト・エル・アマラを占領した。熱帶瘴癘の地であつたので飛行機、自動車の利用價値が大であつた。一一月下旬クテシフォンを占領したがトルコ軍の反擊に遇ひ、已むなくクト・エル・アマラに退却した。翌二五七六年一月上旬トルコ軍六箇師團の包圍を受け、イギリス、ロシヤ兩軍これを救援せんとしたが、前進不能のためつひに四月二八日降伏した。その後イギリス軍は專ら兵站勤務兵力補充を行ひ、二五七七年に入り三月一一日バグダードを拔いた。これはドイツの東漸政策の挫折、トルコの策源地の失墜を意味し、聯合國には大なる快報であつた。翌二五七八年二月二〇日エウフラテス河畔ラマディ、ヒット、カンバグダディと相次いで陷落し、一〇月末にはキフリー、キルクーク、アルタンキュプリー等落城し、トルコ軍の側背に迫つた。一〇月三一日モスールに肉迫して休戰となつた。

（ロ）ドイツ東漸政策挫折を圖るイラク作戰と捺を一にするものにパレスティナ作戰がある。二五七六年八月上旬カフカス（コーカサス）戰況鎭靜するや、トルコ軍はシナイ半島にあつたエル・カチアのイギリス軍を攻擊したが失敗してゐる。この後イギリス軍はエル・アリシュとナクールの線に布陣し、沙漠作戰の準備に萬全を期した後東方に進軍、二五七七年一二月イェルサレムを占領した。

（ハ）イギリスがドイツの東漸政策を頓挫せしめるには、バグダード、イスタンブル間にある鐵道要衝アレッポを占領するの要あり、ヨルダン河谷右翼牽制中に左翼イェルサレム正面に主力を注ぎ、二五七八年一〇月一日ダマスクスを占領し、更に一〇月二六日アレッポを占領した。かくてバグダード鐵道は中斷され、カフカス、イラン方面のトルコ軍にも影響を與へ、同國をして降伏に至らしむる重大原因となつたのである。

（三）阿洲方面

南阿聯邦に起つたボーア人の暴徒がドイツ領西南阿に逃れたるを追ひ、二五七五年七月この地を占領

した。ドイツの阿洲横斷政策の西端に當るカメルンは二五七六年初頭占領され、ドイツ領東阿もイギリス、ベルギーに進攻せられ、同年九月聯合軍の下に屈した。

## 二　對敵外交戰

### (一)　バルカン政策

#### (イ)　概　括

1　バルカンを繞るイギリス、ドイツ兩國政策の衝突

ベルリン、バグダード間を結ばうとするドイツと、インドとの連絡を確保し、バルカンに自己勢力を扶植し置く要あるイギリスとの間には、戰爭開始以前よりバルカン方面を繞り盛んに外交戰が演ぜられてゐた。

2　トルコ、ブルガリアの登場

開戰直後ドイツ、オーストリア側に立つたトルコは、バルカン諸小國とは歷史的關係より相容れず、從つてトルコ參戰後のバルカン情勢は聯合國にとり有利なものと思はれた。しかるに第二次バルカン戰役に破れて機會を待つてゐたブルガリアのみは、バルカンに於いてドイツ、オーストリア側に立つ可能性の最も強い國であつた。從つてドイツのブルガリアに對する策動烈しく、これに對しイギリスもまた舊バルカン同盟の復活を中心に活躍した。

3　ギリシア、ルーマニアの歸趨

ギリシアが聯合國側に立つに至るまでの經緯は、バルカン問題の縺絲に等しく複雜を極めたが、結局政府の二分によつて解決されてゐる。

ルーマニアの歸趨もイギリス、ドイツの關心事にして、兩國の策謀熾烈を極めたが、イギリスのロシヤ利用により聯合側引寄に成功してゐる。

#### (ロ)　ブルガリア

1　ドイツはブルガリアに極力好意を示さんとし、オーストリア、ハンガリアの俘虜となれるセルビア軍中特にブルガリア人を釋放したり、二五七四年末ゴルツ將軍を派遣して親交を圖るとか、翌二五七五年初頭多額の借款に應ずるなどの手を打つた。二五七五年七月、ランゲンブルグ公のブルガリア訪問あり、トルコ領アリッツア河以西地方及びセルビア、ギリシア領のマケドニア割讓密約を結び、同年八月にはドイツ、トルコ、ブルガリア三國間に土地割讓條約が締結され、四月にはブルガリア軍のセルビア領侵入事件等あり、兩國の關係は惡化したが、これにはドイツ、オーストリア兩國の策謀も內藏されてゐる。

2　ドイツ、オーストリアにとつてブルガリアを得ることがトルコ援助を可能ならしめるのに對し、イギリス、フランス側にブルガリアを抱き込むことは、イスタンブルを陷してロシヤとの協力を實現する喫緊事であつた。ブルガリアがかねて獲得せんとしてゐた土地を、セルビア、ギリシアの犧牲に於いて與へんとするのがイギリスの方策であつた。時の海相チャーチルは、ブルガリア通として知られたノエル・バ

ックストンを派遣して策動せしめ、相當の効果を擧げたのであるが、グレー外相はその獻策を容れず、またブルガリア駐劄イギリス公使とバックストンとは意見合はず、結局失敗に終つた。次いでバジエット將軍を派したが、表裏常ならぬブルガリア國王に籠絡されるのみであつた。この間トルコ、ブルガリア條約の成立により、トルコより領土的利權を得たブルガリアの態度は鞏固且つ決定的で、イギリスの策動を以てしても如何ともしがたく、つひに一〇月一五日イギリスの對ブルガリア宣戰布告となつた。

3　イギリス、ドイツ兩國の對ブルガリア交涉はいづれも利害を以て臨んだが、結局ドイツの勝利に歸した。蓋しブルガリア首腦は、戰爭終局の勝利はドイツ、オーストリア側にありと確信してゐたので、イギリスが戰後の領土分割保障を約しても皮算用と目して效果なく、更に當時の東西戰線に於ける聯合國側の戰況不利、ロシヤ軍のワルソー撤退の如き凶報は、ブルガリアを確定的に對岸に押しやつた。

（ハ）ギリシア

1　もとギリシア國內は、ドイツ皇帝の義弟に當る國王コンスタンティンを頭首とするドイツ、オーストリア派と、首相ヴェニゼロスを中心とする聯合國派とに分れてゐた。二五七四年九月二一日ヴェニゼロスはイギリス、フランス公使に對し、セルビア侵入がされた時は、ギリシアは蹶起すべきを內約するなど、一般に親聯合國的であつたが、國王との衝突から辭職し、その後ドイツ、オーストリアに接近して行つた。

2　二五七五年八月ヴェニゼロス再び首相となるや、一〇月イギリス、フランスとの間に一五萬の聯合軍のサロニカ上陸を承認し、議會も參戰を議決したが、再び國王の反對に依り、ヴェニゼロス內閣總辭職してザイミスこれに代り、武裝中立を宣言した。聯合國側はトルコ領サイプラス島割讓を餌に三〇萬のサロニカ上陸を提議したが、政府は斷乎參戰を拒否したので、議會よりその僭權を責められ、國民の不信を買つて一一月四日ザイミス挂冠し、後任に親ドイツ派のスクルーヂスが起用され、嚴正中立を中外に闡明したので、サロニカ駐屯の聯合軍は苦境に陷つた。よつて二五七六年六月三日イギリス、フランス軍はサロニカの完全占領を斷行し、ギリシア海岸を封鎖したためスクルーヂス辭職し、ザイミス代るやドイツ、ブルガリア南下しセラスでギリシア軍と衝突した。

3　ここに於いて親聯合國派は參戰を主張したがまたも國王の反對に逢着したので、八月三〇日サロニカに假政府を樹立した。ギリシアはここに截然とアテネ政府とサロニカ政府に二分された。二五七七年一月九日、聯合國はアテネ政府に最後通牒を發してその決意を促したため、つひにその彈壓に屈し、同年六月一七日國王は退位しスウィスに赴いた。六月二八日ギリシア王（攝政）アレクサンデは同盟國に宣戰してゐる。

4　かくて聯合國はギリシアを屈服せしめたが、この間極端なる手段を採つて內政に干涉し、中立侵犯等の壓迫を加へた奸才、恫喝の結果にして、口にドイツのベルギー中立侵犯を非難し、小國擁護を立看板として來たイギリス對外彌縫策の僞はらざる露出面である。

（ニ）ルーマニア

1　ルーマニアはドイツに對して、王室及び經濟關係よりドイツ、オーストリア側と親密であつたが、

民族問題のため結局聯合國側に立つた。即ちハンガリアのトランシルバニア、バナット、マラマロス地方には三〇〇萬人、オーストリアのブコヴィナ地方には二七萬人のルーマニア人が居住し、これを統一せんとする統合運動の勃發とともに、オーストリア、ハンガリアとの衝突は不可避となつた。

2　ドイツはオーストリア、ハンガリアの犧牲により、ルーマニアの領土要求を滿足せしめんと努力したが、ドイツ、聯合兩軍の東西戰線に於ける膠着狀態に基因し、開戰後二年餘去就に迷ひ中立を守つてゐた。この間イギリスは執拗な外交交渉、壓迫によりつひにルーマニアを聯合國側に立たしめた。

3　もともと領土問題についてはロシヤとの關係も密接であつたので、これに着眼したイギリスは極力ロシヤ、ルーマニア間の斡旋に勞を惜しまず、借款を供與し、特使を派遣する等國王、當局者を說得し、また一方に於いて輸出禁止せる穀物を買占めて農民の不平を除去するなどの方策をとつた。かくてルーマニアはブラチアノ首相の親聯合國的色彩に拍車をかけ、日毎に聯合國側に接近して行つたが、二五七六年八月締結された祕密條約により、領土問題の保障と軍需品の供與を約されるに及んで、同月二七日つひに聯合國側に立つて參戰した。

(二)　アメリカに對する政策

(イ)　アメリカの軍需品輸出を續るイギリスの海上封鎖とドイツの立場

アメリカは開戰直後中立を宣言し、交戰國の軍需品供給源として經濟的發展著しきものがあつた。海軍力の優れたイギリスはアメリカよりの購入物資をほぼ安全に本國まで輸送出來たが、封鎖されたドイツにはそれが不可能であつたため、アメリカに對し戰時禁制品の全面的輸出禁止を要求したが、アメリカはこれに對し、交戰國の海軍力を平均化せんがために、中立國は貿易の妨害を受ける理由なしと返答してその要求を拒んだ。かくてドイツは謀略宣傳に力を注ぎ、アメリカ工業力の直接破壞を企てた。これはアメリカ、ドイツ間を離間せしめる大きな原因となつた。しかし最も決定的な原因は海上輸送問題であつた。

(ロ)　ドイツ潛水艦のアメリカ船舶擊沈

イギリスの封鎖に對抗して、ドイツは潛水艦によるアメリカ船の擊沈せられるものも少くなかつた。特に二五七五年五月七日のルシタニア號擊沈に依り、アメリカ人の死者一〇〇〇餘名を出すに及んでアメリカ、ドイツ關係は頓に緊張した。

(ハ)　ドイツ潛水艦作戰とイギリス

イギリスは開戰當初よりしばしば中立國向けのアメリカ船を臨檢拿捕してアメリカの抗議を受けたのであるが、その都度積載物資が中立國を經て敵側に渡ることを理由として辯護して來た。しかしアメリカ、イギリス間には抗議と反駁が繰返されてゐるとは言へ、その根底には同一民族としての理解は否めなかつた。ドイツが二五七五年二月一八日對イギリス潛水艦無警告擊沈開始の聲明發表以來、イギリス船舶擊沈漸く活潑となるや、イギリス船は星條旗を揭揚して難を免れんとしたこともあつた。これに對するアメリカの抗議の如きも極めて微溫的で、イギリスはこの不法行爲の責任を却つてドイツ潛水艦作

戰に轉嫁せしめた程である。

(ニ) ドイツの無制限潛水艦戰の宣言とアメリカの參戰

イギリスの對ドイツ封鎖いよいよ嚴しく、これを放置せばドイツ國內の物資缺乏著しく、つひには國內戰線の維持困難となるを憂へ、二五七七年一月三一日ドイツは無制限潛水艦戰を宣言した。この宣言は今までドイツ海軍による不法擊沈に憤激してゐたアメリカ輿論を極度に刺戟し、つひに二月三日アメリカ、ドイツの國交斷絕し、四月六日宣戰布告となつた。

(ホ) アメリカ參戰の原因

アメリカ參戰の原因として一見ドイツの無制限潛水艦戰の宣言が指摘され易いが、それは皮相的觀點に立脚したと言ふべく、寧ろ眞の原因はイギリスの對ドイツ海上封鎖の强化に見出さねばならない。

(ヘ) 中南米諸國の態度

中南米諸國の態度はアメリカに準じ、アメリカの參戰後殆どドイツに對して宣戰をなした。

ただアルゼンチンのみは、ドイツ海軍によりしばしば商船の被害を蒙つたうへ、ドイツ官憲の陰謀の手が延びたこともあつたので大いに憤激し、議會は一時國交斷絕を決議してゐるが實行に至らず、中立を堅持した。チリー、メキシコも中立に終始した。

(三) 歐洲諸小國への對策

(イ) ポルトガル

ポルトガルは久しくイギリスと同盟關係にあつたので、開戰直後聯合國援助を聲明し、イギリスとの經濟關係の强化を圖つてゐる。また阿洲に於いてはイギリスと協力して植民地戰爭に參劃し、本國の參戰も時間の問題とされてゐたが、國內紛亂のため遲延し、二五七六年三月九日に至り漸く公式に聯合國側に立ち參戰した。

(ロ) スウィス

聯合國と同盟國の間にあつて中立を維持せしも極めて困難なる立場にあつたのはスウィスである。自給自足不可能なスウィスは、兩交戰國より物資を輸入してゐたが、交戰國は自國の對スウィス輸出品がスウィス國內に於いてのみ消費せられ、敵側に再輸出されざることを要求しながら、他方敵側の對スウィス輸出品は自國が購入せんとして壓迫を加へたためスウィスは極めて苦境に陷つた。しかしながら終始交戰國間の宥和に努め、よく中立を維持した外交は稱讚に値する。

(ハ) ノルウェー、デンマーク、オランダ

ノルウェー、デンマーク、オランダの諸國は概して親イギリス的であつたが、一方に偏すると國家を危殆に瀕せしめるので中立堅持に專念した。

(ニ) スウェーデン、イスパニア

スウェーデンはかねて親ドイツ的傾向强く、海上輸送及び外交上の問題でドイツに有利な行動をとらしめること多く、しばしば聯合國はこれに抗議を申込み、中立を維持せしむべく努力した。イスパニア

では聯合國側とドイツ側と國内二派に分れて爭つたが、結局中立に終始した。

（四）ドイツの和平交渉に對する聯合國側の態度

（イ）概　括

開戰後一聯の戰況は概してドイツ、オーストリア側に有利であつたが、イギリスより封鎖を受けて謂はば籠城戰に入つた國内戰線の維持は必ずしも容易ではなかつた。かくてドイツは、或はアメリカを介し、或はローマ法王を通じ、或は直接交渉によつて聯合各國との和平交渉を行つたが、いづれも失敗に歸してゐる。

（ロ）第一回媾和提議

二五七六年一二月一二日ドイツは中立國を通じて媾和提議をなし、アメリカ大統領ウイルソンも斡旋に努めたが、提案が媾和談判の開始のみを要請し、媾和條件の内容に觸れてゐなかつたので、誠意なきものとして拒否された。聯合國側ではこの提案を以て、ドイツが豫てより計畫せる無制限潛水艦戰を開始し、戰爭責任をイギリス、フランス等に轉嫁する口實を見出すための戰略的企圖より出でたものと酷評して、却つてその團結を鞏固にしてゐる。

（ハ）第二回和平交渉

その後オーストリア、ハンガリアとフランスとの間に和平交渉があつたがこれも失敗に終つてゐる。

（ニ）第三回媾和懇願

二五七七年八月一日、ローマ法王ベネディクスは交戰各國に對し、國際關係の道德的基調、軍備縮小、國際裁判等數箇條に亘る媾和懇願の提案をなしたが、その内容が聯合國の滿足するところとならず失敗してゐる。アメリカはこの時も、反對理由の聲明に際してドイツ專制政府の非難に努め、聯合國民のドイツに對する憎惡、不信の念を强からしめ、以て民心の統一を期してゐる。

（ホ）第四回媾和希望

二五七七年末ドイツ、オーストリア代表者レベルテラがスウィスに居つたフランス軍人アルマンに媾和會議開始の希望を述べたが成立に至つてゐない。

（ヘ）第五回媾和申入

二五七八年五月にはオランダ陸相コリンスがロンドンに至り、ドイツ、オーストリア側の媾和希望條件を提示したが、これもドイツ、オーストリアに好都合な一方的なものとして一蹴された。

三　制空權、制海權の掌握

（一）制空權の掌握

（イ）航空機の戰力化

1　飛　行　船

ドイツのツェッペリン伯が二五二三年アメリカ南北戰爭時代、セントポールに於いて氣球便乘から着

想した飛行船は、建造當時の二五六八年には漸く二二・四粁の航續能力しか有しなかつたが、その後ドイツの眞劍な研究の結果大いに進歩し、本戰爭勃發當初いまだ飛行機の戰力化の不充分を狙ひ、その大なる搭載力を利用して重要都市、軍事施設の上空に潛入し、破壞の目的を達してゐる。

2. 飛　行　機

二五六三年アメリカのライト兄弟の發明による一六馬力、航續力八五〇呎の複葉飛行機は、僅か一〇年後の本戰爭に於いては實用はもとより兵器として戰力化され、戰局上相當活潑な活動をなしてゐる。

爆撃機の開戰當初二五七四年と四年後の二五七七年との性能を比較するに、左表の如き顯著な進歩が見られる。

| 區別 | 二五七四年 | 二五七七年 |
|---|---|---|
| 機關 | 一五馬力 | 三〇〇馬力 |
| 速力 | 一〇〇粁毎時 | 自一七〇至一九〇粁毎時 |
| 航續時間 | 四時間 | 五時間 |
| 搭載爆彈量 | 一〇〇瓲 | 二三五瓲 |
| 上昇力 | 二〇〇〇米三五分 | 二〇〇〇米九分 |

爆撃機のほか戰鬪機、偵察機についてもほぼ同樣のことが言へる。」

(ロ) 航　空　戰

1　飛行船による戰鬪

飛行船による戰鬪は、ドイツの飛行船技術の一方的發達のため行はれず、飛行船による空襲が施行された。

二五七四年一二月下旬イギリス本土は、ドイツ飛行船ツェッペリン號によつて三回に亘つて空襲され、その中一回はテームズ河上流に現れてゐる。翌二五七五年には毎月殆んど缺かさずに來襲し、五月三一日にはつひに首都ロンドン上空に出現し、死者六名のほか相當災害を被つた。同年更に九月に二回、一〇月に一回の空襲あり、被害も少くなかつた。ドイツ飛行船の空襲を體驗したイギリスは、航空機に對する深い關心を喚起し、防禦施設を整備し、空軍の陸、海軍からの獨立を計る等航空機對策に盡力することとなつた。

2　飛行機による戰鬪

イギリスはドイツに比し、歐洲戰爭を通じ、航空機の進歩、航空機による敵本土空襲、いづれに關しても受動的であつたと言へる。

ドイツ飛行船の空襲頻頻となるに及んで、二五七五年春以來被害の甚大であつた東部海岸や河口の主要都市には對空火砲を配置し、燈火管制、空襲時の交通管制、寺院の鐘、大時計の音響管制等、防衛に關する種種の對策が急速に講ぜられた。

二五七五年九月にはスコット大將がロンドン防衛司令官に任ぜられ、翌二五七六年初頭の議會では空軍省設置案が提議されたのに對して、政府は左の如き對策を講ずべき用意があることを約してゐる。

(1) 二五六七年二月以降、ロンドン對空防衛の任務は、これを海軍から陸軍に移管すること。
(2) 對空防衛は陸上、海上の區別により陸軍、海軍の責任分擔を明確にすること。
(3) 防衛及び空襲による被害復舊資材調整のため、陸海軍に常設委員會を設置すること。
(4) 燈火管制の國內統一を圖ること。
(5) 危險都市への警告を發すること。
(6) 地方防衛のため專任將校を任命すること。」
(7) 對空砲火の優先的製造をなすこと。
(8) 防衛要員、資材の强化を圖ること。

政府は議會の空軍省設置案に反對し、空軍は陸海軍に分屬すべきことを强調し、後に異れる目的で航空局を開設してゐる。更に陸軍航空司令官ヘンダースンを二五七五年五月成立の擧國一致內閣に入閣させ、またダービー伯を長官とする聯合航空委員會を設立して防衛對策に善處せしめる等、戰爭進展とともに航空政策に腐心してゐる。

(二) 制海權の掌握

(イ) 概括

1 ドイツの立場

强力なイギリス海軍は完全に制海權を掌握し、ドイツに對し封鎖を續けてゐたので、ドイツはこれに對し堂々の對戰をしても到底勝算なきため、主力艦隊をキール軍港に潛めおき、潛水艦、巡洋艦等によりイギリス艦隊を奇襲して直接海軍力に打擊を與へる一方、無制限潛水艦戰により通商破壞をなし、イギリスを逆に封鎖し、その疲弊困憊せるに乘じて一大決戰を求めんとした。

2 イギリスの立場

イギリスは敵の主力艦隊に直接挑戰したいところだが、キール軍港の完備せる施設や、ドイツ沿岸が遠淺であること等の惡條件のため出擊困難で、兩艦隊相對峙して戰爭當初には大海戰は演ぜられなかつた。

(ロ) ジュットランド海戰と制海權問題

しかるに戰爭の長期化の明瞭になつてきた二五七六年初頭より、イギリス、ドイツ兩海軍の動き漸く活潑となり、戰雲北海洋上を掩ふに到つた。ノルウェー海岸に現れたイギリス海軍と、これを擊滅せんとするドイツ海軍との間に開戰以來の激戰が展開せられたのは五月三一日のジュットランド海戰である。この戰鬪ではイギリスの損害は比較的に大きく、北海一部に於いてはイギリス海軍による制海權に穴孔を生じたところもあつたが、大勢は依然搖がず、ドイツにとつても些少の損害はあつたが主力に重大影響を及ぼす程のものではなかつた。

(ハ) アメリカ參戰によるイギリス制海權の强化

八月中旬のドッカーバンク、翌年一一月中旬のヘリゴランドの海戰等があつたが、イギリス海軍の王座不動にして、しかもアメリカ海軍がイギリスに協力し、いよいよその制海權を確保して行つた。

## 四　封鎖及び通商破壞

### （一）概　括

戰前七つの海に雄飛し富强を誇つたイギリスは、その存立の基礎を各領土との結合、海上權による通商確保に依存してゐたことは周知のことである。

開戰當初のドイツ海軍の作戰は主力を退避せしめ、小艦艇による各個擊破の後決戰を試みんとするにあつたが、その效果少く荏苒時を過すうちに、却つてイギリス海軍力の增强せるを見て、謂はばその通商破壞戰は自暴自棄的な無制限潛水艦戰となり、つひにはアメリカをして參戰せしむるの結果に至つたのである。その戰果は必ずしも過少評價すべきものではないが、封鎖戰で勝利を占めたのは、大局的見地よりすればイギリスなりと斷ぜざるを得ないのである。

### （二）戰域の擴張と中立國への關心

開戰後間もなくドイツは北海よりアメリカに到る航路に機雷を敷設したるにより、對抗手段としてイギリスは一一月三日、北海全域を戰域と宣言し、且つ北海に出入する船舶はイギリスにより航路指定を受くべきことを規定した。その後中立國船舶に對する干涉も漸く峻嚴になつたため、ドイツ國內の物資不足、特に食糧不足が著しくなつたので、二五七五年二月四日ドイツは報復としてイギリス周邊水域を悉く戰域となし、此所を航行する敵艦は勿論、中立國船舶と雖も自らの危險に於いて航行すべき旨を宣言、三月一日イギリスはこれに對し、更にドイツへの輸送品の取締を嚴重にした。これら一聯の方策をとるに當り、イギリス、ドイツ兩國はいづれも中立國に對する影響について愼重なる考慮を拂つてゐる。封鎖戰は中立國の利害と密接なる關係を有するからである。

### （三）アメリカの物資輸出

中立國中最も豐富なる物資を有し交戰各國に輸出してゐたアメリカは、イギリス、ドイツ双方に取つて極めて重要な取引先であると同時に、最も困難な相手でもあつた。イギリスの海軍力に到底匹敵し得ぬを知れるドイツは、しばしば戰時禁制品の輸出禁止をアメリカに要求したが、心中深くイギリスに同情を寄せたアメリカはこれを肯かず、大勢の赴くところつひに無制限潛水艦戰となつたのである。アメリカから直接ドイツに入る船舶についても、中立國向けの船舶についても、イギリスは嚴重な取締を行ひ、アメリカの抗議を受くることしばしばであつたが、アメリカのイギリスに對する友好的感情は掩ふことができなかつた。

### （四）イギリスの對ドイツ封鎖

次にイギリスは、ドイツ陸軍が陸戰に於いて國際公法違犯をなして居る以上、强大な海軍力を持つイギリスは海上に於いてこれを充分活用すべしとする國民の主張を抑へて、封鎖勵行を調節してゐた。二五七六年三月外務次官ロバート・セシルを封鎖大臣に任じ、封鎖事務に關係ある機關の統一を計り、封鎖問題に關して中立國との折衝に遺憾なからしめんことを期してゐる。

イギリスの對ドイツ封鎖はその優勢なる海軍力を利用して各水域に於いて行はれた。

オーストリア・ハンガリア海軍の出沒するアドリア海は、イギリス、フランス兩海軍援助の下にイタリア海軍これに當り、オーストリア・ハンガリア海軍をして地中海に南下する能はざらしめ、地中海方面では二五七五年一〇月一六日、イギリス、フランス聯合艦隊はエーゲ海に面するブルガリア沿岸封鎖を宣言し、二五七六年一月にはコルフ島占領後、地中海東部に出沒するドイツ、オーストリア潜水艦を抑へるため、ギリシア沿岸の諸都市を占領した。

(五)　ドイツの媾和提示

ドイツの對イギリス封鎖勵行にも拘らず、戰爭は長期化し國民は漸く疲勞倦怠の色を示し、殊にヴェルダン、ソンム戰の慘狀は國民に深刻な印象を與へ、逃亡兵續出し、封鎖の結果食糧難來りて國民の道徳心惡化し、階級的反目激しく、軍民離間の徴候漸く顯著になるや、ここに政治上、軍事上何らかの手を打たざるを得ない情勢に到達した。二五七六年一二月一二日に於けるドイツの媾和提議が卽ちこれである。

(六)　無制限潜水艦戰の開始

しかるに聯合國がこれを峻拒するやドイツは、戰爭責任を聯合國に轉嫁したる上無制限潜水艦戰を行ふに到つた。ドイツ國民はかねてこれを期待してゐたのであるが、アメリカの參戰を恐れて自重してゐた。

しかし戰局の進展は豫斷を許さず、ティルピッツ一派の强硬論がつひに勝を制し、その決行となるに及んだ。ドイツではアメリカが參戰するとも、無制限潜水艦戰を行へば、これを孤立せしめ得るとの確信を持つてゐたのである。その當初本戰術の効果極めて大きく、豫想せし一箇月六〇萬トン擊沈を遙に突破し、國民は最後の勝利を信じて止まなかつた。

(七)　イギリスの無制限潜水艦戰對策

ドイツの無制限潜水艦戰開始せられるや、イギリスはいよいよその對策を强化した。

(イ)　食糧對策

國内では食糧對策として農産物增産のため、庭園や運動場は掘り返されて、麥及び馬鈴薯の畑となし、婦人、學生は農園に勤勞し、食糧の切符制度を施行し、その節約に盡力した。ロイド・ジョージは「國内で食糧增加を計るには、農民に對し一定年限穀物價格を保證する。一寸の土地も多く耕すよう、輸入節減を計るには國民ができるだけ必要以外のものを節約せねばならぬ。紙類などもその使用を半減すべきである。」と叫んでゐる。

(ロ)　潜水艦防禦對策

潜水艦防禦策としては左の施策がなされた。

1　商船武裝　商船は必ず船首、船尾に六吋以下の砲を各一門づつ裝備すること。

2　驅逐艦　驅逐艦の快速力を利用して敵潜水艦を擊退した。

3　深發彈　曲射砲　これは潜水艦附近に投下し、一定深度に達すると爆發する。

4　聽音機及び飛行機　聽音機及び飛行機を潜水艦發見に利用する。

5　防禦網　一八呎平方の網目を持つ鐵索製の網で、重要なる港灣の入口、または水道に展張す。この網の上端水面に出づる部分に浮標を附し、燐化石灰を裝す。潛水艦が防禦網にかかる時は、浮標は水中に沒し發火する。或は網の上端に爆彈を裝し、艦が網にかかると自働的に落下爆發する仕組である。

## 五　對敵宣傳

### (一)　宣傳機關

イギリスに設置された公式の宣傳機關は、開戰直後外務省に附屬せる戰時宣傳局であるが、その後擴充されて一二五七六年宣傳省となつた。

### (二)　宣傳省の任務

當初は國內の統一を期して對內宣傳に主力を注いだが、反戰分子を除去したる後は專ら對外宣傳に重點を置き、その活動は聯合國中でも最も活潑であつた。これには種種の事情もあらうが、宣傳機關に從事した人材がイギリス第一流の人物であつたことに大きな原因があつたことと思ふ。例へば、ビーヴァブルック、ノースクリフ等錚錚たる人物が宣傳機關の重要な椅子を占めてゐた。

### (三)　對敵宣傳の活用

對敵宣傳に最も活用したのは、小冊子、新聞等である。

#### (イ)　小冊子

小冊子による宣傳には二種あつて、一は敵戰線にある將兵に出來得る限り急速に撒布せるもので、友軍の有利なる點と敵軍內外戰況の不利を列擧して、その士氣沮喪を狙つたものであり、他は聯合國の戰爭目的の正當なる所以と、ドイツの軍國主義、帝國主義を罵倒し、その反戰氣運を釀成せんとしたものである。

#### (ロ)　新聞

新聞には虛僞新聞と稱する極めて巧妙なるものを編輯發行し、讀者たるドイツ軍兵士をして恰も自國に於いて發行されたるものの如く感ぜしめ、宣傳効果を擧げんとしてゐる。また俘虜の一部の者を優遇し、その狀況をドイツ軍兵士に通信せしめ、戰線よりの離脫を使嗾する等の方法も採用してゐる。

### (四)　宣傳內容

次にイギリスが戰爭中なせる宣傳內容を檢討すれば概ね左の如くである。

#### (イ)　戰況報道

開戰後直ちに戰況報道は政府の宣傳機關によつて統一的に行はれてゐる。不利なる戰況は極力これを隱蔽し、國民の士氣の弱化すること無きを期してゐる。國內には自國の有利を宣傳すると同時に、對敵宣傳としては敵の不利なる點を强調する。さうしてこの宣傳は可及的信用度の大なるを要する。初めに信用せしめておけば爾後の効果は大となる。卽ち豫め自國の宣傳の信用度を高めておけば敵の損害を事實より誇張するも、敵の戰爭意志を挫折せしめ得るのである。

#### (ロ)　戰爭目的

イギリスの戰爭目的はドイツ帝國主義打倒、ドイツ皇帝の世界征服野心覆滅にあり、ドイツは列國共同の敵なりとして理想主義的旗幟を掲げた。即ち、「ホーヘンツォレルン家のドイツを支配する間は斷じて媾和せず。しかしてドイツ國民は、これよりして媾和の第一障碍の何たるかを知らん」とし、或は「ドイツ國民にして媾和せんと欲せば、國民自ら政權を掌握せざるべからず」、「ドイツ國民にして軍閥と手を切らば媾和條件を示さん」と言へるが如きは、ドイツ支配階級と國民との離反を策するものであらう。また聯合國に捕はれた俘虜をして、戰線にあるドイツ兵に次の如き書信を發送せしめてゐる。

「戰爭を起したのは好戰的軍人、皇帝、貴族、それに武器商人である。國民は平和を欲してゐる。イギリス、アメリカ、フランスが戰ふのは暴虐なるドイツ軍閥からベルギーとセルビアを救ふためだ。戰爭はもう止めよう。諸君の大砲を後に向けよ。それを妨げる者は射殺しろ」と。その他あらゆる機會にイギリスの爲政者は自國の戰爭目的を闡明し、ドイツを非難して居る。そしてこの宣傳は相當効果的であつたと思はれる。それはイギリスの戰爭目的が極めて明瞭なることと、その内容たる謂はゆる民主主義なるものが世界の大勢を支配してゐたものであると共に、被宣傳性の本質たる人間のセンチメントに訴へる魅力を持つてゐたからであらう。これに反し新興國家として發展せんとするドイツの戰爭目的は、たとひ防禦戰爭、ドイツ民族解放戰爭と稱しつつも、攻撃的、侵略的であつた點は極めて不利であつたと言ふべきであらう。

### （六）殘虐宣傳

ベルギーの中立を侵犯せるドイツ軍の行動に關する宣傳である。非戰鬪員に對するドイツ軍の暴行の露骨な報道は、ヒステリックな平和主義者、特にアメリカの人心を刺戟すること大であつた。死屍による脂肪製造事件の如き宣傳は「ドイツ人は科學的である」と言ふ普遍的なドイツ人觀を利用し、國家のため斃れた戰死兵の屍體を、動物の屍體同樣に取扱ふと言ふ非人道的行爲を考案して、ドイツ人に對する憎惡の念を高めんとしたものである。これなどは被宣傳者のセンチメントに訴へた最もよき例であらう。

### （七）絶望感附與による宣傳

敵兵に對し、戰爭と死の恐怖に訴へて、厭戰心、恐怖心を生じさせんとするものである。「銃後にある父母、妻子は飢餓に瀕してゐる。それなのに君は明日知れぬ命を懸けて戰つてゐる。今君が死んで一體何が報ゐられるといふのだ」等がそれである。これも人間の理智ではなく、心の一隅にある感傷を捉へたものである。また戰爭後の傷痍軍人の悲慘な生活を傳へて、厭戰心を唆ることもなされた。

### （八）希望附與による宣傳

死の恐怖によつて絶望感を與へたる後、生への希望として降伏を勸めるのである。これにはドイツの俘虜に手紙を書かせて戰友に送ると言ふ方法を採つてゐる。「進んで投降する者は俘虜として取扱はない。」「フランスには澤山の食糧があり、人間らしい取扱ひを受けられる。」「君が愛する妻子にも會はせてやる。」などと言ふ類で、絶望と希望とを交錯せしめ、人性の機微に觸れた宣傳の妙と言へよう。

(一)　國內離反宣傳

エルザス・ロートリンゲン地方に對するドイツの差別待遇を誇張して、その離反を策して居る。

バイエルンとプロイセンの反目を窺つて、プロイセンのバイエルンに對する高壓的態度や、ドイツ軍のバイエルンに於ける行動を非難したりする。「プロイセン軍閥や貴族の利益のために戰ふ必要が何所にある。君達はプロイセンの奴隸である。プロイセンの壓制から脫する時平和は來るのである。」

南北ドイツの對立を目的として、南ドイツでは食糧不足であるのに、北ドイツでは豐富な物資があると宣傳したり、ヴェルダンの爭奪戰では、初めバイエルン皇太子軍が惡戰苦鬪して戰果を擧げた處へ、プロイセン軍が出かけてその戰功を恰も自軍のあげたものの如き態度をとつて居ると言つて、プロイセンとバイエルンの國內離反を狙ふのである。

(五)　宣傳方法

次に右の如き宣傳は如何なる方法で行はれたか、新聞、小冊子を爆藥仕掛けの發射管で敵戰線內に撒布したり、或は飛行機を使用したこともあるが、人命の危險多く、浮遊氣球では適時適所に宣傳物を投下し得ないので、導火線や時計仕掛けで宣傳物を投下する宣傳用氣球を製作して居る。特異な方法としては、ドイツ國內の食糧不足を利用して、宣傳文を混入したソーセージを作り、これを中立國を經由してドイツに送付したこともある。

六、イギリスの對敵謀略

(一)　イギリス間諜の活躍

イギリスの間諜は戰前よりドイツ海軍の情勢、陸軍の機密を偵知したり、特に他日の經濟戰を豫想して、商業關係の調査に力を入れ、これに對し、在外實業家は諜報機關に援助を惜しまなかつた。

(二)　防諜に對するドイツの地理的不利

ドイツ國內は警察區域が聯邦の國境により七つに分れ、統一なきため取締困難であつた。地理的に見ても、ドイツは各國交通の途に當り、國境に異民族を多く持つてゐたことは、敵諜報機關の活動に有利であつた。現ナチス・ドイツの如くすべてを國家に獻ぐると言ふ獻身的精神に於いて、また國民全體の軍事知識の普及の度合に於いて缺けるところのあつた當時のドイツに在つて、機密保持に萬全を期すること極めて困難であり、特に官吏の俸給が少なかつたことは、イギリス諜報部のよき誘惑手段であつた。

(三)　對ドイツ謀略の基地

地理的にドイツの南北にオランダ、スウィスと言ふ中立國があつたことは、防諜上ドイツに非常に禍して居るのである。イギリスはこれら二國を宣傳基地として利用したからである。

(イ)　スウィス

スウィスは地理的條件の他に、ドイツの亡命者が多く此所に逃れて來てゐた。在スウィス、イギリス公館を策動の根據地として、亡命者、出版業者を買收して反ドイツ宣傳を行つた。ドイツ國內に旅行する者や、國境を越えて每日通勤する人人、學童などによつて宣傳文が持込まれた。

スウィスからドイツ國内に潜入した間諜は、社會民主黨員などと結托し、戰線にある軍人、未亡人、勞働者に働きかけ、反戰宣傳、革命宣傳を行つた。

(ロ) オランダ

オランダにはスウィスに於けるより以上にドイツ軍の逃亡者、亡命者が多く、彼らは皆反帝政分子で活潑な反戰運動を行つてゐたから、イギリスはこれに援助を與へて利用したことは言ふまでもない。ドイツに潜入した間諜は、俘虜となつてゐる聯合國兵士や外國勞働者を煽動した。怠業、工場、倉庫の放火、機械、鐵道の破壞、農作物の播種收穫の妨害、家畜の傳染病誘發、また菓子、チーズ、齒磨粉等の中に宣傳文を入れ、破壞行爲を使嗾し、成功には賞を以てし、一〇萬マルクの賞金を賭けたことすらあると言はれる。これらの事實は、俘虜、外國人勞働者處遇に當つて考慮を要する問題と思ふ。

(四) 對ドイツ經濟謀略

經濟謀報はイギリスの極めて得意としたところで、情報部長コックリル將軍は、戰後離職に際し、その部員の勞を謝したる後、「敵國貿易の破壞に關しては卿等の情報は最も價値あるものであつた。殊に中立國船内にある敵貨の發見は機敏に行はれ、敵國貨物の輸送を妨げたもの七〇〇〇萬ポンドに達し、敵の海外貿易はこれによつて全部破壞された。」と言へるのを見ても、その活動の程が窺へる。

(五) イギリスの防諜施策

イギリスの防諜施策を簡單に見れば左の如きものである。

(イ) 外國人檢束條令

外人追放、上陸地指定、檢束、及び旅行制限をなす法令である。

(ロ) 國防條令

防禦港附近住民の立退き、車輪、ドック等軍需品徵發、通信差止、逮捕狀を要せざる拘禁、出版檢閲强化、恐慌、不平、暴動煽動者の嚴重處分、特殊地域に於ける犯罪の軍法會議廻附、傳書鳩の使用制限、國際關係を障害する恐れある言論の取締强化を圖るもの等である。

(六) ドイツの謀略對策

以上の如きイギリスの宣傳謀略に對しドイツは如何なる對策を採つたか。

(イ) 宣傳機關

ドイツの宣傳機關としては、戰地及び内地に對しては、參謀本部の新聞班、軍港地方は海軍軍令部、ベルギー、ルーマニア、東部占領地は中央警察がこれに當つた。

(ロ) 軍部の宣傳認識の不足

ドイツの宣傳に關し、その規模内容をイギリスのそれと比較する時、極めて貧弱を免れなかつた。これは軍部の戰爭指導者に廣い總力戰的認識を缺き、戰爭を單に武力戰としてのみしか理解し得なかつた認識不足に基くものと解し得よう。

(ハ) 宣傳の被宣傳性への乖離

戰爭長期に亘りイギリスの宣傳活動に苦しめられたドイツは、漸次その對策を採るやうになつた。しかしその內容は徒に精神動員的のもので、今更の如くに國民の愛國心、カイザーに對する忠誠心を鼓吹するとか、或はイギリスの宣傳謀略に對する反駁辯明に努めると言ふ有樣で、被宣傳性の本質たる人間の感傷に訴へることを避け、專ら說得的な方法を以て臨んでゐる。またその機構に於いても、イギリスに對抗し得るやうな大規模なものではなかつた。

(ニ) 新　聞

イギリスの新聞が、右翼系のものはドイツの野心を指彈して自國及び中立國民の戒心を求め、左翼系のものはドイツ民心の乖離を指摘し、いづれもよく戰爭遂行に協力したのに反し、ドイツの新聞經營者が政府と反目して、政治經濟上の內部的紛爭や、同盟與國間の意見扞格を暴露して輿論を分裂せしめたる如き、言論機關と當局との協力の必要を痛感せしめるものである。

(ホ) 宣傳の遲拙

宣傳には迅速果敢なることが重要なる要件である。敵の迅速なる宣傳に先手を打たれた時は、辯明的反駁をなすよりは寧ろ沈默して、次の手段を講ずべきであらう。しかるにドイツの宣傳はイギリスに比し多分に追隨の嫌ひがあり、遲拙を免れなかつた。

これを要するにドイツの宣傳は、その規模、內容に於いてイギリスに劣つてゐた。「ドイツは宣傳戰に敗れたるが故に戰敗を喫した」と言ふドイツ軍人の言は必ずしも責任回避の言ではない。

## 第二節　對內方策とその遂行

### 第一項　概　括

一　二五七四年度

(一) 概　括

歐洲戰爭開戰第一年の二五七四年に採つたイギリスの對內方策は、平時に於ける打算主義政策を放擲して卒然戰爭に參加したとは言へ(八月三日參戰す)、戰爭準備の不足、內外態勢の不整備は覆ふことは出來ず、戰爭長期化の見透は勿論、總力戰態勢の切換は充分になされたとは言ひ得ない。

開戰當初の政界を見るに、首相は下院の野黨、自由黨の總裁アスクィスにして、閣僚もその領袖が殆んど占めてゐた關係上、首相の最も心したことは閣內の一致と黨の結束であつた。從つて政府の對內方策の重心も閣內の一致、議會の結束に向けられたことは怪しむに足らない。

(二) 自由黨內閣

(イ) 內閣の成立

當時のアスクィス內閣は殆んど自由黨員のみによる單獨內閣であつた。二五六八年春、キャムブル・

バンナーマンの病むや、下院總務兼攝藏相アスクィスが後を享けて首相となつた。當時は歐洲戰爭勃發の前夜とも言ふべく、實に內外多事の時期であつた。卽ち外にはイギリス、ドイツ兩國國策の角逐を中心に、造艦競爭、アガヂールの危機、バルカン戰爭あり、內には上下兩院の抗爭を始め、勞働爭議、婦人運動、アイルランド問題等幾多の難問が繼起してゐた。ために些少の閣內の相剋及び閣僚の更迭も必要とせられたが、アスクィスの當初の根本方針は動かず、組閣（八月）の主なる顏觸は次の如きものであつた。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 首　相 | アスクィス | 陸　相 | アスクィス兼攝 |
| 大法官 | ホールディーン卿 | 海　相 | チャーチル |
| 藏　相 | ロイド・ジョージ | 商　相 | バーンズ |
| 外　相 | エドワード・グレイ | 農　相 | ランシマン |
| 植民相 | ハーコート | 文　相 | ビーズ |
| 印度相 | クリュー侯 | 土木局總裁 | エモット卿 |
| 內　相 | マックンナー | | |

六月二四日、サラエヴォ暗殺事件の報が傳つたとき、イギリス內閣は、自治案を繞る內亂寸前のアイルランド問題に沒頭してゐたので、オーストリア皇太子の急逝は、イギリスには緣遠い出來事として耳朶にすら觸れなかつたが、七月二四日のオーストリアの對セルビア通牒、その後の外相グレイの平和調停失敗は耳朶を越えて鼓膜をゆすぶつたのである。

### (ロ) 閣內の對立

閣內には參戰を繞つて三つの意見が行はれた。第一は、戰爭は舊態依然たる歐洲大陸戰爭なるを以て、イギリスは介入の必要なしとするもので、主張者は國璽尙書のモーレイ卿を初め、樞相、藏相、植民相、文相、スコットランド相等閣員大多數の意見であり、第二は、戰爭介入は必要となるであらうが、その場合の行動は海上に限るとなす論であり、第三は、外相グレイ、海相チャーチル等の提案によるイギリス帝國傳統の勢力均衡說で、フランスの沒落、ドイツの歐洲制覇を阻止すべく、イギリスは戰爭介入に當り、大陸に於ける勢力の均衡と睨み合すべきであるとの少數意見である。

アスクィスはこれらの三意見に對し、內閣の分裂を怖れて自己の意見は發表せず、愼重を期してゐたが、八月三日のドイツ軍ベルギー侵犯の事實に直面するや、はじめてその態度を闡明した。その結果閣員中に三、四辭退を表明した者もあつたが、結局モーレイ卿及びバーンズ兩相の辭職にとどまつた。

### (ハ) 議　會

議會に在つては、與黨自由黨は、はじめ約半數の參戰反對が豫想されたが、二五七四年八月三日の下院に於けるグレイの演說は、これらを參戰陣營に導入することに成功した。自由黨と對立關係にある統一黨も、八月二日黨首ボナ・ローの名を以て政府に對し、黨爭の中止と政府支持とを通告し、參戰に同意した。またアイルランド黨は過去に於ける紛爭を一擲して、黨首レドモンドは「政府はアイルランド

駐屯軍の全軍撤退をなされたし」との申入れをなし、事實アイルランド南部の武裝せる國民黨及び舊教徒と北部の武裝新教徒との握手も行はれた程である。勞働黨も亦黨首マック・ド・ナルドの絕對反對のみを除いて、殆んどすべてが參戰に贊成であつた。

（四）國　民

イギリス國民は理論による行動を欲せず、事實によつて本能的に行動する國民性を所持してゐる。即ち情況の發展展開を熟視しつつ、それが自己の主張及び利害に合致するや否やを愼重計量したる後に於いて漸く事を決し、猛然として行動を開始する。またイギリス人は、平素人から指導されることを欲せず、獨立不羈にして論議縱橫、容易に人に屈せざる一面も持つてゐる。しかし一度國家が危急に直面するやよく協力一致、自己の選んだ指導者の統制に服する美點を有することを忘れてはならない。

さればイギリス國民の開戰直前に於ける動向も大體に於いて內閣のそれと同じく、最初は狐疑逡巡したが、後には翕然として戰爭に協力したものと見ることが出來よう。事實八月一日より四日までの間、參戰及び反戰を續つて小規模な抗爭があつたが、宣戰布告後はバッキンガム宮殿前に集合し、露臺に現はれた國王に對し忠誠を誓つてゐる。

（五）外　地

イギリス帝國の自治領、植民地、印度王侯等の外地は、戰爭勃發と共に本國政府に對し、絕對忠誠の誓約と激勵の電報を發し、その態度を闡明してゐる。

かくて開戰當初內閣、議會、國民、更に外地を結ぶ國內戰線の統一はほぼ完きを得た。これは內的には、首相アスクィス及び外相グレイの辣腕に歸することが出來、外的にはドイツ軍のベルギー侵犯がイギリス軍官民の統一を促したことは見逃せない。

（六）戰爭準備

イギリスは自ら歐洲の裁定者を以て任じ、將來大陸の雄ドイツと事あるべきを豫想したにも拘らず、その戰爭準備は不充分を免れなかつた。卽ち海軍は大演習の直後とて直ちに戰鬪準備に移り、それぞれの基地に待機したが、陸軍は未だ本格的な準備すらなされてゐなかつた。

（イ）陸　軍

1　ホールディン陸相

これより先陸相ホールディンは編成を急ぎ、派遣軍及び地方軍に二分し、他方精緻なる動員計畫を樹立したが、當時イギリス陸軍の現役兵力は一六萬、裝備、訓練に於いても歐洲列强陸軍に比し著しい遜色があつた。かく見る時、イギリス陸軍としては、當時官民の期待とは別に、歐洲戰に介入する戰備の不足から參戰の確乎たる自信がなかつたと見てよい。

しかしドイツのベルギー侵犯はイギリスの參戰を促し、對ドイツ宣戰とともに、政府及び國防委員會（パルフォア內閣時代に誕生）は活潑に活動し、陸軍當局も八月五日派遣軍の卽時出征を決行し、六日より二〇日までの間に六箇師團約九萬の軍隊が自國海軍の手により、フランスに渡された。同時にイギリス本國は、先に二

分された地方軍が防衛に當つた。

2　キッチナー陸相任命

派遣軍出征の八月五日、キッチナーが新たに陸軍大臣に任ぜられた。彼は本戰爭に對し、殆んどすべての人人が短期戰を豫想したときも、少くとも三年は繼續するとその長期戰化を喝破し、またフランスのジョッフルがドイツ軍の進擊方向を誤認したとき、その北西部から來ることを警告したのも彼であつた。從つてその陸相就任は當時國民の輿望に副つたと言ふべく、戰意昂揚に裨益するところ大であつた。

キッチナーは先づ第一に、陸軍兵力の飛躍的增强を計つた。彼の人望はここにも反映し、夥しい應募者を得て、募兵成績は最初の月に於いて三〇萬を突破、更に五〇萬、つひに一〇〇萬に達した。

3　軍需品

イギリス陸軍は、カイザーより「一握の小粒」と蔑言された如く、その兵器廠、重砲數、砲の口徑、機銃數に於いてドイツ軍に較べ遙かに劣つてゐた。就中機銃の如きは、ドイツ軍が一箇大隊一六挺を有するに反し、イギリス軍は二挺、砲彈もドイツの强力爆彈に對して僅かに榴散彈を發射し得るのみであつた。されば派遣軍總司令官フレンチは、開戰後間もなく彈藥の不足を告げたが、陸軍省はこれが補給は勿論、その對策に於いても常に敏速を缺いた。

このとき軍需品生產の增强に力を盡したのが藏相ロイド・ジョージであつた。彼は藏相としての臨時緊急措置を講ずるや、直ちに軍需品の不足に着眼し、その具體策として九月に軍需委員會の設置を提唱した。

4　軍需委員會

この委員會は陸、海、藏、內務、農、商の各大臣及び前陸相ホールディンを委員として二五七四年一〇月より活動を開始し、兵器廠、民間大會社は勿論、海外自治領、更にアメリカにも發注を行ひ、後にはその範圍を國內の個人工場にも及ぼし、二五七五年春には契約會社數實に二五〇〇にのぼり、陸軍の軍需を急速に充足するに至つた。

(ロ)　海軍

二五七四年八月二日、海軍は海相チャーチルの英斷により、閣議決定に先立ち旣に動員され、對ドイツ六割五分の優勢を持して基地に待機してゐた。元來イギリス帝國の安危は、大陸の勝敗や海外植民地の戰爭によるものでなく、一にドーヴァ海峽を繞る制海權の確保にあつた。從つて海軍の最大任務も亦、ドーヴァ海峽を中心に大陸を封鎖し、イギリス本國の逆封鎖を徹底的に排除することに歸する。かかる任務を達成すべく八月三日海軍司令長官にジェリコウが、軍令部長に七四歲の老提督フィッシャーが任命された。

(七)　財界

ロンドンが世界金融の王座を占めてゐただけに、戰爭勃發直前、殊にオーストリアの最後通牒以來イギリス財界は微妙なる動きを示してゐたが、二五七四年七月三一日株式取引所はつひに取引を停止した。

また イングランド銀行總裁カンリフは商業界を代表して政府に對し、戰爭反對の旨を表明するなど、相當の波瀾紛糾あるを思はせた。これに對し藏相は、八月二日が偶然銀行休日なるを幸として、一箇月の支拂猶豫緊急令を布告、同月三、四、五、六日の四日間を更に休日に加へてこの間に急遽對策を樹立せんとし、政府、專門家、銀行家のみならず、反對黨の前藏相チェンバレンとも協議の結果、新紙幣の發行、銀行條令の停止等を敢行して巧みに危機を潜り抜けた。

八月六日首相はまた追加豫算以外に、陸海軍事費をはじめ、廣く食糧、交易、交通等一切の用途に辨ぜんがために一億ポンドの臨時費を下院に要求し、その承認を得た。

### (八) 國防令

かねて國防會議によつて定められた戰時狀態への移行手續は完全に運行し、開戰第二週には、國防令はじめ種種の法案が可決され、內政の混亂を防止することが出來た。

國防令は一五七四年末及び翌一五七五年に於いて三回も更新擴張され、具體的には國家の工場管理權が伸張されることとなつた。

## 二 一五七五年度

### (一) 概括

昨一五七四年九月六日のマルヌの會戰による反擊が奏効し、ドイツ軍はバリー進擊を中止し、シュリーフェン計畫に基く短期戰處理は漸く困難を覺え、戰爭は長期戰的樣相を呈するに至つた。さればドイツ軍參謀總長ファルケンハインも好機を見て聯合國側と媾和締結すべきを政府に進言してゐる。

イギリスにあつても開戰當初の國內の凹凸漸く平均し、「仕事は平素の如く」の態度を持し、一五七五年に入つてから特有の粘着性を發揮し、戰爭遂行も眞劍嚴肅を旨としてゐる。この意圖を持つ一五七五年に於けるイギリスの對內方策の經緯を辿るならば概ね左の如くである。

### (二) 東方作戰論

ロシヤの慘敗、トルコの敵側參戰、西部戰線の膠着、この連續的窮境を打破することが一五七五年年頭に於けるイギリス政府竝びに統帥府の最大問題であつた。一五七五年一月一日、藏相ロイド・ジョージは一の覺書を起草し、內閣に廻覽した。それは西部戰線に於いて徒らに犧牲多き消耗戰を繼續するよりは、フランス派遣軍總豫備隊を撤退、バルカンに轉送し、ここに於いて對オーストリア作戰に從事せしめ、以て連續せる苦境打破を敢行せんとの計畫であつたが、到底フランスの同意を得べしとは思はれず、また實際キッチナー陸相及びフレンチ總司令官の反對に逢着し、つひに實行されなかつた。しかしこれを契機として、以後謂はゆる東方派、西方派の對立が生じ、常に閣內物議の種子となつたことは事實である。

その後東方派の海相チャーチルが提唱したダーダネルス攻擊は、先に實現を見なかつた東方作戰論の具體的な試みとして、軍事協議會(一五七四年十二月設置)も小規模作戰なる條件の下にこれが承認を許容した。しかるに一五七五年三月一八日、最初のダーダネルス艦砲攻擊が失敗に歸したので、止むなく陸軍出兵となり、作戰も大規模なものとなつたが、所期の成功はこのときも期せられなかつた。西部戰線の澁滯を東方

作戰に求めたに拘らず、何ら得るところがなかつたため、政府始め國民の失望には大なるものがあつた。

(三) 自由黨內閣の崩潰

(イ) フィッシャー提督の辭表

ダーダネルス攻撃の失敗で政府及び統帥府が異常な困難に陷つてゐる最中に、海軍軍令部長フィッシャーが、チャーチル傘下に在つて最早これ以上ダーダネルス作戰に深入りするを欲せずとの理由を盾に、五月一五日突如辭意を表明した。

イギリス帝國は戰爭遂行の最中に在つて政治と統帥を繞る衝突に直面し、政界は極度の緊張と活氣を帶び、自由黨內閣は崩潰の止むなきに至り、須臾にして强力な聯立內閣の成立となつた。

(ロ) 彈藥不足問題とフレンチ將軍

自由黨內閣を瓦解せしめたもう一つの原因は、彈藥の不足と派遣軍總司令官フレンチと政府との摩擦の問題である。

二五七四年僅か一〇萬に過ぎなかつた派遣軍兵力は、二五七五年に入るに及んで上昇の一路を辿り、五〇萬に垂んとし、更に多數の志願兵の訓練が行はれてゐた。從つて兵力の上昇に對應して、武器彈藥の生產增强が圖らるべきは言ふまでもない。ロイド・ジョージはこの莫大な武器彈藥の需要に對し、兎に角戰前生產高の約二〇倍に增加したが、なほ前線の要求を充すに足らず、政府は砲彈不足の問題で常に攻められてゐた。



これに加ふるに派遣軍總司令官フレンチは、自己の積極作戰に發する三月及び五月のヌーヴ・シャペル、フェスチュベールに於ける攻撃の失敗の原因を彈藥の不足に歸し、陸相及び政府の怠慢が國家有爲の青年をドイツ軍無盡藏の砲彈下に殺したと非難した。そして更に同じ言を現地慰問の代議士初め言論關係者に語つた許りでなく、二名の參謀將校をわざわざ本國に派遣して、ロイド・ジョージ及び反對黨領袖に訴へしめてゐる。反響を呼んでか新聞界もこの問題を取上げ、中にもロンドン・タイムズのキッチナー攻撃は最も猛烈を極めた。

(ハ) 統一黨

在野の統一黨は開戰と共に黨爭を中止し、只管國內戰線の同一歩調に協力して來たが、與黨の率ゐる自由黨內閣が彈藥問題で論難の的となり、今また軍令部長の辭表問題で手古摺つてゐるのを見るや、黨首ボナ・ローは默し切れず、先づロイド・ジョージに面會して內閣改造の下相談をなし、聯立內閣案を進言して直ちにアスクィスの承認を得てゐる(備考參照)。

要するに聯立內閣の出現は、單なる黨內の黨爭中止のみならず、自由、統一兩黨の黨派的爭議の消滅乃至は黨爭休止の自然的歸結として起つたと考へることが出來る。兎に角戰爭遂行上兩黨の合體が必要だつたのである。

備考

ボナ・ローよりアスクィスに宛てたる書翰(一九一五年五月一七日)

拜啓　フィッシャー卿辭職の由、ランズダウン卿竝びに小生ともに遺憾至極に存候。拙方上記事實の公開討論に及ぶまで下院休會は不可能と結論致居候。更に拙方政府今後の政策に關しても貴意より明言ある可く、その時期到來せしものと確信致候。拙見するところでは、戰爭終結の成功的指導と國民信頼の獲得のためには事態は現狀維持を許さず、政府組織に何らかの變更改造を加ふること不可避と存ぜられ候。

しかしてイタリア情勢に鑑み、當今下院に於いて反對論の惹起を見るは殊に好ましからぬことに御座候條、貴意にして意中御辭酌被下、必要手段に加へフィッシャー卿の辭職方差詰め御遷延被下候はば、拙方堅く沈默を守るものに有之候。しからずんば小生本日フィッシャー卿辭任の眞否を質問のため參上致し、卿の辭職よりして惹起さるべき事態につき、一日の討論を要求致すものに御座候。右貴意得申度候。敬具

五月一七日

アスクィス殿

ランズダウン邸にて

ボナ・ロー

（ニ）チャーチル

紛糾のもとたるダーダネルス作戰の提唱者海相チャーチルは、最初はフィッシャーの辭意を輕く考へてゐたが、その決意のただならぬと知るや更迭の止むなきを覺悟し、後任にサー・アーサ・ウィルスンを定め、その旨首相にも報告をし、その贊同を博し得るものと考へてゐた。ただ議會だけは相當峻烈に攻撃を加へ來るであらうが、それも結局は切拔けられるものと高をくくつてゐた。

ところが實際は海相たる自分は勿論、首相アスクィスに飛火し、內閣の崩潰にまで及んだのである。

（ホ）軍需省設置案

軍令部長の辭表を繞る事件は海相チャーチルの退陣、延いてはアスクィス內閣の瓦解、聯立內閣の成立と一應は片付くのであるが、統一黨として見逃し得ないことは、藏相兼軍需委員長ロイド・ジョージの軍需省設置問題である。ロイド・ジョージはかねて論難の的となつてゐる軍需品、殊に彈藥不足の問題は軍の一刻の遲延も許さぬ緊喫事であるに對し、現在の軍需委員會には實力がなく改革の力はない。故にここに强力な實行力を有する獨立官廳軍需省の誕生こそ望ましい（二五七五年五月一七日ロイド・ジョージのアスクィス宛書翰に現へる）と盛んにその必要を力說してアスクィスに迫つてゐる。

このロイド・ジョージ案に呼應するかの如く、タイムズ紙以下有力諸新聞が政府攻撃に筆を向け、就中ディリー・メイルの如きは五月二二日「砲彈醜聞事件、キッチナー卿の悲しむべき失策」と言ふ社說を揭げ、痛罵の限りを致してゐる。アスクィスもここに於いて、ロイド・ジョージ案を諒として軍需品生產を陸軍省から獨立させ、軍需省の設置を決意した。

（四）聯立內閣

（イ）內閣の成立

二五七五年五月一九日、內閣改造の旨は下院に於いて發表せられ——陸軍及び外務兩大臣留任と言ふ但書のもとに——いよいよ本極りになつたのは同月二五日、發表は二六日であつた。主要閣員の顏觸れは左の如くである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 首　相 | アスクィス（自由黨）（留任） | 內　相 | チャイモン（自由黨） |
| 陸　相 | キッチナー（留任） | 藏　相 | マッケンナー（自由黨） |

海　相　バルフォア（統一黨）　大法官　バックマスター（自由黨）
外　相　グレイ（自由黨）（留任）　農　相　セルボーン（統一黨）
文　相　ヘンダーソン（勞働黨）　植民相　ボナ・ロー（統一黨）
軍需相　ロイド・ジョージ（自由黨）

閣員部署配置に當つて自由、統一兩黨の領袖克く和衷協同、常に嚴正なる態度で臨んだが、最後の椅子振當には多少悶着もあり、決裂も思はせたが、自由黨ではロイド・ジョージが、統一黨ではボナ・ローが代表となり、一意進捗せしめ、つひに決着に漕ぎつけた。

閣員決着を顧みるに、先づ第一に大法官ホールディンの退陣である。ホールディンはイギリス陸軍育ての親とも稱され、また首相アスクィス及び外相グレイは政界以來の竹馬の友であるところから、グレイの如きは痛くその下野を嘆いたが、統一黨よりその親ドイツ的なる點と開戰當初の派遣軍動員處理の獨斷の二點を指摘非難されたので、退陣させねばならなかつた。第二は勞働黨ヘンダーソンの文相入閣である。これは擧國一致內閣の立場から注目に値する。次にアイルランド黨首レドモンドの入閣が頻りに傳へられたに反し、事實はさうでなかつたことは、當時に在つてもなほアイルランド問題が充分な解決に至つてゐない證左と稱し得よう。最後に多少脫線的な嫌ひはあるが、頭腦明晰の聞え高かつたチャーチルの海相としての活動が終熄したことである。

### （ロ）閣內の對立

#### 1　ダーダネルス撤退

政局は聯立內閣の成立とともに安定したかに見えたが、閣員を擧國一致の目的から當代一流の人士より選任したので、各自は獨自の主張を持し、互讓委任の點で甚だ候くるものがあつた。これに加ふるに新任者は常套的に從來の事情經緯を知悉せんとしたが、刻下の急はかかる悠長さを許さなかつた。更に擧國一致の體制とは稱するものの、依然各自はその母胎たる黨派より脫却しきれず、それがともすれば頭を擡げてくるのであつた。

閣內龜裂最初の徵候はダーダネルス撤退を繞つて萌した。撤兵派はボナ・ロー以下一連の統一黨閣員であつて、ドイツ軍がトルコとの連絡に成功の曉は、是が非でも撤退は敢行されねばならないのであるから、それに先立ち一日も早く撤收完了すべしとの意見である。これに對し、今引揚ぐることはイギリス帝國の威信の失墜である。トルコに敗戰したとあつては他の東洋民族、インド、エジプトに影響するところ甚大ならんとするもので、陸相キッチナーを始めとし、三、四の統一黨出身の植民地統治に經驗ある閣員であつた。この問題にもアスクィスは例の如く、分裂回避に必死の努力を傾けたが、九月に入りブルガリア參戰の結果、セルビア救援のためサロニカ出兵說が起つたので、下火になつてゐたダーダネルス撤退問題も再燃することとなつた。一〇月檢事總長カースンが、內閣のセルビアの見殺を理由に突如辭職し、引續き一一月に入りボナ・ローは辭職を以て撤兵を迫つたので、已むなくアスクィスは陸相キッチナーを現地に派遣せしめたが、一一月一五日引揚げの勸告があつた。

2　軍事委員會の更新

二五七五年六月聯立內閣成立と同時に、ダーダネルス問題のため軍事委員會が設置されたが、會員多數のためその運營に敏活を缺くうらみ尠しとしなかつたので、一一月一一日陸相キッチナー、外相グレイ、植民相ボナ・ロー、軍需相ロイド・ジョージ等を主班とする少數の强力なる委員會に更新された。新委員會は一一月二三日熟慮の結果ガリポリ撤兵を決議した。ここに於いてチャーチルは失敗の責任をとる意味と軍事委員會員除外の失望とを含めて、ダッチ公尙書を辭して野に下つたのである。

(五)　軍　部

(イ)　參謀總長

二五七五年一二月サー・ウィリアム・ロバートソンが新に參謀總長に任ぜられた。參謀本部は戰前ホールディンによつて組織されてゐたが、キッチナーの陸相就任とともに殆んど有名無實となり、優秀幕僚は殆んどフランスに派遣分散されてしまつた。キッチナーは作戰、募兵、軍需品、裝備及び人事等一切を獨裁し、かつ軍政軍令の全責任を負ひ來つたが、戰爭が長期化したために戰的樣相はこの獨裁制を許さず、各分野に於いて責任を採る分業制の必要が感ぜられるに至つた。更にまた當面せる戰況の不振はキッチナーの聲望を漸く衰へさせ、また軍需相ロイド・ジョージとの不斷の摩擦は、彼の轉出を促進する要素でもあつた。從つて同年五月軍需省の新設により軍需品部門が陸相の手より離れ、作戰、軍令に關する事項は、ロバートソンの擔任するところとなつた。かくて軍は開戰第二年目にして漸く本格的な參謀本部を組織し、大臣格の參謀總長を擁することとなつたのである。

派遣軍參謀長より參謀總長に拔擢されたロバートソンは卒伍より累進せる生粹の軍人畑出身の人である。自己の信念を盲守することなく偏狹を避け、全局を見透し、また實際家と言ふ堪能練達の士であつた。前海相チャーチルの評によれば、彼は戰術家としての視力は深遠ではないが、戰局見透しの洞察力には熟してゐるとのことである。

(ロ)　司　令　官

參謀本部の更新と共に總司令官にも更迭があり、第一軍司令官サー・ダグラス・ヘイグが總司令官に補せられた。また同時に大陸に在つたフレンチも召還され、本國軍司令官に任ぜられた。フレンチははじめ海軍に從ひ、後陸軍に轉じた經驗に富む將軍で、嘗て南阿戰爭中キッチナーの下に南トランスヴァールの指揮をとつた老練の將軍であり、二五七六年一月一日付で子爵を賜つてゐる。

(六)　選　擧　問　題

この年、卽ち二五七五年七月、政府は地方自治體の選擧を延期し、新選擧人名簿の作成を中止した。常に選擧を繞る深刻なる抗爭を少くとも戰時中は惹起せしめぬと言ふ趣旨に出でたもので、これは必然的に議會にも及び、七六年一月下旬滿了の現議會も亦その存續を五月まで延長した。その後國會はこの延期策を再三再四行ひ、二五七八年の戰勝後はじめて總選擧を施行した。

三　二五七六年度

## (一) 概　括

イギリスが開戰以來二箇年間に施行し來つた對內諸方策に對し、やゝもすれば緩慢、惰性とも稱す可き平時施策的要素が多分に含まれてゐたが、第三年の二五七六年に於いて敢行した方策は全く果斷と言ふ他なく、決戰體制は漸く整へられ、爾來戰爭終熄に至るまでの長期戰指導の確信もこの年に求めてよい。

二五七六年は、外には一月のシャンパーニュに於けるドイツ軍の攻勢をはじめ、二月のドイツ軍のヴェルダン攻擊、五月末日のユトランド海戰、九月のソンムの會戰、續くルーマニアの敗北等聯合軍側、殊にイギリスにとつては劣勢の年であつただけに、イギリス對內施策には迅速果斷にして顯著なものが數多い。就中多年の懸案たりし徵兵問題の可決、アイルランド內亂に對する斷乎たる處置、決戰內閣たる謂はゆる「戰時內閣」を組織し、寡頭獨裁政治の遂行の三方策は最も注目に値するものであらう。

## (二) 徵兵問題

イギリスは未曾有の大戰に突入して二年に亘るに拘らず、なほ募兵制度を維持してきた。その理由は、徵兵制度がこの國の傳統に反することと、戰爭勃發當初の陸相キッチナーの聲望がよく國民の應募心を振起し、軍編成に事缺かなかつたことに因るのである。キッチナー自身も彼を取卷く軍部も、募兵制と自治領の應援で間に合ふ限り、徵兵制施行に伴ふ內紛を惹起せしめるより得策であると考へてゐた。事實募兵制度は過去に於いて、開戰一箇月にして三〇萬、三箇月には九〇萬の兵員を集め成功してゐるのであるが、開戰三年を迎へ戰爭の酷烈化による消耗量と共に、募兵もいつしか行詰まるに至つた。

### (イ) ダービィ案

徵兵制起案の一人にダービィ卿がある。彼の案は國民登錄による一八歲より四一才に至る男子約五〇〇萬の中、壯丁約一八〇萬を未既婚の區別と二、三の階級とに分ち、年少の未婚者より逐次自發的に徵用の誓約をせしめるものである。しかしダービィ案を以てしては、當時軍が必要とする七〇萬人の兵員を獲得することには程遠かつたので、徵兵令施行がその徵溫的態度より强硬態度に進移するのは論理的歸結であつた。

### (ロ) 徵兵令を繞る贊否

徵兵制は軍の絕對的要請にも拘らず、なほ閣內には反對論が盛んであつた。卽ち贊成論者はカーゾン、セルボーン、チェンバレン、ランズダウン、ロイド・ジョージ、チャーチル等の一連の閣員であつたが、サイモン、ヘンダーソンは本質的理由により反對し、藏相マックンナー、及び商相ランシマンは專ら徵兵令に附帶する財政的觀點より贊意を示さなかつた。この贊否を繞る抗爭は政黨を越へて激烈を極め、閣外にも波及し、中でも前檢事總長カースン、ミルナーの如きは、徵兵卽時斷行の急先鋒であつた。

### (ハ) 徵兵制度の採用

首相アスクィスは徵兵問題に關し、ダービィ案提出のとき既に徵兵また止むを得ずと考へてゐた。されば徵兵制を繞る紛爭激化のため、一時はグレイとともに辭職まで決意したが、閣議はつひに斷行に決した。反對を唱えてゐたサイモンは直ちに辭表を提出、ヘンダーソンも亦彼に續かんとした。

ヘンダーソンを閣僚に出してゐる勞働黨の惧れた點は、徴兵令施行と共に勞務者徴用が行はれ、戰時下可決の本制度は戰爭終結後平時に至るも依然續行されることであつた。政府はその杞憂なることを說明してヘンダーソンを慰留し得たけれども、一月下旬下院に該案上程の日、同黨のマック・ド・ハルド、スノーデン、トーマスは最後まで反對した。また自由黨はサイモンに從ふもの約四〇名が反對し、アイルランド黨は最初は不贊成を示したが、その後アイルランドを除外すとの言質を得てその矛を收めた。

しかし徴兵令の施行方法やその細目に關しては依然異論の跡を絶たず、殊にこのため特設した委員會案の閣議による否認などがあつて、四月政府は議會の休會を再度必要とする程紛糾を極めた。

しかし抗爭の經緯如何に拘らず、政府は五月斷乎法令を公布し、一八歳より四一歳に至るすべての男子に對し、一樣かつ卽時に徴兵を行ふに至つた。

(三) 財政問題と閣內の異同

徴兵令に附隨して起つたのは財政問題であつた。藏相マックンナーは、かねてから戰爭は謂はゆる總力戰によつて始めて勝利を獲られることを提唱し、前線に於ける將兵の戰鬪と銃後の兵員軍需品の補給と、與國たる聯合軍各國との連繫を密にすることとの三者の合體を力說してゐたが、その說くところは數理主義を免れないものがあつた。たまたま徴兵令施行と共に、軍は今や國內の男子を自由に使用し得るに至つたので、フランスの切な要求に應へて、かねて理想としてゐた現地七〇箇師團案に着手せんとした。マックンナーはその數理的觀點より該案は財政上不可能にして、赤字が二〇億ポンドに昇れば國庫は破產のほかなしと說いた。

また商相ランシマンも、この案は產業殊に軍需品生產に甚大な影響を與へると共に、該案に基く三〇萬の兵員維持に一週三萬二〇〇〇人の勞働力を要求するに拘らず、現有各工場の供出勞働力は週二萬人程度が最高限なりとして絕對反對を要求した。されども軍はカースン、チェンバーレンの支持の下に飽くまで七〇箇師團案を主張して止まず、更にロイド・ジョージさへこれに左袒して、マックンナーの見積を誤謬なりとして猛烈に攻擊した。そのためかねて軍需相と不和を來してゐた藏相及び商相の辭職は一二月二九日確實となつた。

更にアスクィスを驚かしたのは外相グレイが辭意を洩らしたことである。グレイはさきにホールディンとともに退野すべきを、聯立內閣成立の必要上心ならずも今日まで留まつたが、今やその事情も解消した以上、藏相、商相の辭職と共に外相の更迭も亦人心を淸新にするのではないかと考へたのである。アスクィスは三人を極力慰留し、漸く七〇箇師團案に關する豫算問題は首相、藏相及びチェンバレンの協議に委任することにして落着した。

閣內の軟化を齎らすかに見えた財政問題を繞る紛糾はかへつて國力の再檢討に役立ち、また各省をして協力一致させるに効果があつた。國力はマックンナーの推算よりは實は遙かに餘力があつたのである。

(四) アイルランドの叛亂

(イ) 叛亂の經緯

かく相次ぐ震動の連續に加へ、政府を更に動搖させたのはアイルランドの叛亂であつた。アイルランドに於いては、戰爭勃發と共に相爭ふ南北兩地方はいづれも矛を收めてイギリス本國に忠誠を誓つたのであつたが、九月政府が自治案（自治實施を戰爭終了後とし、北部アルスター地方には修正案を出すと言ふ案）の裁可を仰ぐや餘燼再燃し、統一黨は黨首ボナ・ローを先頭に議場から退出する狀景を演じた。一方南部アイルランド側も、政府が自治案施行を戰後に延期したこと、アルスターに修正を約したこと等を詰め寄り、ために政府は腹背に敵をうける態となつた。またアイルランドの募兵は黨首レドモンドの援助により、はじめ數箇月は好成績をあげたけれども、やがて陸軍省との感情の疎隔よりして減少するに至つた。陸軍省がアイルランド人の熱情を受けいれなかつたため大いに憤り、イギリスの困るときこそ、こちらの付け目だと考へる傳承的な反イングランド思想の包藏者も漸く蔓延してきた。現にシン・フェイン黨、共和主義同盟は頻りに同志を募る一面、アメリカの同志と連絡を密にし、またサー・ロージャー・ケイスメントと言ふ洲前領事の經驗ある人物を通じて敵ドイツとも連絡した。その結果七六年四月二〇日ケイスメントは食糧軍需品を積載したドイツ船に乘じてアイルランドに來り、シン・フェイン黨並びに共和主義者と協力、ダブリン城を攻撃せんとしたが陰謀齟齬し、ケイスメントはイギリス官憲に捕へられた。しかし强硬論者は飽くまで既定方針を遂行した結果、ダブリンに市街戰が行はれるに至つた。イギリス官憲は數日間ダブリン城に籠城、聽て本國援軍の到着によつて叛軍は鎭壓された。

### （ロ）處罰と對策

アイルランド事務大臣セシルは責任を負ふて辭職し、デュークがその後任となつた。アスクィスは自らアイルランドに渡り、叛亂主謀者中一五名を軍法會議により銃殺、一六〇名を禁錮、一八〇〇名をイギリス本國に送ることを決した。その後彼は各地を歷訪視察、自治案卽時斷行の必要を感じ、歸國後ロイド・ジョージにその實行方を委任した。ロイド・ジョージは北部地方代表ラースン、南部地方代表レドモンドとの間をよく周旋善謀した結果、アルスターを除くアイルランド全土に自治を卽時斷行することに一致したが、統一黨閣僚の熾烈なる反對のため進捗を阻まれた。ここに於いて自治案はまたも擱挫し、後年に持越されることとなつた。

### （五）キッチナーの逝去

五月三一日のユトランド沖海戰は制海權の掌握には異常がなかつたにしても、イギリスに多大の損害を蒙したことは事實で、無敵海軍を誇るイギリス國民の自負を著しく傷つけた。國民の一部には失望落膽、士氣消沈するものすらあつた位である。この憂欝の最中にキッチナー元帥は、ロシヤ救援の途上ドイツの機雷に觸れ、ハンプシャー號と運命を共にしたのである。彼は昨今では閣內の聲望も高くはなかつたが、開戰當初に於ける種種の功績と偉大な戰爭指導者としての存在とは國民の心底に深く刻み込まれ、ために國民はすべて彼の死を惜み心から彼を追悼した。

### （六）陸相更迭

陸軍大臣の後任には軍需相のロイド・ジョージがなり、軍需相にはモンタギューが入つた。陸相の地